
COBALT-SERIES
若木未生
翠玉の王
エクサール騎士団
集英社

ロンドンで、婚約者の訃報を受けた時も、エドウィン・アーサーは動揺を見せなかった。彼女は、あくまで上層部が引きあわせた『配偶者』であり、果敢な前任者にほかならなかった。そしてアーサーに、お守りの順番がまわってきた。たった八歳にして、地球破壊者（アースブレイカー）と恐れられる存在――クリストファー・ローデイン・ジュニア。エクサールたちの世界が幼い〝怪物〟のそれとクロスし始めた……。

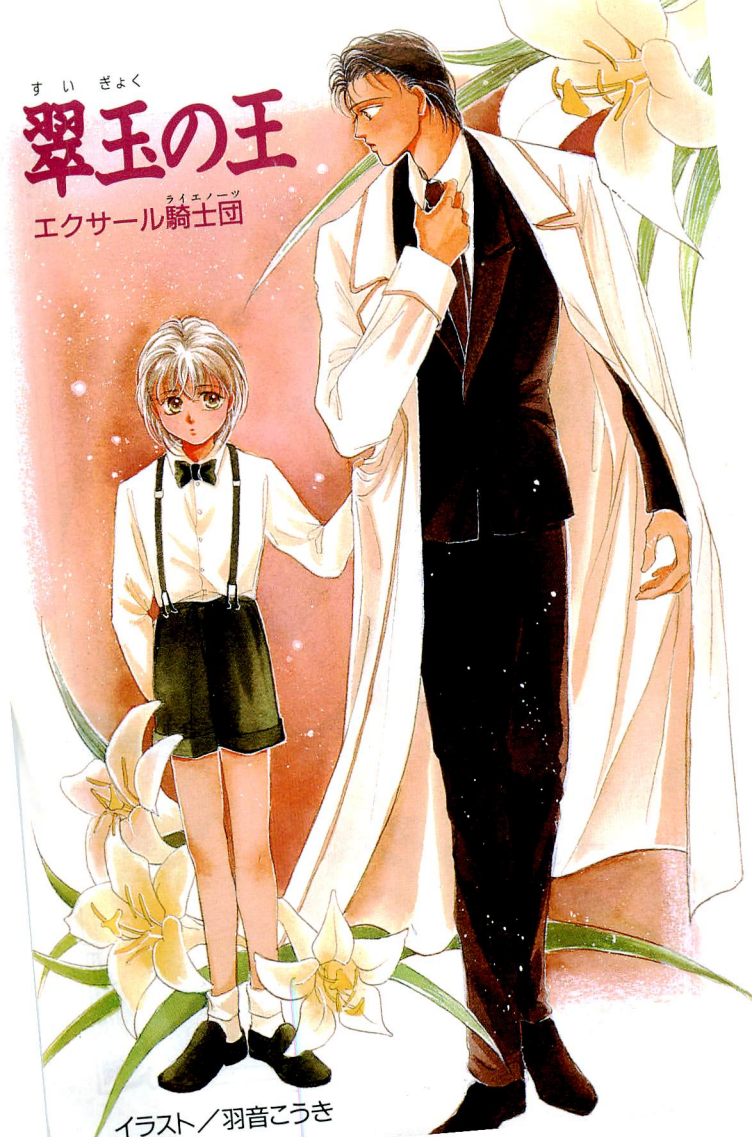
恋気分いっぱいの夢♥小説誌！

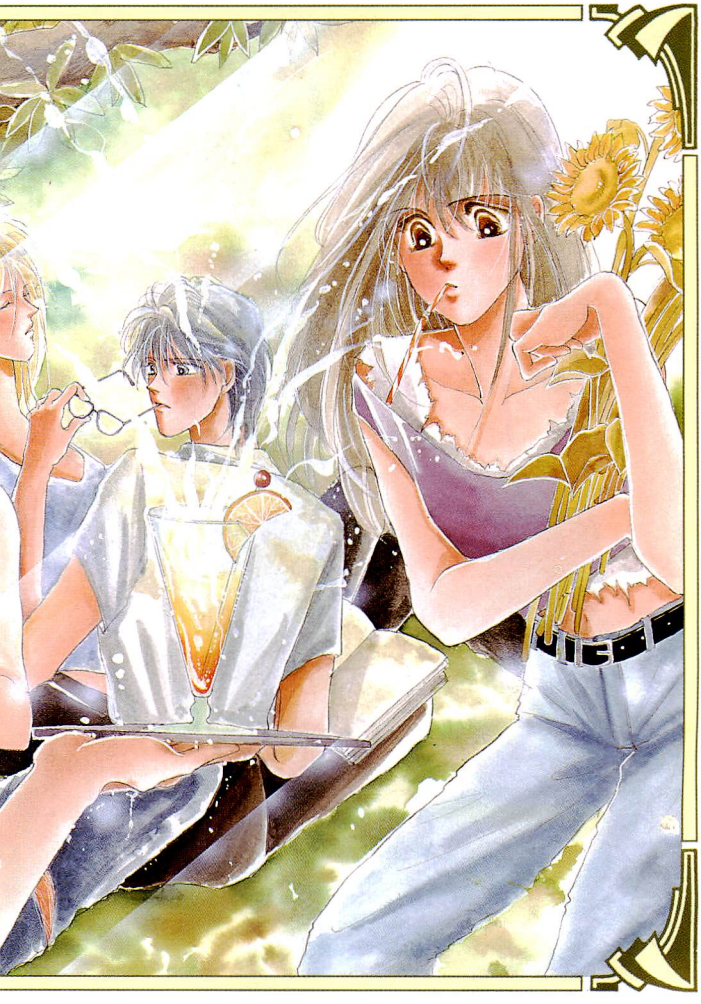
コバルト
Cobalt

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売

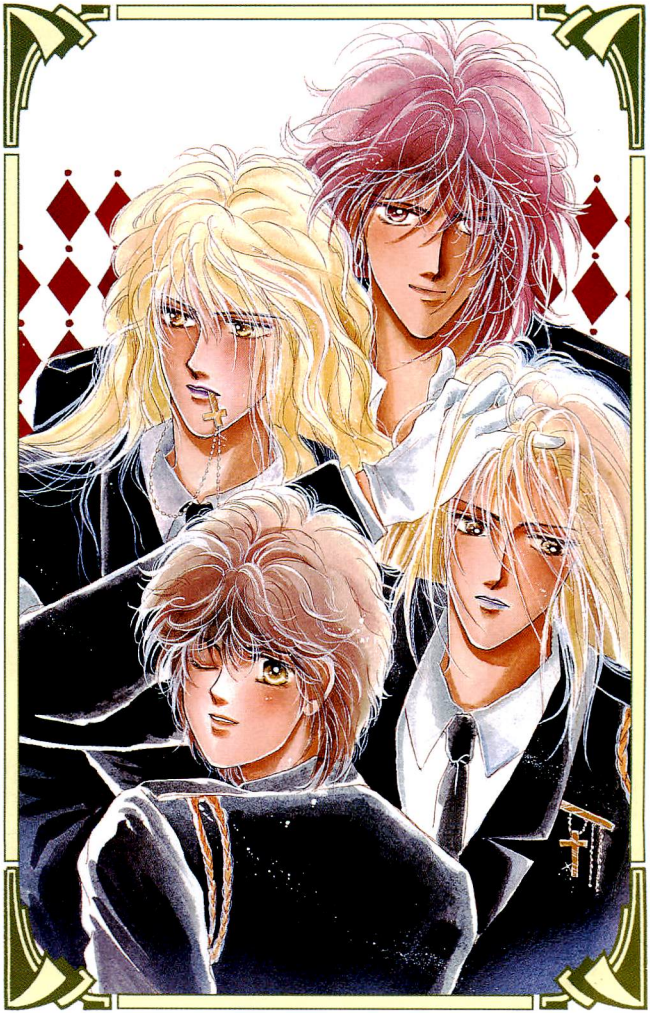
隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。
あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

集英社


翠玉の王
エクサール騎士団
イラスト／羽音こうき


JUICE







COBALT-SERIES

エクサール騎士団（ライエノーツ）

翠玉（すいぎょく）の王

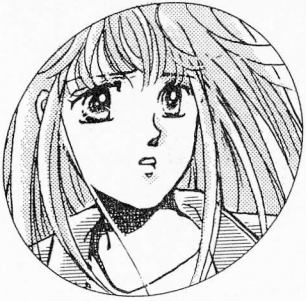
若木未生

集英社

目次

エクサール騎士団（ウィニング）――翠玉（すいぎょく）の王――
あらかじめ失われた恋人 …… 11
翠玉の王（前編） …… 45
翠玉の王（後編） …… 87
ハレアカラ異聞 …… 117
用語解説 …… 195
あとがき …… 197

登場人物紹介



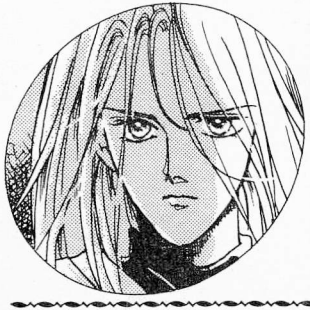
来生(きすぎ)あきら

来生家の長女。異次元の世界〈琅月界(ろうげっかい)〉からやってきた巫女(エクサール)であるが、本人はその頃の記憶を失っている。ディシス、レアの双子のエクサールのうちの妹・レア。



来生　衛(えい)

来生家の長男。またの名をライア。エクサールの守護を使命とするライエスのひとりで、光を操る。優等生ぶっているがかなりのエゴイスト。あきらの正体について、仲間たちをも欺いていた……。



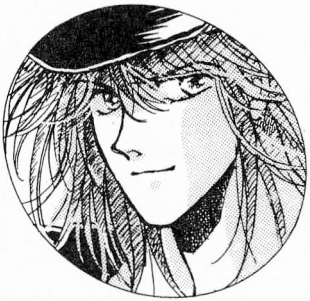
来生　閃(せん)

来生家の次男。またの名をイオ。風を操る守護者である。無口で無表情なため、一見孤高の哲学者ふうだが、実は不器用で口下手なだけだったりする。あきらがディシスであると思い、晶月界(しょうげつかい)で自らを水晶壁に封印する。



来生 貢（みつぐ）

来生家の三男。またの名をユーマ。水を使う守護者。中性的なルックスで、巧妙に母性本能をくすぐるタイプ。イオと同じくレアの守護者であるが、あきらを守るために、彼女のもとにとどまる。



ガディス

またの名をソニー・W・エクセル。炎を使う守護者。ヴァーミリオンの瞳を持つ直情的な異端者。〈琅月界〉が圧壊した際、ライアたちとは別の場所に転移した。クリストファーに恩義を感じ、連絡を保っているが…。



クリストファー

大富豪ローディン家の子息。幼いが、人知を超える強大な精神エネルギーを操る、地球上最強の異能力者。世話役エドウィンの勧めにより世界征服を企み、ライエノーツと礼神官アスヴァルの闘いに介入するが……。

イラスト／羽音こうき

あらかじめ失われた恋人

1

錆色の雨が降りつづいていた。
天上から、まるで彼の身を打ちのめすように。
凍てつく寒さだった。三分もたたぬうちに体温は死人なみに落ちるだろう。おまけに腹と左脚にはついさっきスタームルガーの銃弾が一発ずつくらいこんだばかりだった。永遠の眠りにつくお膳立てとしては完璧だ――
「死神は大歓迎として……」
雨水の溜まったアスファルトに寝返りをうちながら、彼は小さくひとりごちる。
「寒いってのと痛えってのは、考えもんだな……」
じゃらり、と銀の鎖が胸元にこぼれた。主の呟きに同意するような、かすかな音だった。
路地の片隅にころがっている浮浪者くずれの彼の姿を、かえりみる者はいなかった。誰もが足早に、自分勝手に通りすぎる街。あらゆる人種が流れこむ、故郷を失くした者たちがたどりつく土地。
新大陸――と、かつて開拓者たちは呼んだという。

皮肉なエピソードだ。
ヴァーミリオンの瞳を見開いて、彼は薄暗い空を仰ぐ。
自分はフロンティアでもカウボーイでもガンマンでもない。異なる界（アナザーワールド）からの流れ者（エイリアン）だ。今さら new world など望みもしない。この世界中のどこにもたどりつきたい場所などない。
死の寸前に祈りを捧げる相手さえ、もういない。
「ねえ……もう死んじゃってるの？」
不意に、そんな声が雨と一緒に降ってきた。
彼はゆらりと視線だけを動かした。
見えるものすべてが赤いのは、ばっさりと顔にかかった髪のせいだ。錆色の髪を片手の指でかきあげ、うるさげに彼――〈炎使（ほのおつかい）〉ガディスは、傍（かたわ）らに立った女を見た。
細く小柄なシルエット。スウェットスーツのフードからこぼれる焦げ茶の髪。
雨にくもってはっきりと顔はわからない。かすむ目をこらしてわざわざ顔をたしかめてやる気にもならない。
「臨終の時くらい、もう少しセンスのある科白（せりふ）を聞かせてほしいもんだな……」
「安らかに眠り給へ、アーメン、とでも？　残念ね、私、クリスチャンじゃないのよ」
下手な英語だ。ネイティヴ・スピーカーではないようだ。
だが不思議と歯切れのいい喋（しゃべ）りかたをする女だった。

「祈りの言葉なんてたくさんだ……」
「あら、気が合うわね」
「野次馬もお断りだぜ」
吐息まじりにガディスが言うと、彼女は膝を折りまげて横にしゃがみこんだ。
「ねえ、あたしって勘がいいほうなのよ。その勘によるとあなたってばこの傷じゃ死にそうにないわ。あたしの霊感を的中させる手助けだと思って、ここはひとつ、あたしに助けられてみない？」
あっけらかんと変なことを言い出す女だ。
「なんで俺が、てめえなんぞの霊感ごっこの片棒かついで……」
どうでもいいが頭がガンガンする。大量の失血が原因だろう。
今度こそ俺はきれいに死ねるかもしれないんだ、いいから邪魔せずに放っといてくれ、と口にしかけて、ガディスは息を呑んだ。
こちらをのぞきこむ女の顔が、像を結んだ。
その顔は――
「ライア……!?」
「え？」
女の声が問いかえす。それはひどく遠くに聞こえた。

違う。そんなはずはないのだ。ガディスは己に言い聞かせる。そんなはずはない。奴はここにいない。この国には、俺の近くにはいない。奴がいるのは、ここからずっと東の国……はるか、海の彼方……

もう二度と会わない……

「どうして……おまえが……」

目の前の細い手首をつかまえて譫言のように呟き、そして彼は気を失った。

氷雨にうたれる彼の頬を見つめ、女はそっと眉をひそめた。

「…… liar ……？」

II

目が覚めるとそこはやわらかいベッドの中だった。

「また、か……」

意識が戻ると同時に、苦虫をかみつぶしてガディスは吐き出す。

「何が？」

能天気な声がすぐ隣から尋ねてくる。若い女の声だ。枕を叩き潰す勢いでガディスはとびお

き、それから事の次第をおもいだした。ベッドの脇に腰かけて興味津々こちらを眺めているのは、人が死にかけているところに霊感がどうのこうのとふざけたことをぬかした女だった。

「……また死に損なっちまったかと思うと、がっかりでな！」

「今の反射速度すごかった……あなた、オリンピックに行けるかもしれないわよ」

ポイントをはずしたことしか言わない女だ。舌打ちしながらガディスは周囲に視線を走らせた。

自分たちがいるのは、ずいぶんと上等な部屋だった。羽根布団の豪華なベッドがふたつとアンティークな応接セット、フル装備のＡＶシステム、カウンターつきのミニバー、毛足の長いふかふかのカーペット、南向きの大きな窓……そして開けっ放しのドアは大理石造りの広いバスルームにつづいている。

「それでどこだってんだ、ここは？」

「ホテル・ローディンスのエクセレントルームよ。私、ここに住んでるの」

……ミッドタウンで、いやマンハッタン全体のなかでも指折りの一流ホテルではないか。

「住んで？」

あらためて女をふりかえり、ガディスはまた更に気を殺がれることになった。

うっかり忘れていた。この女の顔は心臓に悪いのだ……。

「ひどいのね、化け物みたいに見るんだもの」

面白そうに彼女は笑った。
「傷ついちゃうわ。あたしの顔って、そんなに誰かと似ているの？」
「……」
似ているどころか……
生き写し、だ。
「でもあたしの名前は『凪さつき』よ。いい？　ナギ・サツキよ。他の人の名前では呼ばないで」
いやに身軽なしぐさで彼女は立ちあがり、
「ルームサービス頼むけれど何か食べたいものあるかしら？」
などと問いかける。ガディスは無言のままそっけなく首を横に振った。こんな因縁めいた容姿の持ち主を前にしてのんびり食欲のことなど話題にしていられない。
「じゃああたしが勝手に選ぶわね。あなたはシャワーでも浴びてるといいわ、どうせそのうち食べる気になるから」
笑い方は違う。表情から伝わる性格はまるきり違う。
声が違う。体つきも。性別が異なるのだから、それはあたりまえだ。
そして髪と瞳の色も。
光の使鍵に愛された守護者――ライアの髪は輝くばかりの黄金、瞳は琥珀。

彼女のそれは、まるで夜の象徴。黒に近い焦げ茶のウェーブと、同色の瞳。
「中国系(チャイニーズ)か？」
「日本人(ジャパニーズ)よ。見てわからない？」
「わかってたら誰が訊(き)くってんだ？」
やはりこの女は阿呆(あほう)だと断定しつつ、ガディスはベッドからぬけだす。案の定、二発の弾丸でぶちぬかれた銃創(じゅうそう)は、すでに半ば以上ふさがってしまっていた。毎度のことだ。この、情け容赦(ようしゃ)もない『奇跡』の徹底ぶりにはまったく腹が立つ。しかし見ず知らずの男の異常な回復力を驚きもせず、シャワーを浴びてこいなどと平気な顔で言ってよこす凪さつきの精神構造はいったいどうなっているのだか見当もつかなかった。
別に、女が騒ごうが騒ぐまいが、現在の境遇自体は何も変わりはしないのだが……
「――おい！　俺の服はどうした!?」
気がつけば身ぐるみはがされて着ているのはシルクのローブ一枚だった。この時だけはガディスも本気で怒声をはりあげた。
「バスルームよ。いやな言い方だわ、人を泥棒みたいに」
室内電話にのばす手を止めてさつきが少し険しげに答えた。プライドの高さがうかがわれた。
「ふん、日本のブルジョア娘が泥棒なんかするかい。俺はてっきり、お嬢様には男を脱がす趣

味でもおありかと思ったぜ!?」

「失礼ね！　あんな泥水だらけの恰好で寝られたらベッドが汚れるじゃないの！　ただでさえ怪我の血で真っ赤だったし、それ以前に普通じゃ考えられないくらい汚れてたし!!」

「なるほど常識はずれに汚らしかったとはな、そいつはすまなかったな！　だったらテラスにでもころがしときゃよかったのさ！　お互いの幸福のためにもな!!」

不機嫌に怒鳴りつけながらガディスは大股でバスルームに踏みこみ、派手な音をたてて後ろ手にドアを閉じた。

怒ってみせたのは、ドアを閉めるための演出だ。

血まみれのジーンズとぼろぼろの上着は、たしかに、無造作に洗面台の下に放り捨ててあった。ガディスは気配を殺した慎重な動きで、上着をとりあげ、内側のポケットに片手を差し入れた。

さぐりだしたのは――

聖光石を削りあげてかたどった、黄金色の短刀。

巫女を導き、つねに彼女の半身となり、その生をともにする存在。

司杖、だ。

流麗な細工を施された鞘からわずかに刀身をひきぬき、眩しい輝きを確認する。なにものかに触れられた様子はなかった。ガディスはかすかに安堵をする。何のための安堵なのかと、自

問する心の裏側で。

これだけが、自分をこの世に縛りつける枷。

そして、これだけが引き継いでゆく。

いとおしさの記憶。

「……ねえ……そんなに怒った？」

ドアのむこうから、どこか心細い声が聞こえてきた。

「気に触るんだったら、今度から気をつけるわ……でも本当に、あたしが勝手にやったんじゃないのよ……ちゃんと、ボーイさん三人も呼んで、丁重に着替えさせてもらったんだから……。勿論、あなたが風邪ひいたりしないようにって、思ってよ……」

自分は遠慮ない態度をとるくせに、他人から怒りをまともにぶつけられるのはこたえるらしい。甘えた育ち方をした女だ。司杖の隠し場所をあれこれ思案しながら、ガディスは扉ごしに、何事もなかったように口をひらいた。

「ルームサービスのついでに煙草も頼んどいてくれ。……キャメルだ」

「わかったわ」

とたんに元気をとりもどして、さつきは足取りもかるく電話をかけにいく。ガディスはなんとなく唇を歪め、笑みに似た表情をつくってしまっていた。現金な変わり身の早さがまた例の厄介なエゴイストを彷彿とさせて、ここはひとつ笑っておこうかと投げやりに考えたのだ。

……あの東の国から来た女か。
どこまでも因縁がついてまわるのは、誰かの采配だろうかとも思った。
託された司杖が、そんなふうに巡りあわせさえも導くのか。
「知ったことじゃねえな」
従う義理もない運命の意志に心をはせるよりは、成り行きに身を任せるほうがガディスの性には合っていた。退屈しのぎさえ望めないこの街では、それこそが賢者の道だった。

III

ミュージカル・ダンサーとして成功するために、この国へやってきたのだと、さつきは言った。
「死ぬまでに一度でいいからブロードウェイでスポットを浴びて踊りたいの。その他大勢じゃだめ、ピンスポットが欲しいのよ」
最高級の部屋で悠々暮らせるだけの金があるなら、舞台のひとつやふたつ買い占めてしまったほうが手っ取り早くはないか、とガディスは皮肉ったが、
「舞台は買えても、お客さんの拍手は、お金では買えないじゃないの」

さつきは真顔でそんなことを言うのだ。エコノミックアイランドと揶揄されるお国柄を裏切らずに、たいした成り金の娘であるらしかった。

ひきしまった体型は日々のトレーニングの成果か。お嬢さんの道楽と一言でかたづけるには、確かにさつきの入れこみかたは本格的だった。毎日、早朝からジョギングにでかけて、そのままレッスンスタジオへ直行し、ホテルの部屋へ戻ってくるのはすっかり日が沈んでしまってから——だ。その間のエクセレントルームはガディスの自由気儘な居城と化していた。

素性もしれぬ大の男が、いくらひろびろとした部屋とはいえ同じ室内で過ごしていることに、さつきは頓着するどころかしばらくはガディスの存在さえも失念しているかのようだった。ガディスとしては、ねぐらも餌も酒も満ちたりた状況に異を唱えるつもりなどまるでなかったが、肩透かしの気分を味わわなかったといえば嘘になる。すぐそばでシャワーを浴びられ、平然と隣のベッドで眠られては、いったいどういうつもりかと疑いたくもなる。

変わった女だった。

「よく考えたら、あなたの名前をまだ聞いてなかったわ」

ふとさつきがそう言い出したのは、ガディスがころがりこんで実に三日もたってからのことである。

いいかげん、食べては寝るだけの豪勢な生活にも飽きてきた頃合いだった。

「んなもんは知らねえな」

リクライニングソファの上に行儀悪く脚をのばしたガディスは、煙草のはしを噛みながら無愛想に答えただけだった。

ガディス、という呼び名にはとうの昔に愛想が尽きている。それは敗残者の名だ。いまや、何の意味も持ちはしない。

「なら、あたしが呼びたいように呼んでいいってことね？　わかったわ、待ってて、よく考えてぴったりの名前を決めるから」

さつきは強引に決めつけて、うきうきと水割りをつくっている。ガディスは煙草の煙と一緒に、疲れた溜め息を吐きだした。

「変な女だぜ、おまえは……」

「あら、どうしてよ？」

「日本人ってのは、みんなおまえみたいに能天気にできてんのかい」

「冗談じゃないわ。あたしは特別よ。あんな狭い国には収まらないのよ」

すらっと傲慢な科白を吐いて、さつきは氷のゆれるグラス片手に、ガディスの傍らに腰をおろす。

「あなたも特別ね。普通じゃない人は、好きよ」

「ゲテモノ趣味だな」

「この色、なんて呼ぶのかしらね。カーマイン？　クリムゾン？　深紅じゃないわね、もっと

くたびれた赤だもの」

さつきの指が勝手にガディスの赤い髪を梳いてもてあそぶ。鬱陶しかったが、ガディスはいちいち女の相手をするよりも二流ゴシップ雑誌の記事をながめるほうを選択した。

「rusty ってのさ」

しばらくの沈黙ののちに気まぐれに思いつき、ぼそりと呟く。

「何？　あなたの髪の色？」

「んな呼び方した女もいたって話さ」

「ああそう！　じゃあ絶対にそんなふうには呼ばないわ。癪だもの」

朗らかに宣言して、さつきはガディスの目前からぞんざいに雑誌をおしのけ、

「瞳の色も不思議。朱色？　どの民族の血が混じったら、こんな宝石みたいな色になるのかしら？」

ならば、さつきの双眸は黒曜石だ。警戒もせず、躊躇のかけらもなく、間近にのぞきこんでくる。ガディスは錯覚を消すのに苦労した。その顔を俺に見せるなとくってかかりたい衝動にかられる。だが感情を荒立てて女に当たるほど愚かになれる気力も、理由も、ガディスにはありはしない。

「襲うぞ」

せいぜい怒気をこめて、低く言ってやる。


BLUE-EYED BOY
can't stand losing
as big as the Ritz—

「面倒なくせに」

さつきは笑った。……みぬかれている。

男の誇りは傷ついたが、余計な手間もごめんだった。ガディスは先に視線をそらして煙草をもみ消した。

「やめた。女がらみじゃろくな目に遭ってねえからな」

「べつに、あたしのバックには麻薬漬けの男がついてたりして、そいつがいきなり嫉妬に狂ってあなたを撃ち殺そうとしたりなんかはしないわよ」

「――――」

今度こそ唖然としてガディスは彼女の顔を見かえした。

何故この女が知っている？　銃弾二発くらって雨ざらしのストリートにころがる羽目になった、そのいきさつを。

「的中した？　言ったでしょ、あたし、勘がいいのよ」

ひどく簡単にさつきは言う。

「実際、あたしの霊感どおり、あなた死なずにすんだじゃないの。それはあなたが特別な人だって、あたしの勘にピンときたからだわ。少しはあたしの才能を認めてくれてもいいんじゃなくて？」

……なんてこった。

口をひらいても何も言葉が出てこない。仕方なくガディスは新しい煙草をとり、それで自分の口をふさぐことにした。なにものかに騙されて予定外の畦道に片足をふみこんでしまったような、奇妙な気分だった。

さつきの財力によりかかった共同生活は、なしくずしに続いた。お互いに干渉しない、要するに放ったらかしの待遇は、ガディスにとっては願ってもないものだった。

この街に振り落とされてから一年近く、幾人かの女に拾われては食事と寝床を与えられてきたが、どの女もそのうちガディスの素性や過去を知りたがったり、自分専用の所有物のようにガディスを扱ったり、あまつさえ結婚の二文字を持ち出してくるなどして、ガディスを辟易させた。そうして束縛されることにだけはどうしても耐えられなかった。

飼われるのは我慢ならない。誰のものにもなれはしない。

——たったひとりの乙女を除いては。

女たちはおそらく、その『ただひとり』の存在に肌で気づいていたのだろう。だからこそ約束や指輪でガディスを独占しようとせずにはいられなかったのだ。それを憐れむ気持ちはガディスの内にもあったが、しかし自分を曲げることもできないのだった。

さつきのように奔放な女は知らない。

ガディスという人間に、興味はあっても執着がないのだ。そして名無しの居候の身元よりな

により、自分自身の成功が第一に優先するのだ。一種、エゴイスティックな人物であることは確かだった。

そんな、あくまで自分本位に人をふりまわすところまで、誰かと同じだ。幸か不幸かガディスはそのエゴイストからの扱われ方に慣れていた。

なんにせよ、衣食住には困らない。よけいなことも考えず、窮屈な思いをせず、あたりまえのように生きていられる。——それだけのことだ。

いつのまにか三週間がなしくずしに過ぎ去っていた。何事も、どんな変化も訪れてはいなかった。

洒落たビルの二階にあるスタジオへ足を運んだのは、ほんの暇つぶしだった。

さまざまな人種的特徴と個性を有する大勢の同業者たちのなかで、さつきの姿はすぐに目についた。

ホテルの部屋では見せない真剣な表情で、さつきは同じ振付を何度も何度もくりかえしている。その彼女の熱中ぶりが面白くて、少しのぞいたら立ち去るつもりが、いつの間にか長居になった。——それを、鏡ごしにさつきに気づかれた。

「もう！　驚いた！」

スタジオを駆けだしてきて、さつきが腕にしがみついた。

「びっくりだわ！　まさかあなたがこんな所まで来るなんて」
「おまえが大マジメにくるくる回ってんのを見てるとおかしくてよ」
にやりと笑ってガディスは答える。さつきはムッと拗ねた顔つきになった。
「失礼ね、未来の大スターにどういうつもり？　悪いけど私、回転は得意なの」
「へえ？　連続の五回目あたりから軸足がふらついてたぜ」
「そんなのよっぽど意地悪な目で見てなきゃわからないわよ、あなたってつまらない所にだけ目が届くのね！　専門家よりうるさいわ！」
それだけ熱心に見ていたのだ——とは、ガディスは言わない。
そのような科白に思いあたりもしなかった。
「ちょっと待ってて、あと少しで終わるのよ。そしたらリサの店で一緒に食事して帰りましょうよ」
「俺の気が向けば、つきあってやれるかもしれないぜ」
キャメルの箱の底を指ではじき、最後の一本をくわえながらガディスはのんびりと階段を下ってゆく。あてになるかしらね、と肩をすくめてさつきはスタジオに戻っていった。
「……雪か」
建物を出たところで、ガディスは空を仰いだ。目の前の通りを、やかましく自動車の群れが行きかう。その大群が吐きだす排気ガスをくぐって歩道まで舞いおりてくるのは、ささやかな

雪の結晶だった。

本来は、自分とは相性の悪いものだ。雪や、冷気や、透ける氷の静謐のようなものは。だが界の高み、あの遥かな神殿において見られる雪はもっとやさしげな、自然の慈愛に満ちた意志だった。

この街に降りそそぐものはただの現象だ。

煙草の空箱をひねりつぶしてポケットにねじこみ、ガディスは灰色の雪を鑑賞しつづけていた。いつまで眺めていても、得られる感情はどこにもないように思えた。

「！」

ひどく唐突にガディスは視線を落とした。その先には、ひとりの男が立っていた。

地味なスーツに上品なコートをそつなく着こなした、黒髪の青年。

一見して国籍不明の容貌をもつ男だった。東洋系ともアングロ・サクソンとも言いきれない。

「誰だい」

ガディスは冷ややかな問いを投げる。

「失礼――。君が楽しそうだったので、声をかけそびれた」

エドウィン・アーサー・カンナギ・クレイトン、とその青年は名乗った。まったく隙のない英国英語を喋る人物だった。

好意的な態度を造ってはいるが、あきらかに本音は正反対だ。相手の目を見てガディスはそ

う判断した。虫が好かない。出会った瞬間の第一印象からして、ことごとくガディスの趣味を外れていた。

「私は仲介人でね……ある有力な人の依頼で、君をスカウトにきた」

ガディスの気分を斟酌もせずエドウィン・アーサーはごく慇懃に、なおかつ傍若無人にそんな用件をきりだした。ガディスは不愉快きわまりなく眉間をしかめた。

「その方は、とても君のことに興味を抱いている。私の上司にあたる方なんだが」

「おい、よしてくれ、ホモの重役親父の慰みものになんぞなる気はないぜ、俺は。——お断りだ。失せな」

にべもなく言いすててついでに唾も吐き捨て、ガディスは背中を向けた。さつきを待ってやるつもりだったが、予定変更だ。このいけすかない仲介人からは一刻も早く遠ざかりたかった。

遠ざからねばという明確な判断があったのかもしれない。我が身を守護する力からの、つよい警告だったのかもしれない——。

「君のマナーには、いささか問題があるようだ。……ひとつ忠告しておこう」

背後でエドウィン・アーサーの声が、あっさりと告げた。

「君はもっと慎重になったほうがいい。ファイアマスター・ガディス」

がつっ、とブーツの踵を鳴らしてガディスはふりむいた。粉雪の舞う歩道に、エドウィン・

アーサーの姿はすでになかった。

Ⅳ

魂をひきさく音がする。轟きは遠雷に似ている。あれは空が死にゆく音だ。滅びゆく大地の悲鳴だ。

界の裂け目を喰い破って忌まわしい闇は溢れ広がり、ふれるものすべてを蹂躙してまわる。

このうつくしい琅月界に属するものすべてを。

天はあざやかな赤光を放っていた。

瞳に灼きつく。凶々しくも狂おしい紅の色。

『もう……駄目です』

最愛の乙女はふりかえり、そう告げる。

『滅びを避けることはできません……。これは私の罪。巫女でありながら道を外れた私の咎です。行ってください、新しい世界へ……あなたたちだけは……』

ディシス。

心優しいディシス。彼女は知らない。彼女の優しさが、彼女の正しさが、彼女を愛する

守護者（ライエス）たちにとってどれほど残酷なものであったか――。

そして守護者ライア。おまえにはわかっているだろうか？　おまえにはわかるだろうか!?

ディシスを失い、同胞と離れて、なお生きつづけろと命じられた俺の心など。司杖（しじょう）の番人となったばかりに、死ぬことすらかなわぬ俺の惨めさを!?

央界神殿（おうかいしんでん）が崩れてゆく……木の葉細工のように。きらきらと光を反射しながら散ってゆく。ひしゃげて潰れる。ずっとそれを外側から見ている。見せられている。あの壮麗な神殿の内に、かがやく透青石（とうせいせき）の壁の内側にのこされているのはエクサール・ディシス。それを全感覚ではっきりと知りながら――何もできずに――

「やめてくれ……!!」

何度、この光景を見せれば気がすむ!?

悪夢のなかで叫びつづける。

もうやめてくれ。終わらせてしまえ。もう見せるな、こんな過去の記憶。

どうしても消せないのなら――

「……ライア」

黄金の影が浮かぶ。絶望の闇をこえて。

「ライア……助けてくれ……早く俺を殺してくれ!!」

幻（まぼろし）でもいい。

まちがいなく息の根をとめてくれるだろう。彼なら。光使ライアの使鍵なら。

「助けてくれ……もう夢を見たくない……もう何も見たくなんかないんだ……」

無言で、ライアは眉をひそめた。どこか悲しげに。

幻はそっと白い手をさしのべ、ガディスの頬に触れた。そして言った。

「あたしはライアじゃないわ。さつき、よ」

「……さつき……？」

常夜灯だけの残った真っ暗な室内で、ガディスの枕元に手をつき、彼女はもう一度くりかえした。

「あたしはライアじゃないわ」

ガディスは目を瞠った。

なじんだベッドの感触が、悪夢と現実の境界線だった。本心のつたわらない、つくりものの仮面のような無表情で、さつきはじっとガディスを見おろしていた。

大きく息をついて、ガディスは視線をそらした。ありったけの酒を流しこんでベッドにぶっ倒れたのは何時だったか……思い出せない。いつ彼女が部屋へ帰ってきたのかも、自分が錯乱してどんな言葉を彼女にぶつけたのかも、わからない。

ただ……逃れようとしたのだ。忘れたかったのだ、すべて。

契機は明白だった。あの不吉な仲介人だ。

「……悪かった」

苦く呟いて、アルコールに毒された頭を抱えながら身体をおこす。シャワーでも浴びるつもりだった。

「やめて」

さつきの掌がそれを押しとどめた。

「泣きながらそんなこと言わないで」

「……」

ヴァーミリオンの瞳が細められる。

自分は泣いてなどいない。泣いているのは……

「そっちこそ似合わないぜ……泣き顔は」

右腕がゆっくりと彼女の背中を抱きよせる。包むように。静かに。

「仕方ないわ。好きなんだもの。最初からそうなんだもの」

「……俺は絶対におまえを愛せない。……永遠に」

「わかってる。知ってるわ、そんなこと。でも別にどうだってかまわないわ。あたしはあたしだもの。あたしが好きなんだもの」

彼女の黒髪に指をうずめて、ガディスはかすかに笑った。

「……強い女だ、おまえは」

「強い女なんてどこにもいないわ。恋してる女がひとりいるだけよ。だからあなたには、このあたしに優しくする義務があるのよ」

さつきのめちゃくちゃな理屈は、その夜だけは真実だった。抱きしめた背中を傾けながら、ガディスは彼女の命令に従った。

V

彼がふたたび深い眠りにおちたことを見極めてから、さつきは外線で電話をかけた。

「……支部長？　私です」

会話は日本語だ。万一、聞かれても彼に内容は通じない。家族への国際電話だと説明すればいい。

「ええ……それでは、五分後に」

電話を切り、そして今度はバスルームに入る。バスタブの裏の板を一枚ずらすと、そこには小さな空間があらわれた。

腕をさし入れ、布にくるまれた棒状の物をさぐりだす。ローディンスのロゴが刺繍(ししゅう)されたタ

オルを取り去ると、黄金色の短刀が姿をのぞかせた。さつきは唇をひきしめ、短刀を包みなおして、足音をたてずにバスルームを出た。

「どこのパトロンだい、その『支部長』って奴は」

悠然とベッドの上にくつろいで、ガディスが待っていた。さつきはその場に凍りついた。

「日本のブルジョア娘でも泥棒の真似事ならするわけか。答えろ。五分後に何が起きるって？」

「……あなた……いつ、日本語なんか……」

「俺はどんな言語でもOKだ。それが特技でね」

ガディスの態度はひどく冷静だ。冷静で……零下に燃えつく炎のようだ。

胸元に短刀を抱きしめて、さつきは声を失っていた。ガディスもしばらく沈黙した。

「あなたに……幸せになって、ほしいのよ……」

やっとの思いでさつきはその一言を口にした。

「幸せ？」

嘲る口調でガディスは吐き捨てた。

「おまえは自分が何をやってんのか今いちわかってないようだぜ……」

「ねえ、お願い、話を聞いて……」

「その前にそいつを俺に返すんだ。司杖は持ち主を選ぶ。おまえの手には余る代物だ。死にた

くなかったらやめておけ、すぐにだ」

「言ったでしょ、あたしは特別よ。……私たちの世界にも、特殊な人間は生まれるのよ。あなたとはタイプが違うかもしれないけど」

さつきの認識は甘い。ガディスは彼女を脅したわけではない。正しい所持者として認められぬ者の手中においては、司杖は災いを運ぶ力でしかない。すぐさま実力行使に出なかったのも司杖を刺激しないことを第一に考えたからだ。だがさつきにガディスの言葉がどれほど届いていたかは定かでなかった。彼女は、彼女にとっての真実を語るだけですでに手一杯になっていたのだ……。

「別次元からの侵入者のことは、何人かの異能者たちが感知していたわ。特にこの短刀のもっている波動は普通じゃなかった。あなたは目をつけられてる。地球上のどこに行っても、きっと後を追われる。この世界の政治経済を裏側から調整・操作できる巨大な組織よ……敵にまわしちゃだめ。彼らを味方につけるには、これを差し出すのがいちばん効果的なのよ」

「組織……？」

嫌いな単語だ。おまけに……

異能者？

「それにあなた、苦しそうだもの……。こんな、誰かの形見のせいで苦しんでいるんだもの……」

憎むように短刀を強くつかみ、さつきは言う。
「あなたを自由にしてあげたいの」
「ハ……冗談じゃないぜ……!!」
ガディスは笑った。乾いた笑いだった。
お膳立てされた自由など、どこが自由だというのか。
「さんざん監視して言いくるめたあげくに勧誘ごっこか……いいかげんにしてくれ」
「言うとおりにして」
さつきは懇願した。
「でないと、もう、時間が」
ふわり、と部屋のドアがひらいたのはその瞬間だった。
だが人影は現れなかった。代わりに——
黒い、ちっぽけな、カフスボタン程度のかけらが飛来し薄闇をくぐってカーペットの中央をめざした。勘が悪ければ見過ごしていただろう。はっとさつきが双眸をふるわせてそれを見返った。
「さつき、伏せろ!!」
とっさにガディスが怒鳴った。その声にかぶさり、
ドウッ!

するどい爆風が室内を一気につきぬけた。

「!!」

慄然とする、激しい怒りの情念がガディスの身を占めた。微小型の爆弾!? 限定された範囲に絞って効果を及ぼす、高性能の爆殺兵器だ。

「野郎っ……!!」

衝撃にさからいながらガディスは迷わず首の銀鎖をひきぬいた。

——奴らは、さつきを巻き添えにした!!

初めから司杖だけがめあてだったにちがいない。さつきの失態に業を煮やして、すみやかな決着を選んだのだ。

さつきは知らなかった。彼女は組織に裏切られた。信じていた、味方に。

「ディレイ・ローザ!!」

銀鎖に宿る炎の使鍵が、主に呼びだされた歓喜に燃えあがった。声をかぎりにガディスは叫んだ。

「ローザよ、界を超え、炎使ガディスが命ずる!! ——」

その先は不要だった。

ディレイ・ローザは確実に使い手の思いに応えた。炎は宙を駆け、小型爆弾がとおった軌跡を逆走して卑劣な暗殺者たちの元までたどりついた。どこか遠いところで断末魔の悲鳴があが



るのをガディスは聞いた。なにも感じなかった。
なんと自然に戦えるのだろう……自分は。
幸せになど、平和になど、なれない。そんな宿命は、とうの昔に知っていたのに……。

「……さつき」
いやに醒めた心で、ひややかな顔つきのままガディスは佇み、崩れた壁のかげに横たわる彼女のことを見下ろした。
手遅れであることは一目でわかった。
ピルエットの得意な——美しく鍛えられたダンサーの下半身が無残にひきちぎられ、生命感を纏いえない物体と化していた。あまりにも容易く、あっけなかった。
「ごめ……な、さい……名前、考えて、あげられなかったわ……」
とぎれとぎれに、さつきはそう言った。
「でも、いい名前だわ……ガディス……」
「……変な名前でよ……行ったっきり帰ってこないって意味があんのさ……」
「素敵……」
さつきは笑った。
「死なないで……ね……。『カンナギの属』には……気をつけて」

「カンナギ……？」

それが今回の黒幕か。

嘘や裏切りについての話は、今はいい。もっと何か、さつきにとって重要なことをガディスは言おうとしたはずだった。が……

どんな言葉も間に合わなかった。さつきはいつもそうだ。勝手に自分のペースで事を運んでしまう……。ガディスは手をのばし、彼女の瞳を閉ざしてやった。

「たいした戦いぶりだ。〈炎使（ほのおつかい）〉ガディス」

いつしか室内には、近づく気配もみせずに黒髪の青年が独（ひと）り、傍観者の態度で参入していた。

ガディスはふりむきはしない。

忘れたくとも忘れられない、例のスカウトマンだ。

「ところで君はいつまでもここにいると殺人罪の容疑に問われると思うが……」

「カンナギ・クレイトン……てめえは何者だ？」

その名の一部を強調して、ガディスの背が尋ねた。エドウィン・アーサーはスーツの肩をすくめた。

「獅子身中の虫、という表現をご存じだろうか？『カンナギ』にとって、私のポジションはそんなものだ」

「……奴らの手先でなけりゃ、なんだっていいさ」

信頼できる要素はかけらもありはしなかった。

エドウィン・アーサーは暗に、ガディスの身柄の保護を申し出ている。どうでもいい……。どうせどこへいっても泥沼だ。

「見ろよ……この女は、こんな情けない死に方をする女じゃ、なかったのさ」

ひとりごとのようにガディスは言った。

「ブロードウェイで、ピンスポットを……」

死ぬまでにただ一度……。

この新世界へたどりついて初めて、ガディスは涙を流していた。悲しみはとめどなく溢れた。エドウィン・アーサーは無言で腕を組み、その背中を眺めていた。爆発に破られた窓からは、雪の名残が舞いこんでいた。

翠玉の王（前編）

1

サラが死んだという知らせをエドウィン・アーサーが受けたのは、英国の首都ロンドンの一角、テームズ川沿いにある個性的にして前衛的なギャラリーの中でだった。

本人も把握しきれていないほどに多彩な民族の血をうけついでいるエドウィン・アーサー・カンナギ・クレイトンにとって、特定の国家に帰属しようとする意識はまったく縁がないものだったが、このユナイテッド・キングダム・オブ・グレートブリテイン・アンド・ノーザンアイルランド、などと大層なハッタリを効かせた名前の島国は、たいへん住み心地のいい場所だった。

よくいわれることではあるが、つまりは過去の歴史において支配者として君臨し、文化的に円熟しきった挙句、ぎらつく若さや生命力を既に欠いているあたりが、エドウィン・アーサーの性に合ったのかもしれない。

なにより午後の紅茶とスコーンが世界中でもっとも美味(おい)しく感じられるのは、この国以外にはないのだ。

「私はこのセザンヌが奇妙に好きでしてね」

人影がまばらなギャラリーの一室で、隣に立つ自分の恩師――という名目で、組織から派遣されてきた使者だ――に、エドウィン・アーサーはさらりと言った。

「後期の作品らしいんですが、どうです？　色遣いがストレートで、スピリチュアルで、なんだか気持ちが明るくなるでしょう」

「火急の課題はふたつあるのだが、アーサー……まず、サラが死んだとなると、君のための配偶者をまた新たに決めねばならない」

理知的な熟年の紳士（ジェントルマン）であるジョン・オールソン・松蔭（マツカゲ）氏は、煙草（たばこ）が恋しいのかむっつりした表情で、エドウィン・アーサーの態度にはかまわず話を先へ進めた。

配偶者？

エドウィン・アーサーは肩をすくめる。

そんなもの誰でも大差などはない。

「あなたがたにお任せいたしますよ。なにしろ『カンナギに入ればカンナギに従え』と、我らの母国のことわざにもあることですし」

「博学だな」

「どういたしまして」

カンナギの属、と呼ばれる種類の人間は、全世界的に広がり隠密裏（おんみつり）に巨大なネットワークを形成してはいるが、その内で自分と条件がぴたりとつりあう相手――すなわち『配偶者』を捜

しだすのは案外、やっかいな作業だ。

妊娠し得る年齢であるのか。健康条件はどうか。遺伝は。配属地は離れすぎないか。互いに能力が相殺される可能性はないか……。

エドウィン・アーサーをサラと引きあわせたのも、あくまで組織の上層部の意向であり、本人たちの希望はそこに含まれていない。彼女が死んだと聞いても、悲しみの念もおこらないなるほどと思うだけだ。弱冠二十一歳の身空で婚約者を失ったとなれば、一般的に、わっと泣き崩れるくらいの反応を示したほうが周囲の受けもいいのだろうが。

サラのことを嫌いではなかった。よくできた女性だったし、趣味も悪くなかったし、共通の話題も充分にあった。性格は一致していた、はずだった。それぞれの邪魔にならない程度には。

愛しては、いただろうか？

おそらく完全に否、だろうとエドウィン・アーサーは思う。

「もうひとつの課題は」

セザンヌの作風に目を奪われるほどの感受性はもちあわせていない松蔭氏が、重々しく言葉をつづけた。

「サラの後任を埋めねばならないということだ。……君は、大学のほうにはまだ籍があるのだったかな？」

「私ですか」

エドウィン・アーサーは内心おやおやと呟きつつ、慎重な答え方をした。

ずいぶん危ない橋に、自分の順番がまわってきたものだ。なにしろ前任者は死んでいるのだ。

「籍だけは今年度末まで置いておきますが、論文は大昔に書きあげましたので、今は気楽なモラトリアムを謳歌している状態ですよ」

「結構。配属地は、USAマサチューセッツ州ボストンだ。君にはアーノルド・B・ローディン氏の別宅で、ローディン氏のご子息の世話役を務めてもらわねばならない」

「……まさかあのローディンスのアーノルド氏の息子ではないでしょうね」

「だからそう言っているはずだが、私は？」

大銀行家として名をはせるクリストファー・ローディンの娘ヴィクトリアと、国際的実業家のアーノルド・バーンが、富と名誉とを増幅させるため非常に合理的にウェディングベルを鳴らした結果、地上に生じた——怪物。

クリストファー・ローディン・ジュニア。

カンナギに根ざす者ならば、年端もいかぬその子供が実はどれほど恐ろしい存在か、誰もが気づいている。

そういえばサラは果敢な女だったのだと、エドウィン・アーサーは呆れるような気分で思い

出す。米国に行くとしかエドウィン・アーサーは聞いていなかった。あの女は愚痴ひとつこぼさず、平然と、なんら困難はないようすで旅立っていったはずだ。……『ローディンスの悪魔』が待つ国まで。

「べつにあの怪物と正面対決をしろと言っているわけではないのだよ。ローディン氏のご子息は、言葉が通じる話し相手を求めているだけだそうだ。寂しがりやさん、なのだ」

「私の売りは、気がきく人間、ですか」

自分の気持ちをわかれと言われて、わかる人間ということだ。

推測ではなく、明瞭な理解として。

サラもそうだった。

「ジョン、それでは彼女はなぜ死ぬことになったのですか。寂しがりやの坊やのお守りをしていて、それだけで?」

「不明だ。それはわからんのだ。私を責めないでもらいたい……相手が悪すぎる。なにしろこの地球ひとつ壊してもおかしくない坊やなのだよ。アーノルド氏からは丁重な賠償がなされた。それでおしまいだ」

松蔭氏の率直な返答に、エドウィン・アーサーはむしろ救われた気分になる。

「地球破壊者?」

B級のSFドラマでよく聞いた類のフレーズだ。たった八歳の子供についてこんな表現を使

っている自分たちも、きっとあのドラマと同程度にこっけいなのだろう。
「なるほど。いたしかたありませんね」
観念して両の手をひらいてみせ、エドウィン・アーサーはそつのない笑みを唇に浮かべた。
「USAでどれほど美味しい紅茶が飲めるかどうかは心配ですが、まあ、ボストンといえばかつて大々的なティー・パーティーがひらかれたほどの名所ですからね」
「何の冗談かね」
「一七七三年ボストン茶会事件、ですよ」
「壮絶にくだらないな。君の専門は歴史学か」
「コミュニケーション社会学です」
「君にコミュニケーションを論じられては教授が気の毒でならんよ」
「これでも一応、私は優秀な学生なのですよ。純粋な白人でないわりにはね」
皮肉が含まれたエドウィン・アーサーの最後の一言に、多少は同調する気分があったのかどうか、松蔭氏はふんと鼻を鳴らしただけだった。
「ところでサラの卵子は摘出してあったのではないのですか。すでに体外受精は試みられたんでしょうか？」
うってかわって重苦しい話題を、だがエドウィン・アーサーはあっさりと他人事のように口にした。

回答は、松蔭氏の不機嫌な顔つきと、首を横に振るリアクションとで示された。
「失敗した。残念だったな、君たちの子供は……」
「ふむ……まあ、それが神の意志では、やむをえませんよ」
エドウィン・アーサーは冷静に呟いて、セザンヌの絵の前からゆっくりと歩を踏み出した。
決して、その口元から笑みを消すことはせずに。
「おそらく、生命の存続における我々の可能性は、頂点から転落しつづけているのですよ、ジョン」

気に入っていた部屋をひきはらい、少ない荷物をまとめて——書籍の山だけは別便で送ることにした——特に感慨もないままに、エドウィン・アーサーは空港へ向かった。
今までも、こんな風に旅立つことが少なかったわけではない。異能力者集団こと〈覡の属〉に生まれついてしまった以上は、避けがたいなりゆきだ。
単に生まれついた——にしては、この身に流れる各種の血液に含まれた『力』の配分は、芸術的なまでに計算され、操作されつくしたものだったが。
「そうか、しまった、困ったな……」
タクシーを降りるころになって気がついた。
「ああ失礼、八歳の男の子に贈るプレゼントといったらどんな物がいいんでしょうね？」

料金を請求する運転手にポンド紙幣を手渡しながら、ついでに意見を聞いてみた。見るからに世間知らずの学問馬鹿といった風情のエドウィン・アーサーの姿を眺めてにやりと笑い、家庭教師にでもなるのかい、と運転手は聞き返した。

「まあ、クララのお屋敷にもぐりこむハイジのようなものですよ」

「何だって？」

「いやつまらない独り言でした。ですからね、八歳のころに自分が何を欲しかったかなんて、もうわからないものでしょう？」

「ガキが喜ぶものといったらだいたい決まってるんじゃないのかい？　ローラースケートとか、サッカーボールとか、そういうものさ」

「……ああ、なるほど……」

エドウィン・アーサーは礼を言って小型のトランクを受けとり、ヒースロー空港のターミナルビルに踏みこみながら、やはりローラースケートは違うのだろうなと首をかしげた。あの坊やは元気に外をはねまわるタイプではないようだ、という情報が事前に松蔭氏からは得られていた。

内面的に高い能力をもっている人間が、強靱な肉体に恵まれていないことは、よくあるケースだ。クリストファーの周囲にいる者たちにも、それがせめてもの救いになっているらしかった。

この世から早めに魔物が消えてくれるなら、まったく、それにこしたことはないからだ。

クリストファー・ローディン・ジュニアにとって唯一の味方は、実の父親のアーノルドだった。幼い息子の特異性にいちはやく気づいた彼は、即座に、ホワイトハウスを経由して『カンナギ』にクリストファーの保護を依頼したのだという。

賢明な判断である。

そしてアーノルドの言語感覚に、エドウィン・アーサーは少し感動する。

処分でも監視でもなく、保護――とは。

「でもね、それはとっても理にかなっているんだよ、エドウィン」

搭乗手続きを終えてエスカレーターに向かおうとしたところだった。不意に、エドウィン・アーサーの視線よりもずっと低い場所から、聞き覚えのない少年の声がするりと紛れこんできたのは。

「なにしろアーノルドってお金を儲けることには才能がある人じゃない？　だからビジネスの上で役に立つんなら、やっぱり『処分』したいなんて思いつかないんだよね。そのかわり、自分ひとりで怖い思いもしたくないから、カンナギの皆さんと仲よくしてみたりするんだよ。ぼくはアーノルドのそういうハッキリした性格って、けっこう好きだな」

「……ああ、あなたは……」

エドウィン・アーサーは妙に平然とした答え方をしたが、これは内心うろたえまくったとき

の癖である。

相手の姿は知っていたのだ。写真で。だから彼の素性を認識するのにはべつだん困らなかった。しかし。しかしだ……。

プラチナブロンドの髪に薄い翠色の瞳をもつ、さあ今にも誘拐して売りとばしてくださいといわんばかりの、邪気がなく、少女のように罪深く可愛らしい、この人物がいるべき場所は……米国マサチューセッツ州ではなかったのか。

「ここはイギリスだよ。いやだなあ、エドウィン、それくらいはぼくも知ってるよ」

やや傷ついた顔つきで少年は眉をしかめると、半ズボンから無防備にさらされた細い脚を動かして、すたすたとエスカレーターに歩み寄っていく。

「ク……クリストファー様！」

慌ててエドウィン・アーサーも彼の後を追った。

そうだ。人違いのはずはない。ここがどこであろうと、今、目の前にいる少年がクリストファー・ローディン・ジュニアであることは完璧な事実だった。

「クリストファー、って、やだな。先代のクリストファーとごっちゃになっちゃって、ぼくはあんまし好きじゃないんだよね。クリスだけでいいよ。ぼくもエドウィン・アーサーなんて長ったらしく呼ばないし」

「いや、あの、クリストファー様、あなたがここにいらっしゃっているのはどういう……護衛

の者は誰か……まさかおひとりで」

「エドウィン、ぼくの言ったこと聞いてた?」

「あああ、これは失礼……ですからクリス様、いったいあなたが」

「あのねえ、エドウィン……」

エスカレーターの一段上から、仕方ないというようなそぶりで、クリストファーがふりかえった。

瞬間——。

胸をえぐり溶けこむ異質の感触に、エドウィン・アーサーは無言で目を瞠った。

これは自分の有する視界(ヴィジョン)ではない。

精神の岸辺に『接舷(せつげん)』して、そのままくっきりと同調したのは——クリストファーのとらえている世界だ。クリストファーが感じ、意識し、構成する、異種のヴィジョンだ。

エスカレーター上の地点から三次元的に把握されていた空港内の景色が、とたんにあっけなく霧消(むしょう)した。

このヒースロー空港の隅から隅まで……ターミナルビルの空間をしめる全要素が、掌(てのひら)におさまるほどの眺めやすい模像(モデル)として今はエドウィン・アーサーの内にあった。一ミリの単位まで精密に、旅行客のひとりひとりの顔まで鮮明に、おそろしく広範にわたる情報量が、すべてそこには凝縮されていた。

クリストファーの『照準』は、そのなかのごく小さな一点に向かう。エドウィン・アーサーもいやおうなしに彼の視線を共有する。

みつかる。

別の棟の到着ロビーにいる、ひとりの、若い、キャリアレディが……。

『メアリジェーン・キャンベル』

そこでまた性質の違う情報がクリストファーの認識から流れこむ。M・キャンベル……アーノルドの秘書嬢……ローディンスの機密を他の企業へ売却しようと試み……発覚をおそれNYから脱出……英国……。

『殺すよ』

……何？

ぱあん、と風船ガムのはじける音がした。

いや、錯覚だ。聞こえるはずがない場所でそれを聞いたのだ。

遠く離れた到着ロビーで、M・キャンベルが跡形もなく消え去るのをエドウィン・アーサーは見た。

彼女のそばにいた人間にはそこで何がおきたのか、まったくわからなかったに違いない。

『クリストファー様！』

「どうかしたの？」

てっぺんに上りきったエスカレーターから踏み出しながら、クリストファーが不思議そうに尋ねた。

「！」

元のままの現実が、もうまわりを埋めている。

凄まじい落差だった。感覚世界に慣れているつもりのエドウィン・アーサーも、愕然としたきり、しばらく声を発せなかった。

「アーノルドはこんな風にぼくが役に立つから、助かっているんだよ。わかった？　よね？」とプラチナの髪をゆらして首をかしげたクリストファーは、無垢な天使のごとく美しい。エドウィン・アーサーは真性のめまいをおぼえた。

「ですが……ですが、クリス様……」

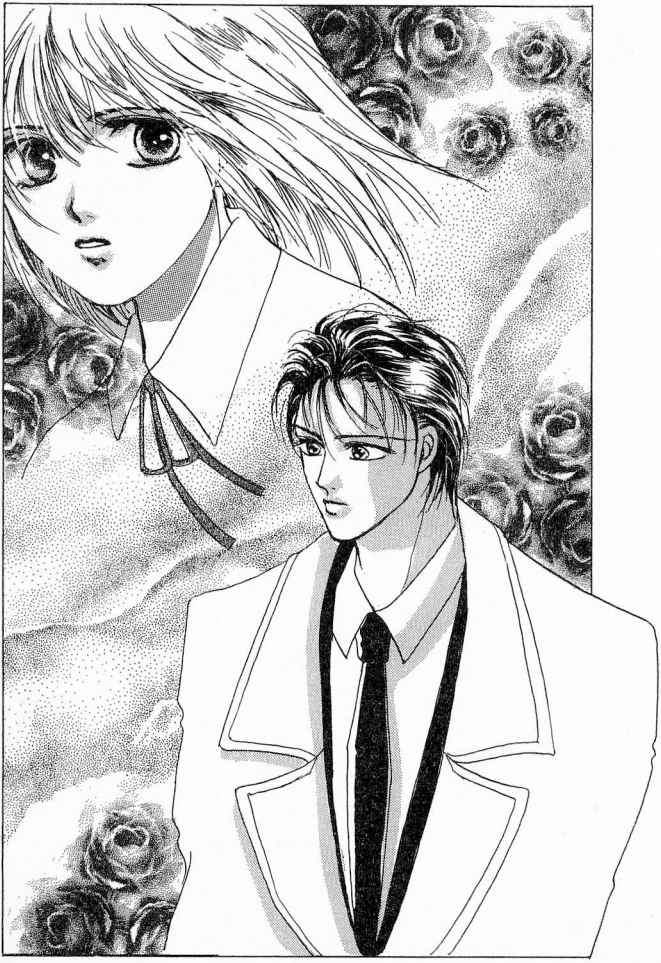
「下を見ないとつまずくよ、エドウィン」

「だ、大丈夫です。私はこれでも足元に目がもうひとつあるのですよ。それよりも今、あなたの……」

「エドウィンって負けず嫌いだなあ」

些細なことにクリストファーはまじめに感心して、搭乗客用のゲートをめざして歩いていく。

「ぼくね、本当はあの人、あんまり殺さなくてもいいかなって思ってたんだ。あの人が盗んだ



機密って本人が考えてるほど高値で売れるものじゃなかったから。だけどね……」

「でしたら……」

それならば何故ああも簡単に、と思うエドウィン・アーサーの気分を遮るように、クリストファーはひどく真顔で言葉をつづけた。

「だけどぼくが、あんなにはっきり『殺すよ』って教えてあげたのに、あの人、気がつきもしなかったから、じゃあそれは殺されてもいいってことだよね？　ぼくだって親切で教えてあげたもの無視されたら、悲しくなっちゃうし」

「……それは……」

「鈍感なのってほんとによくないよね」

エドウィン・アーサーは何も言えなくなってしまった。

屁理屈ではなく、この少年は本気でそう感じるのだ。

大人たちに自分の言葉を正当にうけとめてもらえなかった子供と同じ感性をもって、常人に理解できる余地もない巨大な精神エネルギーを操り、そのあげくに誰の生命であろうとも、あっさりと消し去ってしまえるのだ。

クリストファーが期待するほど、普通の人間は——そう、カンナギの属でもないかぎり——『敏感』になれない。たったそれだけの間違いが生じていることを、こんな相手にどう説明すればいいのか。

「じゃあエドウィン、やること終わったから、ぼくは先に帰るね。また後で、今度はボストンでね」
「え？」
息を呑む暇もなかった。
微妙な空気の震えだけをのこして。
クリストファーの姿は、知覚できない領域の彼方へと飛翔していた。
すべてが幻であったかのように。
ゲート前に茫然と立ちつくすエドウィン・アーサーひとりが現実を継続していた。
「素晴らしい……」
乾いた声でエドウィン・アーサーは呟く。
大西洋を一気に移動する異能者など、まず容易には見当たるまい。なるほど怪物と呼ばれるわけだ。魔物だ。能力のなにもかもが群をぬいている。
そしてエドウィン・アーサーの心には再び、ささやかな疑問が甦っている。
鈍感ではなかったサラは、なぜ死ぬことになったのか……。

2

郊外の閑静な土地に建てられたローディン家の別宅は、エドウィン・アーサーの想像以上にクラシックな、古き良きヨーロッパを彷彿とさせる屋敷だった。

手入れのゆきとどいた庭園の緑も見事だ。強すぎない透明な木漏れ日がきらきらと躍って、繊細に刈りこまれた芝に投射され、光溢れる小宇宙をかたちづくる。本来の意味での豊かさが活かされている、そんな天然の聖域を、庭師のジェンセン老人は全身全霊をもって守りぬこうとしているようだった。

「いい土地ですね」

軽い自己紹介ののちに、エドウィン・アーサーは老人にそう感想を告げた。

「ここに来る前は、もっと空気がぎすぎすしているものかと考えていましたよ」

「東海岸のどこもかしこもマンハッタンと同じと思われちゃいけないさ」

老人は無表情で呟くと、それに、とつまらなそうにつけたした。

「本当は、街の空気より、こっちのほうがよっぽど恐ろしいのさ——このへんにはエンジェルがいるからな」

「天使？」
「死のお使いさね」
ああ、とそこで納得するエドウィン・アーサーもエドウィン・アーサーだったが、その反応を眺めてジェンセンはかかかと喉を鳴らして笑った。偏屈に頬をゆがめた笑い方だった。基本的に、心の底から楽しく笑えない人物なのかもしれない。
「あんたはサラの代わりに来たのかい」
日焼けした皺だらけの腕で帽子をふかぶかとかぶりながら、老人は相変わらず一本調子に尋ねる。
「ええ」
エドウィン・アーサーは短く、優等生の答え方をした。
相手がカンナギについてどの程度知っているかわからないときは、これにかぎる。
「そうかい」
帽子のつばの向こう側で、ジェンセンがぽつりと呟くのが聞こえた。
「サラはかわいそうだった」
「……」
どのように、とは、そのときエドウィン・アーサーは訊く気になれなかった。

正式なクリストファーとの初対面（ファーストコンタクト）で、エドウィン・アーサーが『お近づきのしるし』として贈呈したのは、結局、あれこれ考えたあげく苦しまぎれに選んだ日本製のヘッドホン・ステレオ・カセットプレイヤーだった。

大富豪ローディンスのひとり息子なのだから、高価なものや珍しいものなどは、いくらでも手に入るだろう。だったらモデルチェンジの激しいおもちゃの最新型あたりでお茶を濁（にご）すくらいしかないではないか。

「どうかいたしましたか？」

応接間の豪華なテーブルの上でＳＯＮＹと大きく書かれた箱をひらいたクリストファーが、そのままきょとんとしているのに、エドウィン・アーサーは少し慌（あわ）てた。

「もしかしてお嫌いでしたか？　でしたら私、また何か別のものを……」

「そうじゃないんだけどね、エドウィン」

クリストファーも心なしか途方に暮れた顔でエドウィン・アーサーを見上げ、どう説明しようかと頭を悩ませているようだった。

「ぼくね、カセットテープって聴いたことないんだ。つまり、ＣＤも、アナログレコードも、オープンリールもだけど」

「……何ですって？」

「だからぼく、エドウィンにこれをもらって嬉しいけど、プレイするカセットを一本も持って

ないからどうしようかと思って」

何だ、それは？

それがローディン家の主義なのだろうか？　生演奏以外の音楽を聴くことは禁じられているとでもいうのか？　――まさか。

「困っちゃったよ、エドウィン、どうしよう？」

「あああ、それでしたら……」

エドウィン・アーサーはあたふたとスーツのポケットをさぐり、そのはずみで出されたお茶をこぼしかけて給仕のフローラに睨みつけられつつ、与えられた私室に置いてきた鞄に自分のヘッドホン・ステレオが入っていたことを思いだして一瞬だけポケットの内側と鞄のなかの空間をつなぎ、ひょいとポケットから手品師よろしく旧式のウォークマンをひっぱりだした。

膨れてもいなかったポケットから重い機械が簡単に出てきたことにフローラはぎょっとして口元をひきつらせたが、すぐに、ああいやだという表情でそっぽを向いていた。この手の奇妙なことにはやはり慣れているらしい。

「とりあえず、私の聴いていたテープでよろしければこれで試聴だけでも……いかがですか？」

「すごいなあエドウィンって……」

クリストファーは感嘆しきったまなざしでエドウィン・アーサーを眺めた。本当にすごいの

はどちらなのか、とうにはっきりしているのだが……。エドウィン・アーサーは立つ瀬のない思いにかられる。

別にこちらも必死になって御機嫌をとろうとしているわけではないのだ。ないのだが、しかし、クリストファーのどうにも純粋そうな、いたいけな、いじらしい困り顔で、どうしようかと訴えられてしまうと——。

いや私は何かおかしいぞ、とエドウィン・アーサーは自省の念をつよくした。日本人ゆずりのサービス精神はエドウィン・アーサー・カンナギ・クレイトンが世を渡っていくうえでの武器なのだ。それを有効に使わずしてどうするのか？

新品のプレイヤーにセットしたカセットテープの音に耳をすませたクリストファーは、一口でかじりつけるかどうかわからない巨大なハンバーガーを前にしているような、あるいは人生（モノ）ゲーム（ポリー）への取り組みかたを思案しているような様子だったが、名作映画音楽集というテープの『ウェストサイド物語メドレー』をまるまる聴きおわると、ふっと腑（ふ）に落ちた顔で呟（つぶや）いた。

「ふうん……音楽を音で聴くのもおもしろいんだね」

「は……音楽を音以外で聴かれるといいますと……？」

「あ、ぼく、これが好きだな。E・Tのテーマっていうの？」

問いかけた言葉は、クリストファーのひとりごとのなかに呑（の）みこまれてしまった。

地球破壊者と呼ばれる少年の好きな曲が、地球外生命体のテーマでは、できすぎだ。

「ちょっと待って、フローラ」
簡易ヘッドホンをつけたまま、かわいらしく首をかしげて、二人のいるテーブルからさがろうとしていたメイドをクリストファーは急に呼び止めた。
「何でしょう、お坊ちゃま」
「あのね、この紅茶、ためしにフローラが少しだけ飲んでみてくれない？」
自分の前に置かれたウェッジウッド製ターコイズブルーのティーカップを指さして、クリストファーは予想外の科白を口にする。フローラとエドウィン・アーサーは同時に目を瞠ることになった。
「ええ、それでしたら……」
即座に余裕のある笑みを浮かべて、貫禄のある——日本流にいうなら肝っ玉母さん的な——ベテランのメイドは、先刻承知とばかりに頷いた。
「お待ちくださいましね。今すぐにジェンセンを呼んでまいりますわ」
「ジェンセンじゃなくていいよ、フローラのほうが早いよね？」
おやつを催促するのと変わらない、気軽な口調で。
クリストファーは彼女の提案をにべもなく一蹴する。フローラの笑みが目に見えてこわばったのはその時だった。
「ですけど……ですけど、お毒味役はジェンセンにと、旦那様が……」

「失敬」

椅子を鳴らしてエドウィン・アーサーは立ちあがり、クリストファーのティーカップをとりあげて湯気の匂いを嗅いでみた。……はっきりとはわからない。

「私が一口、いただいてよろしいですか」

「エドウィンはだめだよ」

「大丈夫です、私の身体は毒物には慣らしてあります」

「違うよ、青酸カリなんかじゃないよ、あの人たちはいくらでも、たとえば兵器用に開発した特殊細菌だって使うんだよ?」

クリストファーに真顔でなだめられて、さすがにエドウィン・アーサーも思いとどまった。バイオ兵器に対する免疫には、それほど自信がない。

「だからフローラ、やっぱり君がためしてみてくれる?」

そんな話の流れで、どのような神経をもってクリストファーが平然と彼女にそれを尋ねたのか、誰にも理解はできないだろう。

フローラは隠しがたい恐怖にかたかたと顔面の肌を震わせ、足の裏が床にはりついてしまったがごとく、その場から微動だにできずにいた。彼女に対して、というよりこの状況に対してエドウィン・アーサーの気は重かったが、こういう場合はプライバシーの侵害もやむをえまいと割りきり、精神の『蓋』をひらいてフローラの『チャンネル』にあわせてみることにした。

そして――。

見えてしまった事実に関しては、エドウィン・アーサーも決して妥協する方法を知りはしないのだ。

「……お気の毒でしたね、マダム」

そう呟くことでまた、エドウィン・アーサーも、確かに刑の執行に加担したかたちとなった。

アーノルドがクリストファーの能力を企業戦争の駒のひとつとして利用している以上、クリストファー抹殺を願う人物など、この世界中には掃いて捨てるほどいる。彼らのことをクリストファーはまとめて『あの人たち』と呼び、妙に親しみをもってその暗殺計画にいちいち相応の対処をしていた。

メイドのフローラは彼らから送りこまれた本職ではなく、暗示をかけられ、本人の意思とは別のところで動かされていた暗殺者だった。そうでなければすぐに心を読まれてしまうと彼らは考えたのだろう。その予測すら、実際には甘すぎたのだが。

利用されたフローラは単に哀れだったともいえる。

が……罪は罪だとクリストファーは当然のように片付ける。

「マッサの人ヤケの子アグルの言葉」

涼やかな光舞う庭の、古い大木の下で、きむずかしく顔をしかめながらジェンセン老人が読

んでいるのは、ぼろぼろになった一冊のバイブルだった。
「わたしは確かに人よりも愚かであり、
わたしには人の悟りがない。
わたしはまだ知恵をならうことができず、
また、聖なる者を悟ることもできない。
天にのぼったり、下ったりしたのはだれか、
風をこぶしの中に集めたのはだれか、
水を着物に包んだのはだれか、
地のすべての限界を定めた者はだれか、
その名は何か、その子の名は何か、
あなたは確かにそれを知っている」
箴言、だ。
エドウィン・アーサーは醒めた心でそれを聞く。
ジーザス・クライストも主なる神もここにはいない。
いるのは、クリストファー・ローディン・ジュニアだけだ。
ひとりきりの少年を覆うちっぽけな王国。
父は世界をとびまわり、母はニューヨークの本宅に居座って、ここで共に暮らそうとする気

配もない。それはそうだ。恐怖は誰にもある。どんな生き物にも。
「聖書がお好きですか」
「ああ」
もそりとジェンセンが答えた。
「他におもしろいものもないさ」
「街へでも出られたらよろしいのでは？」
「あんた人を殺したことはあるかい」
エドウィン・アーサーの提案を聞き流して、老人は唐突に問いかけた。エドウィン・アーサーは硬質な無表情でそれに応えた。
「ええ、おそらく」
「おれは戦争に行った。第二次大戦でも、ベトナムでも、いやってほど良く働いた。あんたみたいな黒い頭したアジアの子供らの上から爆弾をふりまいた。焼夷弾さね。ぱっと火がついていくらでも人間が焼けた。ベトナムじゃ枯れ葉剤をまきちらした。あっちじゃ奇形児がごろごろ生まれた」
「パイロットだったのですか」
「ずっと後になっておれはトーキョーの写真を見たさ。大空襲で、川岸に気味悪くつみかさなった黒焦げのカタマリさ。ヒトのカタチはしてるんだが触るとただの炭っぱしみたいにぼそぼ

そ崩れちまったっていうのさ。抱えた赤ん坊まで真っ黒な炭クズさ。誰も彼も、見栄も名誉もあったものじゃないありさまだ。だが、あんなもんなんだろう。どっちみち死ぬってのはあんなもんなんだろう」

第二次世界大戦にも現役で参加したのなら、この老人もけっこうな齢ということになる。表向き庭師として雇われていながら毒味役などを言いつかっているのは……そのためでもあるのだろうか、とエドウィン・アーサーは内心で納得をする。

「おれは山ほど人殺しをしたがどうってことがない。どうってことないのは、おかしなことだ。この本にも、そうしたおかしなことがたくさん載っている。だから読むのさ」

それきり、またジェンセンは折れ曲がったページをひらき、しわがれた声で哀歌を唱えはじめる。

「主が命じられたのでなければ、
だれが命じて、その事の成ったことがあるか。
災いもさいわいも、
いと高き者の口から出るではないか。
生ける人はどうしてつぶやかねばならないのか、
人は自分の罪の罰せられるのを、
つぶやくことができようか」

3

変わりばえのしない日々がつづいた。暗殺者たちとの殺伐としたゲームと、アーノルドから送りつけられるプレゼントにまぎれた虫のいいSOSと、息子を溺愛していながら一緒に住むことだけは頑として拒む母親ヴィクトリアからの涙ながらの電話攻勢と。

サラがどのようなゆきで死んだのか、疑問はそれからずっと解かれぬままだったが、あえて真相を知ろうという気はエドウィン・アーサーの内にはすでにおこらなかった。ここが、どんな死に方をしてもおかしくない環境であることはわかっていた。

彼女にとってだけではなく。……つまりは、自分自身にも。

もちろん、プロフェッショナル同士の意地として、殺し屋どもにそうやすやすと隙を見せるつもりは、エドウィン・アーサーにはなかったが。

いずれにしても死者は死者でしかない。サラの死にまつわるいきさつを知ったところで何が慰められるとも、得られるものがあるとも思えなかった。

「クリス様？」

図書室の扉をひらきエドウィン・アーサーは穏やかに呼びかける。

屋敷のどこにクリストファーがいても即座に発見できる程度には、エドウィン・アーサーも自分の役目にずいぶん順応してきたようだった。これができて、なおかつ、クリストファーが誰かに相手をしてほしいのか独りでいたいのか、が直感で読めなければ、この少年の側近はつとまらないのである。

「キャシーが午後のお茶をお運びしてもいいかと頭を悩ませていましたよ。そろそろ、降りてこられたらいかがですか」

莫大な量の本をそなえた図書室の、いかめしくそびえたつ立派な書棚のいちばん上に、拗ねた子猫のようにべったりとクリストファーは寝そべっていた。

こうしていると、棚に詰まった書物のすべての内容が——活字が、ではなく、純粋な内容物が——クリストファーの内側には自然に流れこんでいくのだという。だから彼が表紙をひらき本を読むことはほとんどない。

音楽も同じだ。楽譜から……あるいは、その気になればオーディオテープやコンパクトディスクなどのソフトウェアからも、彼は直接、中身をうけとることができるのだ。わざわざプレイヤーで鳴らそうとしなかったのも無理はない。

「エドウィン、ぼくはもうだめかも」

力のぬけきった、死にそうな声が書棚の上からは降ってきた。

またか、とエドウィン・アーサーは思う。

最近はこの『発作』の間隔が短くなっている気もする。

「ぼくの頭のなかだけぱんぱんに一杯になって身体はスカスカになって今すぐフワーッと風船になって飛ぶかもって思っちゃうよ。ぼくはもういやになっちゃったよ。全部いやになっちゃった。退屈で退屈で退屈で退屈で退屈で退屈で退屈で目の前どんより……」

「何をおっしゃっているんです、そういうときは私と一緒におもしろくなることを見つけに行くと約束されませんでしたか？」

「ディズニーワールドも飽きちゃったし」

「全世界お化け屋敷めぐりなんてどうです？　なんでしたら秘境探検ツアーでも」

「行く前にみんなわかっちゃうよ」

「クリス様がそうおっしゃると身も蓋も神も仏もなくなってしまいますよ」

「あーああ……」

小さな溜め息をもらして、クリストファーはことんと額を書棚の板に押しつけたきり黙りこんでしまった。

エドウィン・アーサーも一緒に溜め息をつきたくなる。

だが……。

「クリス様？」

ふと、よくない感触を覚えてエドウィン・アーサーはその声に鋭さを加えた。

返事はない。

『クリストファー様！』

火急の手段とばかりに、精神への直接攻撃に出た。そのまま虚しく空洞をつきぬけていってしまいそうな手応えのなさに、少なからず寒気を感じる。

目をひらいた瞬間ブラックホールがひろがっていたときのような、背筋を走る、根源的な気味の悪さだ。

「えっ!?　あああ……なんだ、びっくりした……」

クリストファーはぼんやりしきった呟きとともに、ごそごそと頭を持ちあげて座りなおし、なおどこか茫然と、あらぬ方角を眺めている。

「ねえエドウィン、ぼくはもっと大昔に生まれたらよかったな」

「……といいますと？」

「アレキサンダーだって、シーザーだって、ナポレオンだって、コロンブスだって、エジソンだって、みんなぼくより先にいろんなことやっちゃって面白いところを残しといてくれなかったんだもの、狡いよ。もう、地球なんか、今からどこいじったってパンクするしかないじゃない。つまんないよ」

切実に訴えるというのでもなく、ただひたすら情熱のない言葉をクリストファーはけだるげ

に続けた。

いや……最初から、いつでも、この少年に『情熱』など似合いはしないのだ。

彼にとって大切なのは、何らかの興味、もしくは好奇心が持続しているかどうか——だけだ。

「ヴィクトリアは、ぼくが大きな力を授かってるから早死にするんじゃないかって心配してるけど、ちがうよ。ぼくのいる、ここが、もう行き止まりだから、それで終わるものが終わるのはしかたないよ。ぼくだって飽きないようにしてるの一苦労なんだよ。……なんでぼくこんなところにひとりでいるんだろう」

「……」

行き止まり——か。

「クリス様、ともかく美味しいお茶でも飲んで元気をお出しになってください」

「あ、うん、エドウィンがそんな身も世もない顔しなくていいんだよ。ぼく、エドウィンに悪いことしちゃった？」

あっさりと、また例によって詐欺か悪夢かと思われるほど犯罪的にかわいらしいしぐさで、クリストファーは心配そうに首をかしげてみせた。まったく、どちらが機嫌をとっているのかわからない。

「いえ、私は……」

自分は……。

エドウィン・アーサーが否定の言葉を、なぜか滑らかに動こうとしない唇から導き出そうとしたとき、だった。

「――あっ……！」

不意に、クリストファーが小さく叫んだ。

顔の半分を、片方の掌でおさえながら。

「クリス様？」

「エドウィン、大変だ！」

次の瞬間には、クリストファーの姿はすでに――書棚からとびおりる経過はなく――エドウィン・アーサーの傍らにあった。

「どうしようエドウィン、ぼくちょっとすごいもの見つけちゃった……新記録かも」

「何でしょう？」

たった今まで消沈しきっていたのはどこへ行ったのか、クリストファーはその淡いエメラルドの瞳をきらきら光らせながら、声をひそめ、エドウィン・アーサーの耳元に向かって囁いた。

「宇宙人。……エドウィンも見たいよね？」

それは火星の軌道上などではなく、こともあろうに、ニューヨーク市マンハッタン島の真ん

中にいた。
「目ざといのね」
顔を合わせるなり、タイムズ・スクエアのバーガーショップに有無を言わせずエドウィン・アーサーをひきずりこんだ日本人の女は、心臓に悪いというように顔をしかめた。
「例の異邦人の件は、上層部の中でも箝口令が布かれてるくらいのシークレットなのよ。わけのわかってない人がうっかり出てきてかきまわすなんてごめんよ」
「それは失礼。見たくなくても勝手に目に入りましたのでね。『彼』が」
クリストファーの名はもちろん出さず、エドウィン・アーサーは肩をすくめる。うるさいアメリカン・ハードロックが鳴りわたり煙草とグリルの熱で空気がよどむ店内に、高いスーツを着こんだまま入ってしまったことにやや後悔の念を抱きつつ。
なにげなしにテーブルにひじを置いたらコートの袖にケチャップをつけてしまった。風情も何もあったものではない。
「しかし、つまりその宇宙人が……」
「『宇宙人』はやめてちょうだい。意味が違っちゃうでしょ」
「では『異世界の魔法使い』とでも？」
「そういう嘘っぽい言葉、嫌いなのよ。ただの異能者よ、『彼』は。あたしたちと何も変わらないわ」

自分の使っている表現も一般人にとっては充分にフィクションめいていることを、彼女は自覚していないらしい。

「だがカンナギは彼を消したがっている……もしくは、彼に関して、何か手に入れたがっているということですか？」

「保護、よ」

凪さつきはひどく不愉快そうに訂正した。

「彼の発しているエネルギーは、野放しにしておくにはちょっと大きすぎるの。だから保護しなくちゃいけないわ。それだけよ」

そのカンナギの言い分はクリストファーに対する文脈と、ほとんど同じだ。だが、ひとつだけ大きな違いがあることもエドウィン・アーサーの目にははっきり見えていた。

クリストファーにはアーノルドという金づるがついている。が、異界からの来訪者のほうには、そんなものありはしないのだ。

政治的配慮も。人権も。

カンナギはおそらく手段を選ぶまい。

と、なると……。

「まあ、あなたに警告されるまでもなく、私は、かかわりあいになりたくはありませんね」

エドウィン・アーサーは、演技ではなく、本心からそうコメントした。



カンナギがすでに射程に入れている獲物を横取りなどした日には……自分の立場が厄介なことになるのはまちがいない。

そして万一カンナギとの間にトラブルが生まれても、クリストファーに、あえてエドウィン・アーサーを守る義務はまったくない。

「理解が早くてうれしいわ。じゃ、そういうことで、おつきあいできなくてごめんなさいね、ミスタ・クレイトン。『彼』が待ってるから帰るわ」

「突然お呼び止めして、こちらこそ申し訳ありませんでした。ご幸運を、ミズ・ナギ」

彼女は今、正体を伏せて『彼』に自分の部屋をねぐらとして提供し、情報をまとめている段階だということだった。彼らの泊まっているホテルの名がローディンスだったのには、エドウィン・アーサーは苦笑いせざるをえなかった。……クリストファーの命令ひとつあれば、電話の通話内容からフロントへのメッセージから、すべて筒抜けだ。

「ミズ・ナギ、それはそれとしまして、あなたのブロードウェイでの成功もお祈りしていますよ」

本職のダンサーである彼女に、エドウィン・アーサーはそう言い足した。

にっ、とルージュの唇に誇りに満ちた表情を乗せ、彼女はあざやかな笑い方をした。

「いずれチケットを送るわ」

「さて……どうしたものかな」

グレイに染まった真冬の空をながめ、セントラルパークの外周にそってエドウィン・アーサーは行き先も決めずにしばらく歩いた。

このままカンナギの属としての立場を遵守し、何も見なかったことにしてボストンへ戻るか……それとも。

クリストファーの翠色の瞳をさらにきらきらと輝かせつづける途をとるか……だ。

あちらを立てればこちらが立たず。

「とかくこの世は難しい……だったかな」

日本語の知識をひきずりだしてきて神妙に呟いてみる。板挟みである。

よりによって異世界からの漂着者、か。

確かに、よほどのものでないと興味の長続きしないクリストファーにとっては、格好のニューフェイスだ。ぼく、宇宙人欲しいなエドウィン、と潤んだ目で訴えられてしまっては、エドウィン・アーサーの名にかけて、何億ドル積んでもスカウトを成功させねばなるまい。

『彼』――この自分たちの世界と接する、別の地の果てからやってきた、〈炎使〉。

現在の『彼』の名は知らない。本来の名前はクリストファーがすでに察知していた。

〈還らざる者〉……ガディス。

「！」

エドウィン・アーサーはもう少しで不自然に立ちすくんでしまうところだった。マンハッタンはそれほど狭いのか？　と誰かに訊いてやりたい気分になる。念は因果をよびこむものらしい。

人違いではないはずだった。痩せた長身に、無造作にのびた錆色の赤の髪。そしてぎらりと鈍く光る刃のごとき印象は紛れようがない。

たった今、エドウィン・アーサーの歩いているその歩道を、反対側から、いかにも暇潰しといった趣きで近づいてくる男が……。

獲物だ。

『クリス様』

胸元のマフラーをかきあわせるそぶりで今の動揺をごまかしながら、エドウィン・アーサーは心の奥底のスイッチを切り替えた。

『彼が見えましたよ――ファイアマスター・ガディスが』

『ぼくたちのこと気がつくと思う？』

即座に、クリストファーのわくわくしている気分がどっと流れこんできた。映画スターに会うファンのようなありさまだ。

『無理でしょう。ずいぶん錆びついているようですからね』

『……冷たいね、エドウィン』

『いえいえ、そのようなことはありませんが』
それほど強く皮肉ったつもりはなかった。何か余計な感情をクリストファーに読まれただろうか？　エドウィン・アーサーはかえってあたふたとする。板挟みが云々というところが伝わっていたら、面倒だ。
『エドウィン、ぼく、カンナギにファイアマスター横取りされたくないな』
だめおしの一言が届いた。
エドウィン・アーサーは、ずしりと重いものを背中に負わされた錯覚に陥った。
結局、この少年に建前は通用しないのだ。
『だってどうせファイアマスター相手に、カンナギの人達じゃなんにもできないもの。ぼくがファイアマスターに恩を売ったほうが、地球のためには絶対いいよ。彼、けっこう義理がたい人みたいだし』
『地球のためには、ですか』
『うん、つまりぼくのためってことだけど』
『たいへんストレートで正しいお言葉ですね』
なんというやりとりを自分たちはしているのかとエドウィン・アーサーは力なく笑ってしまいそうになったが、まだ、これが自らにとって有意義な発言であるなどとは思い至りもしなかった。

「落ちましたよ」

すれちがいざまのエドウィン・アーサーの声に、赤い髪の若者はうるさげに見返った。

エドウィン・アーサーはなにくわぬ顔で、煙草の箱をさしだす。

こんなものが、そうこちらに都合よく落ちてくれるものではない。実際にはエドウィン・アーサーが、彼のジーンズのポケットから、自分の手元へうまく移動させたのだ。

「thanks」

炎使ガディスは無愛想にキャメルのパッケージを受けとっただけだった。

まるで普通のアメリカ人のように。

「どういたしまして」

welcome——と、エドウィン・アーサーは別の意味でも低く呟いた。

クリストファーはいつまで彼に関心をもちつづけてくれるだろう？

できればこの魔法使いが、なるべく期待にこたえるものであればいい、と……。

エドウィン・アーサーがそのとき考えたのは、そうした程度のことにすぎなかった。

翠玉の王（後編）

4

ホテル・ローディンスのエクセレントルームがなにものかによって爆破され、ひとりのジャパニーズ・ダンサーが死んだのは、それから間もなくのことだった。

「まったく、いやなものですわね。あんな有名なホテルで無差別テロなんてねえ」

ニューヨークからボストンへ飛ぶシャトル便の機内でエドウィン・アーサーの隣席におさまった老婦人は、ありったけの指をごてごてと宝石で飾った両手を握りあわせながら大袈裟に嘆息している。それを聞いて、なるほど対外的には結局そういう『処理』になったのかとエドウィン・アーサーは冷静に考えただけだったが、婦人に対して良識あるそぶりで頷く手間も惜しみはしなかった。

「同感です。この世の中、つまらない争いごとが多すぎるというものです。私はつねに、全人類が叡智をもって平和の精神にめざめることを祈っておりますよ」

「本当にそのとおりね。お若いのに立派な考えをおもちなのね。あなた自然保護に興味は？　どうかしら、あたくしの所属している団体のパンフレットをお送りしてもよくてよ」

「いえ、私は……」

うぷぷぷ、と背後の席で誰かが吹きだしかけるのを、エドウィン・アーサーの耳はしっかりととらえている。

笑うぶんにはかまわないが、へたに首をつっこんでくるのは遠慮してもらいたい。この手の場所では、なるべく関わりを明らかにしたくないのだ――後ろの人物とは。

「もちろん私は、『限りある資源と地球の未来を考える会』のノースアメリカ本部運動員ですので、お気遣いはご無用にと」

「まあ、そうでしたの」

「そもそもこの会の起源をさかのぼりますと西部開拓の時代に端を発しますことはご承知のとおりですが、すなわち高名なスウェリントン牧師の……」

口からでまかせも極めれば才能のひとつである。ありもしない団体の理念についてエドウィン・アーサーが滔々と語りだしたのに老婦人はすぐさま辟易して、それきり話しかけてこようとしなかった。撃退成功、だ。

ぶくくくく、と後ろの男はおしころした声でしつこく笑いつづけている。そんなに熱心に笑えるほどのコメディを提供したおぼえはエドウィン・アーサーにはない。

……感情のネジがいくつか、壊れるか外れるかでもしているのだろう。

その手の精神は、エドウィン・アーサーから見て格別めずらしいものでもなかった。暗闇のなかで正気を保つには、いい方法だ。

「ウォークマンがこんなに元気だとは思わなかったな、ぼく」

ふと、その不気味な笑い声に並ぶ位置から、かわいらしい呟きが聞こえてきたのは——まさか自分まで錯乱したのだろうか？　エドウィン・アーサーは座席のうえで凝然と凍りついてしまった。

「もとからそういう造りになってんのさ、中身が。でなきゃ役に立たねえってことさ」

「ふうん、『親衛隊』として？　たいへんだね。とりあえずぼくにはガードマン要らないから、うちに来れば自堕落にしてられるよ」

「……。言っとくが俺はどこにいたって自堕落だぜ」

「でも、ぼくのとこにいる間は飼われないよ。今までみたいにはね、ガディス」

我慢ならずにエドウィン・アーサーが立ち上がり背後を見返ったときには、だが、そこには赤毛の『ソニー・ウォークマン・エクセル』ひとりが、のんびりとシートにそりかえっていただけだった。

『クリス様？』

呼びかけても応えはない。きっと高速で移動している最中なのだ。——ボストン郊外の、彼のための屋敷まで。

あの凄まじい異能力者である少年がチケットなしで飛行機に便乗するくらいのことには、エドウィン・アーサーもとやかく言うつもりがない。しかし……。

「変な小僧だぜ」
火のついていない煙草のはしを犬歯でかじりながら、ガディスが笑った。ノースモーキングのサインを律義に守っているらしい。
「かわいい上司に好き勝手にあちこちとびまわられちゃ、仲介役の立場もヤバくなるってものなのかい」
「私の立場にまで気をまわす余裕が君にあるなら、喜ばしいかぎりだが」
冷ややかにエドウィン・アーサーはそう言って返し、あらためて自分の席に身を沈めたが、思いのほか気分が荒れているのを自覚してやや眉をしかめざるをえなかった。
愚かなことだ。不快な感情を長くひきずるなど……。エドウィン・アーサー・カンナギ・クレイトンとしたことが。
『エドウィン、驚かせちゃってごめんね、ファイアマスター待ちきれなくて見にいっちゃった』
またこちらの意識の裏をかくようにクリストファーの思念がするりと潜りこんでくる。
無邪気に。
――子供のように。
エドウィン・アーサーは一瞬、その声にすら耳を傾けるのをやめようかと思う。このいたたまれなさは何なのだろう？

『感想はいかがですか、クリス様？』

『……エドウィン怒ってる？』

『なぜ私が？　私がクリス様のなさることに、怒ったりするわけがありませんよ』

そうだ。

地球上で最も強大な権力者であるクリストファーに対して、こう答える以外に正しい方法などありえない。

〈覡（カンナギ）の属〉から派遣された自分の使命をエドウィン・アーサーはよく承知している。特に、血統的に初めから優秀な素材であることをさだめられている者として。

ただクリストファーの言うなりに動き、柔順に仕えることだ。……あの少年が死ぬまで。

安全に……世界を破滅に追いこむことなく、静寂のうちに彼が死んでくれるまで、だ。

『ふうん、そう』

ぽつりと、クリストファーが小さく呟（つぶや）くのが聴こえた。

エドウィン・アーサーの意識の中では、それがひとつの認識に結びつくまでしばしの空白があった。愕然（がくぜん）とエドウィン・アーサーが両眼を見開いたときには、クリストファーの関心は別のところへ移ってしまったらしく、もう彼の気配を感じとることはできなかった。

「しまった（ジーザス）……！」

隣席の老婦人があらどうしたのかしらと呑気（のんき）な視線を送ってくるのにも気づかず、エドウィ



ン・アーサーは我知らず神の子（クライスト）の名前を呼んでいた。クリストファーとの交信中に、心の奥にいくらヴェールをかけようと無駄であることくらい、とうに知っていたのではなかったか、自分は!?

カンナギの一員としての今までのキャリアをたどってかえりみても、これは前例のないほどに奇跡的な失態だった。取り返しがつくかどうかわからない。クリストファーは決して単純な暴君ではないが……だからこそどこでどう思いついて死刑宣告を下してくるか予測がつかないのだ。

サラのことがそこで不意に思いおこされて、エドウィン・アーサーは自分自身に苦々しい感慨を抱いた。

こんな時にでもなければ、彼女のことなど、もはや思い出しもしないのだから……。

「浮かない顔だな」

屋敷に戻ったエドウィン・アーサーを、ジェンセン老人は片頬（かたほお）をゆがめた表情とそんな一言で迎えた。

それなりにこちらを気遣っているのか、ただ客観的にコメントしているだけなのか、この老人の態度はいつもわかりにくい。根本的に、愛想というものがないからだ。もちろん、いくら優しく声をかけられたとしても、誰かに愚痴（ぐち）をこぼして慰められたいなどとはエドウィン・ア

ーサーも考えはしない。つりあいはとれているのだろう。
「坊やの新しいおもちゃは見つかったのかい」
「首尾よく運びまして、何よりですよ」
「ふん、それであんたがお払い箱になるとでも考えたのかい」
さすがに、その言葉にはエドウィン・アーサーもポーカーフェイスを保てなかった。
「誰がですって？」
頭の中のどこにも用意されていなかった発想だ。……他愛（たわい）もない『宇宙人』ひとりと自分の立場がひきかえになるとでも？
未知なる異世界から落下してきた〈炎使（ファイアマスター）〉は、あくまでクリストファーの退屈を解消するためのちょっとしたスパイスだ。それだけでいいのだ。誰も、クリストファーの理解者の身代わりになどは……。
エドウィン・アーサーはそこで自らの首を横に振る。
理解者？
どんな人間のことなのだ、それは？
「いえ……あなたがそう考えるのはあなたの自由だということにしておきますよ」
「サラの旦那（だんな）にしちゃ弱腰だな」
すりきれた羊革のジャケットを着込み、真冬の寒気に覆（おお）われた庭園の手入れに出ていこうと

するジェンセンがぼそりとこぼした。

「！」

無言のまま、エドウィン・アーサーは鋭いまなざしを老人へと向けていた。この老人は自分とサラの関係を知っている――。

読んでしまうべきだろうか。

心を。

「どうしてそんな思いつきを？」

「なんだ、違うってのかい。おれはずっと、あんたがサラの仇討ちにきたんだと思っていた。サラがあんたの写真を大事に持っていたからさ」

べつにどちらでもかまわないというような口調でジェンセンは無愛想に言う。

「写真……？」

あの聡明なサラが、重要な使命を負って配属された土地にまで個人的な材料をもちこむとは考えにくかった。だが……。

もしそれが真実だったとするなら。

「爺さん、こっちにいたのかよ。ご注文の肥料は物置小屋のほうに運んどいたんで、サインもらえるかい」

使用人のためのダイニングキッチンから庭につづく二重扉が外から開き、造園業者のユニフ

ォームを着た青年が首をのぞかせたので、エドウィン・アーサーが老人に事情を詳しく問いただすタイミングは失われた。

「やれやれ、こう寒くちゃたまんねえや。どうもね、サイン確かに。あとこいつは新製品の除菌剤、キャンペーンでサンプル配ってるんで使ってくれよ。じゃあまた」

顔なじみのアルバイト青年はくだけた挨拶を残して、さっさとひきあげていく。

「貰ったって使うもんかい、こんな安物」

手渡された小型の容器を眺め、ジェンセンは気難しく鼻を鳴らした。アルバイトが大急ぎで帰ったのはこの老人の気性を承知しているからかと、エドウィン・アーサーはかるく肩をすくめた。

……そんな日常的な気分でいられたのは、しかし——ほんの一瞬のことだった。

「捨てなさい、それを早く!!」

とっさにエドウィン・アーサーが叫んだときには、もう手遅れだった。老人の手中にあった除菌剤の容器からどうっと凄絶な火炎がほとばしり、見る間にひとりの人間をまるまる舐めて呑みこむのを制止することなどできなかった。

「畜生がっ！」

エドウィン・アーサーは堪らずに悪態をつく。あの発火体だけをどこか別の空間に移動させようとしたのだが、時間も力量も足りはしなかったのだ。スプリンクラーが即座に作動して痛

いほどのシャワーを四方八方からエドウィン・アーサーに浴びせた。老人を包んだ炎もほどなく消えるだろう。それで彼を救えるかといえば、完全に否だ……。

『ははは、は、は』

エドウィン・アーサーの感覚に触れてくる、ごく不鮮明な笑い声があった。

しわがれた、老人の呟きが。

『やっぱり、こんなもんなんだろう』

『おかしいと思ったのさ』

『でなくちゃおかしいと思ってたのさ』

『ようやく』

思惟の断片が舞ってゆく。エドウィン・アーサーは厭わしく瞳をそむけた。

違う。違う。老人が大量の殺人を犯したのは、それが国家による戦争だったからだ。これは報いなどではない。決して絵に描いた方程式の結末などではないのだ。

そんなに美しく、そんなに丁寧に、すべての人間を正しく裁く神などどこにもありはしないのだ。

「応報というなら傲慢ではないのですか」

濡れそぼつ顔を上向けて。

挑むように、炎の影へとエドウィン・アーサーは問いかける。

「でなければなぜ犬死にという言葉が辞書にあり、なぜ生まれたばかりで餓死する子供たちが世界中にあるのですか。それがいったい何の報いだというのですか」

富めるものが富み、貧しいものが貧するのはなぜか。優れる者があれば劣る者がうまれるのはなぜか。光輝く道を歩む者の背後でつまずき落下する者のゆくえまで、いったい誰がさだめたというのか。

いったい誰が。

いかなる、確たる目的をもってあの少年を世に遣わしてみせたのか。

かけつけてくるセキュリティサービスの人間たちに後を任せて、エドウィン・アーサーは水浸しのスーツを替えるためにその場を離れた。ジェンセンが死んだことの報告も含め、クリストファーに会いにいかねばならないだろう。

そう……おそらく神の手など、もはや効力をなくしているのだ。

人の生命を気まぐれに左右する支配者は、もっと別の場所にいる。

5

屋敷の中でクリストファーを捜すのに、これほど苦心しなければならないのも、最近では稀（まれ）

なことだった。

いつもなら黙っていても鋭利な直感としてエドウィン・アーサーの内にひらめいてくるものが、その時にかぎってはひどく遠く――ほとんど大気圏外の彼方ほどとらえがたい位置まで遠ざかり、ごく微弱なパルスしか発していないように思われた。

これは……もしや重大に気落ちしているということなのか、あの少年が？

届いたばかりの新しい玩具にはしゃいでいるはずのクリストファーが。

何のために？

「ジェンセン死んじゃったんだね、エドウィン」

ようやく捜しあてたクリストファーは、図書室の机の上に人形のようにぎこちなく居座っていた。

エドウィン・アーサーの姿を認めるなり、前触れもなしにぽつりとそんなことを言う。

「まあ仕方ないよね。どっちみち自分から死にたがってたしね、あの人」

当然とばかりにあっさり片付けてしまうあたりは、いつものクリストファーと少しも変わりはしなかった。ジェンセン老人ひとりが死んだからといって憂鬱になるような感性は彼にはない。

するとこれにはやはり自分の『失言』がかかわっているのか、それとも……。クリストファーの心理をつかみきれないまま、エドウィン・アーサーはまず側近としての義務をはたすこと

にした。

「問題はむしろ、刺客がなぜジェンセンを消したのか……つまりジェンセンの言葉なり精神なりを封じる必然性が、彼らにあったということです。連中がジェンセンを使ってクリス様のまわりに何かを仕掛けたとすると……」

「どうだっていいよ、そんなの別に」

はあ、とクリストファーは大きな溜め息をつく。

「ですが……」

「あのねえエドウィン、ぼくうっかりしてたんだけど、エドウィンはぼくが生きるか死ぬかってことは心配しなくていいんだよ。大事なのはぼくが面白いかつまらないかってことなんだよ。じゃないとエドウィンもいつかサラみたいになっちゃうよ?」

底のない翠色の瞳でエドウィン・アーサーのことを眺めやり、クリストファーが不意にそう言った。エドウィン・アーサーは喉元で言葉を失ってしまった。

「それとぼくもうひとつうっかりしてたんだけど、ぼくたちのところに落ちてきた『宇宙人』ってファイアマスターだけじゃなかったみたいなんだよね。ぼくそれですごく気が重くなっちゃった……。きっとあの人たち今は極東のあたりに潜りこんでるけど、そのうち好き勝手に、自分たちの事情だけで地球をひっかきまわしはじめるんだよ。もう自分たちの世界ひとつ壊してこっちに来てるくせして、ぼくの目の前にまでそんな内輪の都合なんか持ちこんでくるのっ

て、無神経だよね」

「サラはあなたに、いったい何をしたというのですか」

クリストファーの話を途中でさえぎる無礼さえも忘れて、エドウィン・アーサーは乾いた声で問いかけていた。クリストファーは少し驚いたように口をつぐみ、まばたきをひとつした。

「サラって？　ああ、サラ？　別にね、サラがぼくに何をしたってわけでもないよ。サラはいつもすごく頭よかったし、つまんないミスもしなかったし」

「ではなぜサラは死なねばならなかったのです、クリス様、いったいなぜ！」

こんなことを彼に尋ねても、自分自身の運命にそれがプラスにはたらくはずがない。それは触れてはならない禁忌の蓋だ。カンナギの組織上層部でさえ真相をつかみとれなかったことなのだ。うかつに近寄れば我が身を滅ぼすだろうと――とうにわきまえていたことだ。己の愚かさがはるかかけはなれた場所にある、奇妙なものに思われる。

「ぼくがサラを殺したと思ったの、エドウィン？」

不思議と透きとおった、くもりのない静かな表情で、クリストファーが問い返した。

「なんだ、そんなこと気にしてたんだエドウィン？　ちがうよ、サラがぼくのために死んだんだよ」

図書室の大きな机にじかに座りこんでいるクリストファーは、その膝の近くに放りだしてあったSONY製の小型カセットプレイヤーを拾いあげ、あらためて電池をセットする。

「でもぼく、サラをたすけてあげようって気にならなかったから、エドウィンがやっぱりぼくのせいだって思うんだったら仕方ないかも」

それはクリストファーが故意に、彼女を見殺しにしたという意味なのか。

不可抗力ではなく……？

「もしかするとぼくはサラのこと嫌いだったかもしれないし」

カセットプレイヤー本体のまわりでもつれてしまったコードをほどきながら、クリストファーは邪気のないそぶりで首をかしげた。

「だって、ねえ、エドウィン……ぼくが今まで誰にもキスされたことがないって言ったら、じゃあわたしがキスしてあげましょうかってサラは言ったんだよ。なんだか、そうすればぼくがまともな人間になるみたいに。拾ってきた動物に、真っ先に餌をやった人の勝ちみたいな感じだったんだよ。あの人がどういうつもりだったかエドウィンにはわかる？」

「……」

まさか。

くちづけで。

愛されない子供を……救う、善意や、叡智のようなもの、が……。

エドウィン・アーサーは信じがたい思いのまま立ち尽くした。

そんなものがこの少年に必要だと本気で考えたのか……いや、考えたかったのか!?

サラは。

この、たったひとり原始人のなかに生まれおちてしまった未来人のような——ひとりきりミニチュアの世界に漂着してしまったガリバーのような人格の主を、相手に。

母親に抱きしめられキスされることで、欠けた心を癒し子供らしさをとりもどす、名作ホームドラマの主人公であれと望んだのか。

あるいは彼女にしてみれば、軽い気持ちで口にしたことだったのかもしれなかった。または現在のエドウィン・アーサーのごとく、わずかな失言から追いこまれた境地であったのかもしれなかった。だがいずれにしてもクリストファーには……。

「私は……サラのようにはなれませんね」

エドウィン・アーサーは低く呟いた。

「あれは果敢な女だったのです」

生命をやどす毅さをもつ女であればこそ、クリストファーの孤独から目をそらすことはサラにはできなかったのだろう。

少年の心の空洞に自分を刻みたいと思ってしまえば、それで最後——。

望みが叶うことはありえない。

「ふうん、そう？　エドウィンの気持ちがサラと違うんだったら、それでいいよ。だからあんまりぼくのこと気に病んじゃだめだよ。エドウィンが中年おじさんになっちゃう前には、ちゃ

んとぼく死ぬ予定になってるから安心してよ。ね？」
こだわらない笑顔と一緒に、クリストファーはまじめに念を押す。
それもきっと、クリストファーなりの誠実なぐさめにほかならない。
そこにどれほど残酷な意味があるのか、彼本人はいつまでも、永久に知ることはないままに。
「クリス様がお望みなら、私はそのとおりに……」
こわばった唇をそう動かしたエドウィン・アーサーは、だが驚愕に声をなくさざるをえなかった。クリストファーも、何かきょとんとした表情でエドウィン・アーサーの姿を見つめかえしていた。
「どうしたの、エドウィン？」
訝しげにクリストファーが尋ねる。
エドウィン・アーサー自身、己の頬を伝い落ちた一筋の涙の正体をつかめはしなかった。
涙など流せる時代は終わったはずだ。どんな絶望がおとずれようと、理性を狂わせることだけはするまいと――醒めた心ですべてに対峙してゆけばいいと自分を律してきたはずだ。
……どうして。
「いいえ……なんでもありません」
エドウィン・アーサーはゆっくりと首を横に振った。

誰にむけられる涙なのかは、もういい。

なにもかもが希薄な今……自分が本心から誰を愛しているかもわからないほどに退化した感情のなかで。

この涙も、いつか人間という愚かな生物の、ひとつの条件反射に数えられていくだろう。

「カンナギの上層部に、私が独断専行でファイアマスターを誘致したと、報告します。彼らに指示を仰がず動いたことで、私は更迭されるかもしれませんが……まあ、罰されてもやむをえないでしょう。犠牲者も出ていることですし」

淡々と語る自分の声をエドウィン・アーサーは他人事のように聞いた。

クリストファーはじっとそのエメラルドの瞳をみひらき、謎めいたようすで、エドウィン・アーサーの言葉に可とも不可とも答えず座りつづけていた。

「それでは、私はこれで……」

「ならエドウィン、実験をしようよ」

図書室の出口へと靴の向きを変え、静かに退出しようとしたエドウィン・アーサーの背中に、クリストファーがふとそんな一言を投げた。

実験？

ふりかえったエドウィン・アーサーにむかって、クリストファーはさっきから掌でもてあそんでいたカセットプレイヤーの蓋をあけ、中に収められたテープの側面をちらりとのぞかせて

みせた。エドウィン・アーサーが彼にプレゼントした、あのウォークマンだ。
「これね、蓋の具合がおかしくなったからメンテナンスに出したんだよ。そしたらサービスで、試聴用テープが入って戻ってきたんだっていうんだ。でも昨日これを受け取ったのはメイドたちじゃなくてジェンセンだったんだよ。どう思う？」
「……それは……」
あからさまに危険すぎる。エドウィン・アーサーは眉をひそめた。
「だよね？　だからこれで実験しようよ、エドウィン。これでぼくが退屈しなかったら後はエドウィンの好きにしていいよ」
クリストファーが何の話をしているのか、今の科白のつながりではまったくわからない。だがひどくいやな予感が、そこにまとわりついているのは確かだった。もう少しはっきりとした説明を求めようとエドウィン・アーサーが口をひらいた——その時だった。
簡易ヘッドホンの一方を自分の右耳に押しあて、なにげないしぐさでクリストファーがテープ再生のスイッチを入れたのは。
そして——。
「クリストファ……」
呟いたその瞬間は、エドウィン・アーサーの意識において完全な、無の空白だった。滑稽なタイムラグだった。両足が自分の意志から離れ、少年の方角へとびだすことさえ拒んでいた。

身体の芯をひきぬかれたような唐突さで、クリストファーの小さな両肩がすとんと音もなく広い机のうえに倒れた。とても簡単な、あっけない結果だった。

プレイヤー本体のなかで、テープはまだまわりつづけている……。

「!!」

テープの存在に目が向いたところで、ようやくエドウィン・アーサーの身体は一気に動いた。昏倒したクリストファーの傍らへと駆けより、簡易ヘッドホンの端子を本体から乱暴に抜きとる。

「クリス様!!」

精神破壊テープだ。エドウィン・アーサーはソニー・ウォークマンを力任せに床へ叩きつけた。こんなものにむざむざ……!!

クリストファーは仰向けに倒れたきり微動だにしない。この手のテープをまともに聴いたら廃人になるのは確実、場合によっては直後にショック死する。

自分の発言が、クリストファーをこんな自殺行為に追いこんだというのか。どういう必然でそうなるのかエドウィン・アーサーにはわからない。ただ——。

このままクリストファーに去られてしまってはあまりに救われない——自分も、そしてサラも。

『クリス様、聴こえますか？　今からあなたの痛みをこちらへ移植します』



何だって？

私は何を始めようとしているのかと、エドウィン・アーサーは汗ばむ掌で額をおさえた。

正気の沙汰ではない。

枷の壊れた心が、理性を置きざりに暴走していくようで。

『クリストファー様』

冴えた世界の中、もうひとりのエドウィン・アーサーが囁いている。

『クリストファー様、あなたの誕生にも終わりにも、私にはどうしても神のさだめた意味など見いだせないのですよ。この狭い檻のなかで朽ちはてるためだけにあなたが在るのなら、そもそも真に存在をゆるされたものなどどこにいるのですか。アレキサンダーやナポレオンが何だというのです。あなたはこの地球の征服者にも、宇宙人どもを撃退するヒーローにもなれるはずだ。さぞかしドラマティックに、エキサイティングに……！』

世界すべてが、スピルバーグの映画なみの巨大な娯楽でかまわないのだ。

クリストファーにとっては。

全部が、現実感のないボードゲームでも、ロールプレイングゲームであってもいい。

その愉しみを、生きてゆくことだと思えるなら。

『……ぼくをたすけたら死んじゃうよ、エドウィン』

ふわりと、遠い、遥か彼方で、クリストファーの意識がおしえた。

エドウィン・アーサーは微笑する自分を感じている。それすらもまた、苦しまぎれの条件反射だったのかもしれないが。

『たしかに、いざ実際に死ぬとなるとおそろしいものですね』

チャンネルはすでに合っている。

繋がれる意識の接点を、エドウィン・アーサーはためらわずにひらいた。テープにおさめられた人工的な信号がつくりだす凶暴な砂嵐とねばりつく混沌とが、ともに溢れだす怒濤と化してクリストファーの精神から流れこみ、無防備なエドウィン・アーサーの神経中枢を直撃した。……それきり、何もわからなくなった。

6

「こんなに人使いの荒いガキの相手だとは聞いてなかったぜ、俺は」

ファイアマスター・ガディスの不満げなぼやき声がする。

「だってウォークマンがいちばん、おつかいに出しても、誰かに操作されたりとか装置をしかけられたりとかしなさそうじゃない？　それにウォークマンって、人使いが荒い相手のほうが好きみたいだし」

「おい、んなこた誰も言ってねえんだよ、くそガキ……。それにおまえなァ、そのSONY WALKMAN EXを持ちながら俺を『ウォークマン』呼ばわりすんのは……」

「いい名前だよね?」

「だからそっちの機械といっぺんに呼ぶのは紛らわしいっつってんだろーが、俺はよ」

「ぼくがちゃんと区別つけてるから、大丈夫。あれ?」

言葉の途中で、いちはやくクリストファーが気づいてベッドのほうをふりむいた。午前中の晴れわたった空から眩しい陽光のこぼれてくる窓の下で、エドウィン・アーサーはそっと両眼をひらいていた。

我が身のおかれた場所は、匂いでわかった。なじんだ空間だ……ボストンの、屋敷だ。

見慣れた、自室のカーテンと壁紙が目にうつる。

「よお、リーバイス君。アタマの中身の具合はどうだい」

にたりと厭味に笑って、ガディスがくだらない洒落を投げてくる。

「やあ、パナソニック君。おかげさまで会いたくもない野蛮な顔がよく見えるよ」

同じ文法でエドウィン・アーサーも反撃に出てやった。失礼な野郎だぜ、とガディスは舌打ちすると、別段ここにいてやる義理はないとばかりに挨拶もなく、開け放しのドアから立ち去っていった。

「ウォークマンてば、もしかして今のがとっておきのギャグだったのかな?」

クリストファーは奇妙な感心のしかたをしている。どうコメントするべきか、エドウィン・アーサーは少し悩んでしまった。

「……実験は、どうなりましたか、クリス様」

用心深くベッドの上に身をおこし、尋ねてみる。身体の内に苦痛や重さが残っているようすはない。

ここにこうして自分自身が生きていることで、大体のなりゆきは問うまでもなくエドウィン・アーサーにも推察できた。

ともかく、自分がサラと同じ道を辿りはしなかったということまでは。

「聞きたい？」

翠色の瞳が、とたんにいたずらっぽい光を放った。

「うん、ぼくの実験はね、エドウィンがぼくをたすけるかっていうのと、ぼくがエドウィンをたすける気になるかっていう、二本立てだったんだけど……両方ともイエスになったからびっくりしちゃった。あのテープの信号はね、ぼくとエドウィンとで半分ずつとりいれた状態をキープして端から掃除したら、すぐに消せちゃったよ」

びっくりされてしまったとは……。エドウィン・アーサーはかすかに、物悲しいような救われたような、複雑な気分で苦笑いしたが、その思いを言葉に換えるのはやめにした。

「でもね、だから実験の賭けはエドウィンの勝ちだよ。世界征服、してあげてもいいよ」

「は？」

突然クリストファーの口から出たその単語に、エドウィン・アーサーは一瞬めんくらった。

――世界征服？

「忘れちゃだめだよ、エドウィンが言ったんだよ？　ぼくたち、力をあわせて地球征服して、それにエイリアンとバトルファイトだよ」

ベッドのへりにずいと肩をのりだして、クリストファーはひどく真剣に、そんな科白で駄目押しをかけた。エドウィン・アーサーは勢いにおされ、ええ、そうですね、などと間の悪い返事をすることしかできなかった。

それからふと、クリストファーの手の内におさまったカセットプレイヤーに視線が止まる。見たところ新品同様に輝いている。エドウィン・アーサーが叩き壊したものを、また懲りずに修理したらしい。

「こちらは、さすがにもう悪いものが仕掛けられている心配はないのでしょうね」

「うん。なにしろウォークマンにメーカーの工場まで持ってってもらったからね」

「……あの名前のままで、ですか？」

エドウィン・アーサーが目を瞠るのを、だがクリストファーは何をあたりまえのことをというように仰ぎ見た。

「だってそのほうが面白いじゃない、エドウィン？」

「……」

しばしエドウィン・アーサーはその構図に呆れ、やがて、どうせならば正直に笑っておくことにした。――今度は、先刻よりもずっと、幸福な気分で。

ハレアカラ異聞

1

格段に眩しい朝の光が、大型キッチンの明かり取りからはまっすぐにさしこんでいる。
電熱式コンロの手前に置いた深皿のなかに卵をひとつ割り入れたところで、視界を覆いがちな金褐色の髪をゆっくり動かし、窓べりにやってきたちっぽけな鳥の影へと、寡黙にして繊細な心を有する〈風使〉イオ——来生閃はしずかなまなざしを向かわせた。
午前七時十五分。
申しあわされている起床時間には、まだあと十五分の猶予がある。
陽光にうつくしく輝く虹色の羽根をたたむ小鳥の内に、大自然に生けるものすべてのもつ叡智が宿ることを、この感受性にすぐれた風使は複雑な手続きなど経ずとも知っている。
「……そうか……」
ぽつりと低くつぶやいて彼は、つきぬけるように青い空の色へと瞳をうつした。
風の芳りから——
報らされるのは、ごく単純な真実だ。
We're still alive.

いきづいていること。
keep alive.
「……」
乾いた、高温だが爽やかな空気。あざやかな天然の色彩を実現する、大地。
それらへ対してよけいな言辞を弄しては、自らの実感するものの価値をつまらぬものへと崩してしまう。そんなふうに、イオには思えてならない。
「卵ひとつ割ったきりで、よく三十分もぽかんと突っ立ってられるもんだぜ……」
シャワーあがりの濡れた赤毛はそのままで、呆れはてた気分を隠さず長身の——無駄に背ばかりが高いなどとユーマに毒舌をふるわれるのはイオも同じなのだが——〈炎使〉ガディスが大股にキッチンを横切り、冷蔵庫からミルクのパックをとりだしてゆく。
ガディスが背後で冷蔵庫をあけたのはイオも察知していたが、それから彼が次の反応に出るまではもうわずかの時差が必要だった。
「！　牛乳は今……」
「あん？」
はたとふりかえったイオは、ガディスがすでに牛乳パックの開け口から直接、一気に中身をからにしているのを見届けて、かすかな溜め息をつく。
「……フレンチトーストに、しようと、思ったんだが……」

「そりゃすまねえな、生卵の観察日記つけてたとしか見えなかったもんでな」
「べつに俺は……」
「まあ待ってろ。ついさっき、てめえのありがたい兄貴が朝のサイクリングに出ていきやがっただろ。冷蔵庫の補充なら奴が考えることさ」
「ライアが？　……」
言いかけて時計を眺め、たしかに針が七時四十五分をまわっていることをイオは確認した。その間、三十分の経過がどこか認識の彼方にすっとんでいるのは、イオにとってそれほどめずらしい事態ではない。
「気がつかなかった。……空を、見ていたので」
厄介きわまりない性格の〈光使〉ライアが愛する『弟』からの無視をこうむるのは、至極あたりまえのこととガディスはとらえ、同情のかけらもしなかった。自業自得だバーカ、である。
「ったくてめえも、そのペースでよく今まで生き延びられてるぜ」
リビングルームのテーブル上にからの牛乳パックを投げ捨て、水滴のおちる錆色の頭髪にバスタオルをまきつけながらガディスは皮肉に言う。
「俺もそう思う」
すなおにこくりとイオは頷き、無表情なままつけたした。

「なんとかなるものだ」
「……。便利なセリフってやつだな」
「実際、なんとかなっている」
かみあわない会話には頓着せずイオが砂糖の容器に指をのばしたとき、スプリングのきついドアを引きあけ、ストアの袋をかかえた黒髪の来生家長男が帰還をはたした。彼本人は、自分はすでに来生家次男であると主張しているのだが……このあたりの調整は最年長人物ことガディスとの間で、いまだ解決をみていない。何が悲しくて俺がきさまらのお兄様にと吠えるガディスに、なんだ、一家総勢から慕われる長兄の立場をせっかく進呈しようというのに、などと心にもない科白を吐いてのける来生衛は状況をとりなすどころか火中に油を流しこんでいると言えよう。
「閃、ご所望の牛乳と蜂蜜にメイプルシロップ、おまけにシナモンパウダーというのはどうかな？」
「……ありがたい」
不器用に答え、ぎこちなく『兄』の手から材料のつまった袋をうけとってから、イオはわずかにその秀麗な眉をしかめさせる。
「話した、だろうか？」
「何を？」

透明な眼鏡の奥から、漆黒の瞳が彼をみつめかえした。
そう、漆黒の……
光つかさどる者には不似合いな闇色の。
「今朝のメニューについては、ゆうべのうちに姫君がおまえにリクエスト済みだ。そこからの必然で、そういう品揃えになっている」
「……ああ」
わかった、とイオは了解する。
イオが万一リクエストを失念していたとしても、これだけアイテムをそろえて目の前につきだされては、予定を変更してでもフレンチトーストをつくらざるをえない。
もっとも、食事当番がまわってくればつい反射的に必ず卵入り牛乳のなかにパンをつっこんでしまうのが、数年前に愛しい『妹』にフレンチトーストの味を褒められて以来、がんとして変わらないイオの癖なのだが。
「よお、自転車小僧。おれさまに煙草の配達はどうしたってんだ、それで？」
「本日はすばらしい晴天のうえに、ビーチの景色が極上だ。さぞや来生凱殿はストアまで散歩がしたかろうと、俺の愛情が囁いたのさ」
「おい小僧……んな暇が俺のどこに……」
タオルの隙間から抗議するガディスのことは無視して、

「では相変わらずの眠れる美女をお迎えにゆくとするよ」

申告するより先に、衛はベッドルームのほうへと足を向けている。

二つのベッドルームに、ソファベッドつきの広いリビングと、フルキッチン、という部屋構成の、このコンドミニアムに彼らが滞在するようになって一週間がたつ。

北太平洋――

ユナイテッドステイツ・オヴ・アメリカ、第五十番目の州、ハワイ諸島の中核オアフ島に、彼らはいる。

リゾートを気取れるなら、嬉しいことだ。

せめてもの、魂の休息として……？

「無理かな」

贅沢に面積をとる廊下の途中で、あっさりと衛はその思いつきを却下する。

つかのまでも平穏に浸って、ありがたく羽根をのばして、純粋に、楽をしてしまえばいいのだろうが。

現実に自分たちにゆるされた悠長な時間と、魂のとらえる自らの位置とが、ひろくかけはなれてしまうのは光使ライアひとりの気分ではないはずだ。

貧乏性ということか。……来生家の男どもの、困った傾向だ。

一生懸命に、楽をしている。

「あきら？」

姫君専用、オオカミ立ち入り無用、と貢が周到にただしがきを貼りつけたベッドルームの扉にノックの指を打ちあてて、いつもどおりに衛はそう問いかける。

応答がかえってくるわけがないのも、いつものとおりだ。

やれやれと呟きながら扉のノブに手をかけ、だが動かしたノブの手ごたえが微妙に本来と異なることに彼は即座に気づく。充分に閉じていない——半開きの——

「！」

遠慮せず一杯に押しひらいた扉のむこうでベッドはきれいに空になっている。

「ガディス!!」

とっさに呼びかけたのは、使鍵がつながりあう関係上、最も話がはやく伝わる相手である。兄弟間における差別ではない。

「あきらがいない」

音声によらぬところで発されたシグナルに、それまでの倦怠ぶりとうってかわった電撃の素早さで赤毛の炎使が衛のかたわらへと滑りこんだ。

半瞬おくれて金褐色の残影をなびかせ、イオもまたガディスにつづく位置へ姿をあらわす。だがその直後にイオはひとり、しまったというように表情を曇らせた。

「……ライア」

「司杖（ガース）の反応はノーマルだ、物騒なことにゃなってないはずだぜ」
「光子結界の囲みにも外敵のふれた気配はない。侵入があったとは思えない」
厳しい調子で司杖の番人としての言葉を告げるガディスに、衛もコンドミニアム全体の護（まも）りに責任をとるべき守護者（ライエス）としての見解を返す。わりこみそこねたイオが、心苦しげにもう一度、その端正な唇を動かした。
「ライア」
「でなきゃよっぽどこっちの裏をかく手で奴らが面白がってるかの、どっちかさ」
いやに泰然（たいぜん）とした科白（せりふ）をガディスは吐くが、『敵』の力の強大さを知りつくしている彼の言うことである。むしろ呑気（のんき）なほどの言い方をせずにおけない理由というものはある。
「どうかな」
硬く切りかえしておいて、内に鋭利な空気を残したまま衛はそこで無口な弟のほうを眺めやる。
「イオ、心配しすぎても判断力が低下するだけだ、手分けして――」
「違う、ライア」
ようやく手元にまわってきた順番に、おずおずとイオは自らの心を明かした。
「言い遅れて、すまなかった。……ユーマだ」
「……」

正直に三秒間ほど炎使と光使の両者は沈黙し、ガディスがコミカルなアメリカ人風に両腕をひろげたのが次のアクションだった。

一方で衛のほうは沈黙を保ったまま、さらに廊下の奥のベッドルームへ足を運び、今度はノックもなしで扉を押しあける。

「あああ、お兄様……」

ふたつ並んだベッドの片方、ひまわり色のベッドカバーの下から焦茶色の頭を半分だけのぞかせた来生家末弟がいかにも恐縮したようすでひらひらと手の指を振ってみせた。

「ごめんごめんっ！　ちょっとぼくとしたことが情にほだされて」

「犯罪者に弁明は必要ない」

ひややかに答えるなり、がつんと良い音をたてて貢の額を小突いておいて衛は容赦なくベッドカバーを一気にひきはがし、その真下にまるくなって爆睡中の、問題の姫君の姿を見出した。

どうしてそんな状態で放っておいたのかと、同情と非難の色を半々にまぜあわせた、複雑なまなざしをイオが相棒の〈水使〉へと送った。いくら建前は仲のよい兄妹とはいえ同じ一つのベッドのなかで、年頃の娘が若い男の膝に頭をのせかけてぐっすりと眠っていた日には。

「……あきら」

自他ともに認める利己主義の保護者が、殺気立たないはずがない。

かかわりあいになるまいと、すでにガディスはさっさとリビングルームにひきあげてしまっている。そういえば自分もフレンチトーストを置き去りにしてきたのだとイオは気づくが、うまく退場するタイミングを逃している。

「うに？」

逆流するダークブラウンの長い髪ごと頭を持ちあげて、ぼんやりと、あきらは平和にまばたきをする。

「ああー。えーちゃんだ、おはよー」

「おはようじゃないよ、この嫁入り前の娘は」

「いたたたた、いたたっ。うああっ、えーちゃんサイテイだっ！　さど！　弱者虐待！」

「さどでもまぞでも関係ない。不良娘を更生させる義務があるからね俺には」

パジャマの背中をわしづかみにしてベッドから彼女をひきずりだすと、手を離さずに衛はずるずるとあきらをバスルームに移動させてゆく。あーあ、と嘆息をしつつ貢が力なくそれを見送った。

「お兄様このごろ本気で手が出るからなー、深刻な家庭内暴力だよ」

「助長させるおまえが、悪い」

自明の事実とばかりにイオがぽつんと呟く。

「そんな評価、心外だな。ぼくだって日々の生活にスパイスをかけなくちゃってことくらいは

考えるさ」

ひょいとひまわり色のベッドから足を投げおろして床に降り立ち、貢は大きなあくびとともに伸びをする。

「だいたいこの家であきらと一緒に寝てやれる兄貴なんてぼくしかいないだろ、どう考えたって！　これがガディスのベッドだったりしてごらんよ、血の雨だよ」

「理屈はわかるが……」

「そうそう、適材適所っていうだろ」

「役得だ」

ぼそりとイオは真顔でそう指摘し、ごほごほと貢を思いきり咳きこませた。

「おまえねえ、それを言ったら……」

本物の役得ってのはさ、とまともにレクチャーしかけて、やめたくだらない、と貢は力任せに東向きの窓をあける。晴れわたった、水使ユーマ好みの紺碧の空だ。いい天気だ。

実際、正しい役得の姿といえば、たった今こまった不良娘を布団からひきずりだしてお説教を垂れているがわの、その当人のものであるはずだった……。

「横暴だよね、えーちゃんのあきらの扱いってばさ！　最低最低ど最低、男兄弟とおんなじ乱暴さだよねえええっ!!」

バスルームの洗面台で勢いよく冷水を溢れ流しながら、あきらは半開きのドアのむこうに大声をぶつけている。のばしっぱなしの髪が手前に落ちてくるのを雑に束ねて、ざっと顔を洗ったあとでタオルが見当たらないのに気づく。

「妙齢の令嬢らしい自覚があったら、男のベッドにはもぐりこまないな」

厭味と一緒に、肌にやさしいシルクのフェイスタオルがドアの隙間から飛んでくる。

「あきらそんな不出来な女じゃないもんだ」

「……ふしだらな女じゃないって？」

「だいたいおんにゃじだよね！」

タオルで鼻をおさえたままムキになって怒鳴りかえしたら、

「不出来な子に育てなかった自信はあるけれど、兄不孝な子ができてない保証はないな。なにしろ俺の愛を横暴だと理解するほどのひねくれぶりだからね」

どっちがひねくれているのかと呆れる、おとなげないコメントが頼もしい兄からの反撃だった。くっそおお、とあきらはタオルをねじって呟く。

「……みっちゃんのベッドは、男のベッドじゃないもん。安全だもん」

「……。あきら、そんなセリフ貢本人の前で言ってごらん、あいつが一生たちなおれないことうけあいだよ」

「だって、えーちゃんもガディスもリビングで寝るから、あきら一人で大きなベッドルーム独

占してるからやなんだもん。だからそしたら、みっちゃんとせんちゃんのとこに行ってたほうが安心だもん」

「あきらも十五歳になったんだから、それくらいの寂しさは我慢できるだろう」

「そんなことないもん、生きてる長さでいったらもっと行くもん、ほんといったらエクサール・レア二十代だもん、大人だもん！」

「……。その論旨はますます自分をおいつめるんじゃないのか、あきら？」

「そーゆー気もする」

「気持ちだけで大人になろうとするんじゃないよ。無理だから」

「えーちゃんもそうだった？」

なにげない忠告に、あきらの声がしっかりと逃がさずにくいついた。

「いや。俺には無理を道理でとおす秘密の呪文があるからね」

「何それ？」

「あきらにばらしたら秘密にならない」

「そーゆーとこ本当に大人じゃないよね、えーちゃんはね！」

「無駄口たたかずに、はやく食卓においで。そろそろ閃のトーストが焦げるか冷めるかの、どちらかだ」

ドアのむこうで気配が動き、衛の靴音がゆっくりとバスルームの前から離れていく。顔の下

半分をタオルでおさえた手を止めて、あきらは開いた隙間の遠くに去る彼の背中をじっと眺めやった。

それから洗面台の上に設置された鏡を、ふとふりむいて、見つめる。

鏡面のなかから睨みかえす、きつく鋭い瞳をした、十五歳の来生あきら。

まだこんな場所にいる。

2

ワイキキ・ビーチの海岸沿いから、わずかに陸側に折れた路地には、その周辺の高級感あふれるホテル街およびショッピング・ストリートの雰囲気とはうってかわって、ごちゃついた露店が立ちならんでいる。わざとらしいほどに土着的な南国らしさを前面におしだした店先に飾られているのは、観光客あいてのみやげものがほとんどだ。山と積まれたTシャツを横目に見ながら、自称ソニー・ウォークマン・エクセルまたの名を炎使ガディスは、勝手知ったる足取りで、迷路のようなマーケットプレイスに踏みこんでいく。

「なんだい、お久しぶりじゃないかい、お兄ちゃん」

あやしげなアクセサリーを扱う店の、ビッグ・ファット・ママ——たっぷりと実にきもちよ

く、いい感じに肥えたおばちゃんがにたりと笑った。
「ガラス屋はいるかい」
無愛想にくわえ煙草のまま、ガディスはそれだけを尋ねる。
「ざんねん、あの子はだめだね、長いバカンスに出てんのさ」
「いつ戻る」
「さあねええ。お天道様の具合しだいさ、そればっかしはね」
恬澹と、裏側のひとつも透けて見えない、おみごとなタヌキぶりで彼女はそらとぼけてみせる。腹まわりの贅肉だけでなく面の皮も年季入りというやつかとガディスはげっそりした気分になるが、取り引きに忍耐は不可欠である。
「金はある。アタマ二千ドルでどうだい」
「ケタひとつ足りないよ、ガラスは高いんだからさ」
「ふん、アフターサービスも年間保証もなしでよく威張れたもんだぜ。この御時世にな！」
「商売さ、こっちもね」
節くれだった茶色い指でチョコレートバーの包装を剝き、ばりばりと嚙みくだく歯の間から『大型女』はそっけなく答えた。
「さあお兄ちゃん、恋人に真珠リングくらい買っていっておやりよ。安いよ」
「一人アタマ五千で、五人だ。トータル二万五千、悪くないはずだぜ」

「五人なら、四万はお出しよ」
「また来る」
にがにがしく言ってガディスは店先からブーツの踵をひきあげる。だが、あきらかに模造くさいパールをとびこえて眼にとまった淡い黄金の輝きには、やや気を惹かれた。
「なんてんだい、この石は？」
「シトリンさ。黄水晶ってやつだよ」
「合成なんだろ」
「ばかいっちゃいけないよ、本物に決まってんじゃないかい。こんな色が好きなら、こっちにゃトパーズもあるよ。高級なやつがよけりゃ、ゴールデンサファイアなんかも出してこられるさ。どうかね」
ゴールデンサファイア、という語感に、また少し興味は動いた。
黄金の高貴――。
透ける光の色をとじこめた、あの底なしにいけすかない奴の双眸にはぴったりの。
「そのうちな」
ガディスはかるく肩をすくめ、ふらりとその場を後にする。黄色い石に皮肉をこめてばか高い首輪あたり贈ってやるのも、気晴らしのひとつにはなりそうだ。どのみち自分の金ではない。

「明日またおいでよ。三万ドルで五人、大サービスさ、『ガラス屋』には言っとくよ」

大柄なガディスの背にむけて、もぐもぐとチョコバーを嚙む口は休めずにビッグ・ママが間延びした声を投げた。

「お早いお戻りだったな」

ショッピングセンターの片隅にぽつんと建てられたカフェ・スタンドの壁ぎわで、湯気のあがる紙コップを片手にかかげて、黒髪の相棒がガディスの帰りを迎えた。鼻を鳴らしながら無言で衛の手から熱いコーヒーを奪いとり、ちゃちなつくりのベンチの上にどかりとガディスは座りこむ。

「だからワイキキなんざつまらねえって俺は言ったのさ」

特にこんな春休暇の最中——風光明媚な五月などという季節にでは、どこを見まわしても日本からの観光客でいっぱいだ。

真向かいのベンチで幼稚なじゃれあいをしているハネムーン・カップルを睨みつけ、長いジーンズの両脚をけだるく組みあわせてガディスは淹れたての薄いコーヒーをがぶ飲みする。まったく、この街で合格点を出せると思ったのはコーヒーの味くらいである。

「デートには振られたのか？」

「御面会は明日だとさ。あのババアふっかけやがって、新品のパスポート五人前、しめて三万

ドルだ」
「予算の範囲は超えてない。上出来だ」
「よく言うぜ」
わざとらしい予算の二文字にガディスは舌を出した。
どうせ銀行のオンラインシステムに侵入してつくりだす、データとしての大金だ。
「偽造屋をとっつかまえて用件をすませたら、とっとと他の島にオサラバしようぜ……カウアイでもモロカイでも、買い物中毒の猿どもがいないとこならどこだっていい」
「観光客に紛れていられるのは、俺たちにとってはありがたいことさ」
ガディスの隣に腰かけて、頭上の日よけの隙間から降ってくる光のかけらを眼鏡ごしに衛は受けとめる。太陽が直接にあたらぬところでは、風はつねに涼しく乾いていて、熱帯圏の暑さは感じない。
「そのせいで俺がいつまで、てめえの辛気臭い日本人ぶりっこに我慢してなきゃならねーのかって話をしてんのさ」
「なんだ……そんなことが不満だったのか」
「そんなことさ」
なおさら不機嫌にガディスはコーヒーを喉の奥へと流しこみ、ラージの紙コップをからにしてしまった。ぜんぜん足りない気分だ。

「夜中にリクエストしてくれさえすれば、いつでもおまえには派手なほうの俺も披露してやるのに」

「夜明けがきた途端に魔法がとけるのか？　ぞっとしねえな」

「これもまた俺だよ、ディ」

黒髪黒瞳の、いかにも温厚、あくまで無害をよそおった学生風のいでたちで、光使ライアはひっそりとそう囁く。

中身のなくなった紙コップのへりを前歯で噛んだきり、ガディスはしんと沈黙する。良いとも悪いとも、答えはしなかった。

どこかで、噴水の湧きだす音がする。

さらさら——流れにまかせ——ゆるやかに。

「利口な奴は……」

まるで関係のない別の話をするように、おさまりの悪い脚を組み直してから、朱赤の瞳を相手には向けずガディスはぼそりと切りだす。

「生きるのが、上手な奴は、どっかでコケて二度目のチャンスがまわってきたときにゃ、きちんとやりなおせる所まで戻ってから、始めるものさ。その理屈でいけば、こっちの世界でしっかり一から成長できるとこまで戻ったあのお転婆姫も、水使の小僧も、まあまあ利口に生きてるってことでいいんだろうさ。けど、てめえの場合はな」

「どうかな。俺には、例えば礼神官アスヴァルの姿を見るなら……あの時間の逆転のはげしさは執着のつよさに比例するようにも思えた。我が在る地点への、愛着のつよさというのだろうか……」

ライアもまた冷静に、私情をつきはなした語り口でそんなふうに答えている。

「大切なものを失くすことのかなしみから、そうしなければ自分を守れないという働きではないかと……。そういう意味あいでは、あきらも、貢も、心の芯は優しい……。ただ現実の生活に逞しいばかりではないんだよ」

「はん？」

喉元で笑い、だがガディスは言葉の表面とはうらはらに穏やかな、つつむような口調で彼に応じた。

「してみると何か？　俺もてめえも薄情さには折り紙つきってことか？」

「こちらがわに適応する程度には、打算や狡さや、諦めを、それなりに手にいれていたということさ」

純粋なきれいごとだけでは片付けられぬ境地に……

エクサール・ディシスの守護者たちが身を置いていたのは事実だ。

俗物めいたしがらみと、政治的な禁忌と、滅びの予感と、見えざる救い……

神殿や精老の教えに敬虔な、従順なライエノーツであるだけでは割りきりえない、ごまかし

きれない裏切りのなかに。

「そう……。端的に言ってしまえば、自分を、どれだけ好きでいられたかの差という理屈だ。心当たりはあるんじゃないかガディス？」

「てめえそこで俺のカオ見て笑うのはやめろ」

「被害妄想だな。こんなに俺が、全面的にお兄様には心をゆるしているのに……」

「悪党が」

空の紙コップを指ではじいて衛の目前に投げやり、ガディスは腹の底からそう吐き捨てる。くすくすと悪党らしく笑いながら衛はベンチを立ちあがり、うけとった紙コップをトラッシュボックスに呑みこませた。

「ディ、おたのしみのデートが日延べになって、本日の過ごし方はどうする？」

「さあな。ビーチで昼寝でもするさ」

「どうせならもう少しアクティヴに、電脳世界でのサーフィンにつきあってみる気はないのか？」

「ビキニの美女は待ちかまえちゃいねーんだろ？」

面倒くさげにガディスは錆色の赤毛をかきまわし、それでもよっこらしょとベンチから起き上がる。

「想像の力を広げさえすれば、絶世の美女なんていくらでも見つかる場所だ」

「根の暗い努力だな、そいつは。――姫君のほうは放っとけるのか？」
「貢と一緒に、プールだ。最適な人選だろう」
「ふん……そいつはそうか」
プールサイドでエクサール・レアを立派に守護しきれなかったら、水使ユーマはとっとと看板をおろして廃業したほうがいい。ポケットからさぐりだしたパッケージの底をたたいて煙草をくわえ、のっそりとガディスは衛よりも先に歩きだした――が。
一歩、ブーツを前へ進めた瞬間に、周囲を支えるすべての景色がはじけとぶ錯覚に襲われる。足が止まった。
白く、真っ白く、空虚な――
質量の消えた街。
どこにいたのかわからなくなる。
それは眩暈と同質の感覚だ。ごく一刹那のフラッシュバックだ。
癒えない病――だ。
唇からもぎとった煙草を指で摑み、その触れた実感が戻るのを、わずかな苛立たしさとともにガディスは待つ。

「ガディス」
光使ライアの呼びかけには用心深さが伴っている。
必要以上の侵害をせず。
だが侵害こそが時として助けになることをも、承知している。
「どうってことねえ。たまに、正気に返っちまうだけさ」
喫わなかった煙草を結局、拳のなかに握りつぶしてガディスはそう呟いた。
あざやかに燃えさかる太陽も、あふれる輝きも、色づく空気も、きらめく海面も、なにもかもが寛容に異邦人を迎えいれるこの島で。
楽園にすらなじめないと駄々をこねるのは、贅沢な精神というものだ。
「ガディス。目が醒めたとたんにおまえひとりが残っていて世界ぜんぶがなくなっているわけじゃない」
「わかってる。てめえの憎らしい顔くらいは見えてるだろうさ、いつでも」
「見えるんじゃない。ここにいるんだ」
透明な眼鏡を指先でひきぬき、何物にもさえぎられない生身のまなざしをそこに晒してライアが答えた。
「幻なんかじゃない。いるんだ。俺も。——クリストファー・ローディン・ジュニアも」

「しかしよりによってワイハまで来て客商売を選ぶかね、おまえが」
一流ホテルのプールサイドにしつらえられたバーカウンターにひじをつき、来生貢は呆れた呟きをこぼしている。
「慣れている仕事だ……。一応」
カウンターの内側から、よく冷えたカフェ・ラテのプラスティックカップと三段重ねの特大シャーベットをさしだしながら、来生閃は無表情に応じる。可愛らしい女物の——あきらとの共同所有物だ——ヨットパーカーを水着の上に羽織っていかにもミーハーな観光客を装った貢と、すっかり現地労働者に溶けこんだ風情のキスギ・センがひとつ屋根の下に暮らす『兄弟』であるとは、傍目にはなかなか想像しがたいだろう。
「働いていたほうが、俺は楽に過ごしていられる。それだけのことだ」
「まあ、どこでバランス取ろうが本人の自由だけどさ！　しかしぼくとしてはおまえのアロハ姿はあんまり見たくなかったね」
「パレオなら許せるのか？」
「……。おまえも言うようになったよ」
すばらしい成長だ、と大袈裟に首を振りながらカップを両手にひっつかんで、濡れたタイルの白く反射するプールサイドを貢は軽い足取りで大きく横切った。
先客のいない日傘つきのテーブルにどかんと二つのカップを据えると、一千メートル連続水

泳に挑戦している姫君のことはさておいて、さっさとシャーベットの山のなかにスプーンを突き立てる。

「みっちゃんちょっとそれずるすぎ」

がばりと貢のすぐ足元の水面から水泳帽の頭をつきだして、恨めしくあきらがプールの外に這いあがってきた。

「うるさいな、ぼくはあきらが三万メートル泳げるようになるまでは干渉せずにおこうと……」

「何往復したかわかんなくなるから数えといてくれるってゆった!!　みっちゃんが確かに言ったっ!!」

「まだ百二十五メートルの手前ですってば、それくらい見てなくたってわかるよ」

椅子の背にかけてあったスポーツタオルを手早くあきらに放りやり、貢は悠然と答える。ぶーっとあきらは頬をふくらませるが、それからふと神妙に眉をしかめた。

「みっちゃん、もしかしなくても水の中のこと全部わかってる？」

「ぼくを誰だと思ってんの、七十五メートルめであきらがこっそりズルして左足ついたのも知ってるよ」

「うっぎゃー、サイテイ!!　女の敵だっ!!」

「何それ、女の敵って？　いくらぼくだって誰かの赤い水着の背中の紐がはずれたとか、そん

なとこまでは見てやしないよ」
「うあああああっ、やっぱ見てんじゃないかああっ!!　よーし、せんちゃんに言いつけて一緒にみっちゃん見損なおう。そーしよう」
「だめだめ、あきらが行っちゃったらひらめの場合、仕事になりゃしないよ」
自分がさっきまでカウンターに貼りついて業務妨害にいそしんでいたことは、あっさり棚にあげられている。だがあきらが次の文句を口にする前に、はいどうぞとパパイヤ味のシャーベットがスプーンで差し出されてしまって、仕方なくあきらは素直にそれにくらいついた。
「せんちゃん楽しそうだよね。ここで働いてると」
プールをはさんで遠いバーカウンターのほうを眺めて、あきらが言う。
あの無口無愛想な働きぶりを楽しそうと正しく表現できる人間は、この世の中でそう多くはない。うんうんと貢は深くうなずいた。
「こっちから見て笑えるあたりを差し引けば、たいへん結構だよ。あいつ、根本的に気晴らしが下手だからね」
「うちの人達みんなそうだよ」
「いいや、ぼくは別!!　あきらとプールサイドで一緒に三段シャーベットを食べる！　これだけで極楽！　みんなぼくを見習ってりゃいいんだよ、本当はさ」
「でもみんながみっちゃん見習ってここで一緒にアイス食べてたら、プールサイド中の見世物

だよね。立ち見の行列ができちゃうよね」
「そしたらぼくたち何しにハワイまで来たのかわかんないな、確かに」
同意して貢は、いまひとつ冴えない顔つきで冷たいカフェ・ラテをすすった。
「父っちゃん連れてきてあげたかったなあ」
あきらが、ぽつりとひとりごちる。
「こっちでもせんちゃんが店番してるとこ、見たら、すっごく安心してくれるよね……」
「閃なら手紙くらいは送るさ、親父様には懐いてるし」
「けど、こっちの居場所……」
自分たちの滞在地が消印などから割りだされてはならないために、うかつに郵便は使えない。なのにどうやってとあきらは訊きかけて、風使イオならばそれでも大気の流れにその意志を託し、喫茶店『海』の庭先の梢をゆるがすことくらいはできるのだと気づいた。
「……じゃあ、この先、せんちゃんの髪がもっと伸びましたとか、そんな話、父っちゃんにも届けられるよね」
「当然。ぼくら四人とあきらが一緒にいて、できないことなんて何もないよ」
ひどく強気な科白を、貢は簡単に告げている。
「何だって、できないはずないんだ」
「うん」

本当に？　とは、あきらは問わない。
大切なのは、そう信じて、そうして彼ら四人と界使エクサール・レアが今も共にあることだ。
やがて。
いつか必ず――
礼神官アスヴァルの手中から、いまだ奪われたきりのもう一振りの短刀を――エクサール・レアの司杖をとりもどし、彼の野望を永遠に閉ざしおかなければならない。
叶うあてのない……純粋すぎるまでにアスヴァルが抱きつづける、帰還への希み。
既に滅び去った美しの故郷〈琅月界〉を再生するために、いま自分たちのいるこの〈炯月界〉を犠牲にする――
鋭利な知謀と、病んだ執着。犯した過ちを覆そうとする正義心ととるにはあまりにも、狂気に蝕まれているとしか言いようのない、凄絶な計画を胸に抱く者。
そのアスヴァルのこころざしと、この〈炯月界〉がわの支配者クリストファー・ローディン・ジュニアの立場とは、本来、接点をもちえないはずだった。世界の滅亡を導くアスヴァルに、同じ世界の征服を目的とするクリストファーが、心から肩入れなどできるわけはないのだ。
だが、現実にはクリストファーは礼神官アスヴァルを掌中へ迎えいれ、ひきかえに炎使ガディスという駒を手放すことになった。クリストファーのいかなる意思選択がそこに働いていた

ものかは、現在、想像の領域にしかない。すべてのなりゆきが少年の遊戯（ゲーム）にはせいぜい退屈防止のための刺激を与えただけだろうと、ソニー・ウォークマン・エクセル本人はひややかな見解を示したが。

ガディスが語るようなクールな理屈だけで、あの端正なプラチナブロンドの、傷つきやすく鋭敏そうな少年の心が説明されるとは、かぎらない。

「こんなに景色、綺麗（きれい）で、天気よくて、シャーベットおいしいし、だけど」

聴こえぬものに耳をすまして、ゆっくりとあきらは心の眼をひらく。

きらきらと脈うつ因果力（エール）は、ゆたかに満ちているのに。

アトモスフィア。

大地をくるむ生命の衣。

なぜ寂しさを含んでいるのだろう？

何に、こころぼそくなっているのだろう？

「おかしいよね。不安なきもちが世界に、たくさん、余ってる」

「……この世界に？」

前触れのなかったあきらの言葉に、貢が表情を硬くして、問いかえした。

「そう。アスヴァルのせいかもしれない。あきらたちのせいかもしれない。クリストファーの起こしていることかもしれない。わからない。でも不安が増えてる」

それは翳りとして拡がっている。
ゆるやかに。
かつて滅んでしまった故郷が、あの世界がそうであったように。
確かな、生命感に溢れたこの世界で。
なぜ？

不意に、勢いよく水泳帽をかなぐり外して、あきらはビーチチェアから立ちあがった。
「行かなくちゃ」
「え!?」
まだ半分以上のこっているシャーベットを置き去りに、貢も慌ててその動きに従う。バーカウンターの奥で閃もまたこちらの変動に気づいたはずだったが、いいから任せておけとそっちには片手を振りつつ貢は早足に歩きだしているあきらの後を追いかけた。
「あきら！　どこに行かなくちゃだって？」
「飛行場」
風を切り、ティンカー・ベルの絵柄入りのスポーツタオルを両肩にまわしながらあきらが短く答える。貢はあっけにとられて、そして前言撤回とばかりに閃を睨みやり、声に出さずに唇を動かした。

「お茶汲みしてる場合じゃなさそうだぞ、やっぱり」

3

それらの記録文書の名称には、一様に、二つのアルファベットが含まれている。

ＸＲ。

「Ｘファイルか」

パーソナルコンピュータの画面に羅列されるそのタイトル群を眺め、たいした洒落にもならないといった風情でガディスがひとりごちた。

地球上いたるところへ、全世界規模で、自在に枝をのばす巨大コンピュータ・ネットワークの……裏側。

頑強に閉ざされ、決して一般ユーザーの侵入をゆるさぬ第二のネットワークが、そこには存在する。

今、画面のなかにずらりと居並ぶファイル名は、その〈カンナギの属〉独自の極秘通信ネットにおいて『貯蔵庫』におさめられているデータの一覧である。アクセスに使用したＩＤナンバーとキーワードは、光使ライアが使鍵ルナクを通信ケーブル内でひと働きさせた結果、まん

まと盗んできたものである。もっとも、どれほど巧妙に攻めてかかっても万全である保証はないのがカンナギという組織だ。相手は『異能者』の集合体なのだから。

「XRすなわちエクサール関連のデータだけで、たいした分量のファイルになっている。彼らの覗きの技術はすさまじいな。もう、あきらは立派な有名人だ」

目前のキーボードに人差し指を落とし、画面を下にスクロールさせながら衛が答えた。

マシンは彼所有のものではない。ハワイ大学のキャンパスに堂々ともぐりこみ、その設備を無断使用しているのである。

「CLJ、クリストファー・ローディン・ジュニアに関するファイルは、さらに上級の機密扱いだ。もちろん、こいつも貰っておく」

データの塊を遠慮なく手持ちのフロッピーディスクに呑みこませ、情報収集済の貴重なディスクを入れた磁気遮断ケースは、背後にいる炎使ガディスへと無造作に放りやる。大事なものはガディスに持たせておくのが、いつしか彼らのなかでは決まりごとになっている。さんざん愚痴をこぼしつつも司杖を護りぬいてきた実績というものがある。

だがどのみち、いくらカンナギのデータを漁ったとしてもクリストファー・ローディン・ジュニアの居所は容易に割りだせはしないだろう。

地球上のどこもかしこも、あの少年には庭先にすぎない。

「敵の敵は味方という理屈で、素直にカンナギがこちらの支援にまわってくれないかと考える

のは、虫がよすぎる話かな。ディ」

「もとから身内を大事にしねえ奴らだ、味方なんて発想があるとは思えないぜ。後ろからバッサリ斬られる覚悟があればその手もありだがな」

不愉快げな調子でガディスが答えた。

無人の教室のパソコンデスクに行儀悪く座りこみ、衛のかける椅子の背にブーツの踵を打ちあてながら。

「だいたい、カンナギの人間なんざ俺が何人も殺してる。むこうにご立派な身内の情があればなおさら悪い」

「ふりかかる火の粉を消しただけだ。おまえを殺されかけたなら、こちらの立場も同じだ。交渉の上で、一方的な不利ではない」

ごく冷静にそう見解をのべて、衛は手元にはずしていた眼鏡をかけなおす。

「とはいっても、地球平和なんて理念を中心にした組織だからこそ、全体の正体がはっきりしなくなるものだな。断固とした統率者が見当たらないんだ」

「民主制か、衆愚制だかは、当人どもに訊かなけりゃわからねえか……」

へたをすれば〈カンナギの属〉にこそ、指導者としてのクリストファー・ローディン・ジュニアが必要とされるのではないか。ガディスはそんな楽しくない想像に襲われて、鼻白む。唇に煙草をつっこんだが着火はしなかった。コンピュータの近くで煙をたてると目の前のハッカ

ーがやかましい。

「カンナギとしては、自分たちが正面きってクリストファーに対するより、われわれ厄介なエイリアンどもが潰しあうのを後ろで眺めるポジションを選ぶかもしれないな」

「ライア。ある程度までは俺やてめえの頭で考えりゃいい。だが最後には、結局はエクサールの姫君の技量さ」

ライエノーツの存在が『地球平和の理念』に反するものではないと、彼らに納得させればいいのだ。

クリストファーとは違ったやりかたで。

「あきらを矢面に立たせるのは……」

やや異議を示す顔つきで、衛が呟いたときだった。

ネットへの侵入をきりあげ、アクセスを終わらせる寸前のところで、画面上のカーソルが急激につよく輝いたのは。

——CAUTION.

『警告』

どこかから光使ライアの用いるＩＤナンバーを捕捉し、画面のなかへすべりこんできた文面

がある。

——HALEAKALA 14: 00.

「ルナク、誰だ?」

鋭い問いかけを、光使ライアは使鍵(しけん)へと発している。不可視のディレイ・ルナクが一瞬に光のなかをかけめぐり、情報の摂取をおこなった。回答は、未知の対象であるとしか出てこない。

「バレたか?」

ガディスも即座に両足で立ち上がり、尋ねる。

「いや、カンナギの対侵入者(アンチハッキング)のシステムとは無関係だ。違うものだ」

応じながら衛はリターンキーを操作するが、カーソルの自由は回復しなかった。どう対処するべきか……。わずかに選択の時間を費やし、やがて彼はパソコン本体の電源スイッチへ指をのばした。

——AKIRA'

——end of access.

慌(あわ)てたような勢いで二行の文章が舞いこみ、それを確認した直後に衛は電源を切っていた。
画面が一気に鈍い黒へと変わる。
『ハレアカラ　14：00』
『アキラ』
『アクセス終了』
断片のみの……
警告？
「アキラの後に、まだ何か続けようとしてたんじゃねえのか」
ガディスが言う。
「アポストロフィだけがついてた」
「その意味はわからないな。エンド・オヴ・アクセス――向こうもそれ以上伝えずに終わらせたんだ。あきらはどこにいる？」
ざわりとした空気を身にまとわせ、光使ライアは司杖(ガース)の管理者であるガディスに声を投げた。
「……ちっ。今度は、司杖(ガース)が反応してやがる」
タイミングの合致に舌打ちをしてから、ガディスはいまいましげにライアを見返り、つかん

だ事実を告げる。
「空港だ。たしかに奴ら、ハレアカラの山に向かうつもりだ」

4

オアフ島ホノルル空港から、航空機で約三十分、南東にくだったところにハワイ諸島で第二の面積をもつマウイ島がある。
ワイキキにならった豪勢なリゾート施設と、世界最大の休火山ハレアカラを中心とした壮麗な大自然とが、ともに観光客への売り物になっている。ぞろぞろと飛行機からあふれでるアロハシャツ姿の日本人観光客にまぎれてジーンズの上下で身を包んだ十五歳の少女がタラップを飛びおりても、その彼女の目的をあえて詮索する者などはいない。
「二時」
腕時計の針を確認して、あきらは少し眉をくもらせる。
「まにあわないかもしれない」
「それでどこに行きたいんだって、お姫様?」
追いついた貢が、ようやくその問いを口にした。ここまで来る道のりでは、一直線に先行す

る彼女のタクシー支払いやらチケット購入やら身元証明やらを――IDカードは当座をしのげるだけの偽物だが――慌ただしく片付けるのに手一杯で、肝心の本題を訊きだす余地も与えてもらえなかったのだ。こういうとき、閃は閃で、一緒にいても何の役にもたたない。

「山の上。すぐにいけるかな?」

「ハレアカラの山頂? ドライブウェイかっとばして二時間くらいはかかるよ」

ガイドブックのページをめくって貢が答える。この三人のなかでガイドブックを持ち歩くという知恵を発揮するのも、やはり貢だけである。

「なんだか急がなきゃならない気がする」

握った右手の指先を唇にあてて、あきらが呟いた。

「急がないと始まる気がする」

「なにが?」

「わかんない」

貢の質問に、あきらは身も蓋もない答え方をする。要領を得ないとはこのことだ。

「ザード」

空港の旅客出口の外、余計な人間どもの気配がない場所で閃は左腕を風のなかへと掲げ、小さく指を鳴らす。

「東の山頂だ」

風をつかさどる使鍵、ディレイ・ザードがひゅるりと周囲の気体を渦巻かせ、すばやく遠方の察知へと去った。

「どうしても行きたいってんならレンタカー借りてもいいけどさ」

結局はあきらに甘い貢があっさりと折れた、その背後から——

「……雲行きが不穏だ」

遥か上空の風を読んだ使鍵のささやきを捉え、閃がふと告げた。

「雷雲があつまっている」

その日、全米有線ニュースネットワークTV局の中堅アンカー、メリッサ・ギンズバーグの持ち枠には、ひとりのゲストが招かれていた。

「いま、世界じゅうでベストセラーを記録している、この美しい物語……」

洒落た装丁のハードカバーをテレビカメラに向かわせて、きっちりと顔を塗りかためた美人アンカーは真っ赤な唇を笑顔のかたちに硬直させる。

「だれにでも読めるわかりやすい文章と、エンタテインメントに富んだ展開で、しかし実際には、あまりにも深く清らかな精神世界の探究がテーマ。人々はみな、ロマンティックな物語を通して見失っていた自分をとりもどし、感動の涙にひたりました。思想界の権威からも絶賛の声があがっているほど。本日は『復活の魂』の若き著者、アイリス・ウォーロック氏にインタ

ヴューいたします。あらまあ、御本人もなんとお美しいこと。作品のイメージどおりですわ」
「確かに、この作品には私自身が投影されています。だが、それだけでもありません」
謙遜するでもなく、奢りたかぶるでもなく、ただ事実を述べる調子で、スタジオのアームチェアにかけた青年はさらりと頷いた。
「私のつかんだ真実は些細なものです。現代の人々は、真実をかいまみる間もないほど不安に怯え、苦しんでいます。経済不況、環境破壊、民族問題、人口爆発、難病、核汚染、異常犯罪、ありとあらゆる常軌を逸した事件の数々――ひとの心は閉塞し、地球は危機にさらされています」
「あなたはそれを救えるとおっしゃるのですね、ミスタ・ウォーロック?」
「アイリスと呼んでくださって結構です、メリッサ。そして私は医者ではありませんから、たちどころにすべてを治療できるわけではありません」
勢いこんだ女性アンカーに、弱冠二十三歳にして世界的作家となったアイリス・ウォーロックは、ひかえめな言葉を返した。
「天は自ら助くるものを助く……。人は自分を癒す偉大な力をだれしもが持っているのです」
「けれどそれを促すのはあなたの言葉ですわ」
女性アンカーはなおも食いさがる。報道を第一義におく者としては、客観性を欠き、作家本人への畏敬の気分がまさってしまっているようだった。

しかしどれほどプロフェッショナルに徹したインタヴュアーであっても、青年の前でクールさを失ってしまうのは無理のないことと思われた。

そこしれぬ叡智を宿した、淡い、翠玉の瞳。

いかなる財宝の輝きもかなわぬであろう、澄んだプラチナブロンドの髪——

「みなさんの心に響いたとすれば、すでに私の言葉でなく、われわれの共有するものです。なぜ響きあうのでしょうか？　それはわれら母なる地球をルーツとするものすべての思いであるからとは、いえないでしょうか？　われわれは普段、表層意識の下には興味をむけようとしません。私の本を読むという行動を通して、じつはみなさんは、みなさんの深層をのぞいただけなのです」

生ける宝石とは、まさにこの青年のことだった。

「すばらしいお考えですわ」

メリッサ・ギンズバーグは感極まって両手を叩き、視聴者たちもそのおこないを奇妙に思いはしなかった。

「出版界の噂によると、もうあなたは次の作品も完成していらして、上梓を待つのみとの話ですが？」

「ええ。次作はすでに用意されています」

「まあ！　いったい、いつ出版されるのでしょう？」

「たいへんデリケートな問題です」
アイリス・ウォーロックは美しい双眸をかすかに暗くひそめ、意味ありげに呟いた。
「その作品では、私はある『危機』について語っています。これは非常に衝撃的な内容であるため、発表するには時期を待たねばならないでしょう」
「危機ですって？」
「ええ。しかし私たちは、かならずその危機をのりこえることができます。そのために、私は『復活の魂』を書いたのです」
一転して力強い断定に、女性アンカーは不安な面持ちをやわらげる。アイリス・ウォーロックの話術にとりこまれ、いつしか一喜一憂までもをあやつられているのだった。
「では少しだけでも、新しい作品についてヒントを与えていただけません？　せめて『復活の魂』の続編であるとか、そうでないとか」
「続編ではありません」
思慮深く、言葉を選び、エメラルドの瞳をもつ青年はゆっくりと回答を授けた。
「そう……数ヶ月前に日本でおきたあの事件……未だ解明されぬ奇妙な混乱について……みなさんの記憶が新たであるならば、私のとりあげる題材はおわかりのことでしょう」
「と、おっしゃいますと……」
メリッサがコメントをさしはさもうとした、そのとき。

それはスタジオのある北アメリカ東海岸ジョージア州より遥か西の島において、勃発した。

むなさわぎ。

いやな夢がひっそりと近づくような。

『半身――』

とらわれ、奪われたきりの。

司杖（ガース）。

どこに隠した？

礼神官アスヴァル、どこへ……。

『――メサイエ・エクサール・レア』

嘆きの。

声。

ヒトリボッチハ、イヤダ、サビシイノハ、イヤダ、ヒトリハ、イヤダ……

「だめだっ！」

かっと両眼をみひらいてあきらは叫ぶ。

「泣いちゃだめだ、ガース!!」

標高三〇五五メートルのハレアカラ。
マウイ島の東を占める、雄大な溶岩の山。
その頂の近く、噴火口の痕はざっくりと抉られた黒いクレーターと化している。
高山ならではの凍てつく寒さが覆う。雪の白さも、いまだ各所に残る。
他には、ごつごつとダイナミックにうねり、ふくらむ、乾いた大地のかたちと、山の周囲を埋める雲の海しか視界には入らない。月面の光景そのものと呼ばれるクレーターの中央に彼は着陸する。
十二歳で滞ったままの、いたいけな少年の姿で——
漆黒の髪と、闇紫の瞳。
葉月奏太と自らを名乗るもの。
雷雲は彼をとりまいて渦を生んでいる。
「ここにも君はいない」
ざらりと崩れる砂を靴の底に踏みしめて、詩人のごとく彼はつぶやいた。
「哀しみは司杖のものだ……私にとて癒せはしない」
少年の手中に、黄金色の短刀はない。
司杖は握られていない。それは隠匿されている。決して失われないところへ。エクサール・レアの力によっても、とりもどせはしない場所へ。

「魔王の杖」

冷たい大地に右の掌を触れさせ、彼はそれを詠唱する。

巫女にしかゆるされぬ禁断の、呼びかけを。

「ディア・レ・ノス・ク・エストワイア……とざされし闇の杖。今、汝の声、ききとどくもの汝を待つ」

不意に。

びりびりと微細な震動が、その大地を襲ったようだった。

いや、クレーターを中心とした、空間すべてが今は震えていた。帯電の火花が、暗雲の粒子のなかをよこぎり、風と地表とをともにざわつかせていた。

そして、ひややかに見守る葉月奏太の目前で……

溶岩の大地には小刻みな亀裂が走った。

不気味な唸りをたてながら、尖った銀の葉が、大木にも似た異様な姿をもって亀裂の内から現出する。一瞬にしてめりめりと細胞を増殖させ、東西の幅十一キロ、南北の幅四キロにおよぶクレーターをうめつくす莫大なサイズにまで成長した。

昼まではきれいに晴れていた山頂の展望台が、突如として灰白色の雲につつまれ折角の絶景がうすく煙ってしまっても、ツアー・バスの観光客たちは、山の天気は変わりやすいという日

系人ガイドの言葉をそのまま信じただけだった。
「湿気と寒さで凍っちまうよ」
熱いスープが飲みたいなと言いあいながら下山のバスにのりこんだ大学生グループは、しかし間近にあらあらしい雷鳴の音を聴いて一様にぎくりと背中をすくめた。
「おい大丈夫なのかよ?」
「びっくりしたあ」
「やっぱり山だからね」
何がやっぱりなのだか根拠はないのだが、そう納得して頷きあい、それなりに特別な体験を楽しもうとする気分で彼らは白く曇った窓の外をのぞき見る。稲光は見当たらず、車窓のとおくには、ただ霧にまぎれてぼんやりと大きな岩影がうきあがっていた。
「あれ何?」
視力のいい女子大生が口走った。何よ? とサークル仲間のひとりが気のない反応を返した。
「あれ」
彼女が窓の先をゆびさした途端に雲の壁がわずかに晴れたのは、神の悪戯というべきか。
うおおおっとツアー・バスの運転手が悲鳴をあげ、噛みかけのチューインガムを空中にはきだした。がくんとハンドブレーキが外れ、エンジンもかけぬうちにバスは傾斜する車道をす

べりだした。

「うう嘘だろおッ!!」

バスが動いたことにも乗客は意識を向けていられなかった。

雲にうつったシルエットは、岩の塊ではなかった。巨大なたてがみをふりみだす、三つの頭がクレーターの上にょきりと聳えていた。

「悪魔よ!! 悪魔だわ!!」

信仰ぶかい中年の白人女性が金切り声をあげたが、それよりもぽかんと口をあけた日本人大学生の独白のほうが、そのばけものの実態には近かったかもしれない。

「キングギドラじゃねえか」

5

「もう始まっている」

山頂より、いまだ遠く離れたカフルイ空港の前で。

低く、的確にその事実をあきらに知らせたのは閃だった。風のつたえる気配の激変は、ただならぬ恐慌が山頂に生じていることを示す。

「たしかに、まともな交通手段ではまにあわない」
「何がだって？」
問い返しつつも、貢は背後にいるツアー・ガイドの握る無線機のほうに聴覚をとがらせている。旅行会社が企画したハレアカラ経由のパックツアー客を出迎えるためのガイドだ。
「あんですって？　ツアー中止ですって？　客を空港で追い返せってんですか？」
いいからニュースを見やがれと怒鳴りつける声が無線の向こうからはとびだした。なんだいそりゃとぼやくガイドの反対側で、今度は空港の職員が血相を変えて到着ゲート前へと駆けだし「みなさんお待ちください！」と制止の叫びをあげた。
「急がなくちゃ」
もう一度つぶやいてから、はたと気づいてあきらは額に掌をあてた。
「あっしまった、残りのふたり連れてくるの忘れた!!」
「あのねえっ!!　ちょっとちょっとお姫様!!」
今になってそれはないだろうと両肩から脱力しながら貢は声をはりあげる。ぽんと掌の感触がひとつ、あきらの頭を後ろから小突くようにしたのが、その次の瞬間だった。
「忘れ物到着だ、あきら」
「痛っ。えーちゃんまじでぶったね今っ」
「それは失敬。本心が滲みでないようにと努めたんだけれど」

恨めしく後頭部をおさえるあきらに、畏まるようすもなく来生衛はそんな応答をつきかえしてくる。

「くそーっ、ぶったら豚の仲間なんだっ！」

「たとえこの身が世界で最も優美で賢い豚の姿となっても、俺のあきらへの愛は変わらないから安心していてくれ」

「んな安心いらない……」

あきらはげっそりと首を横に振るが、呑気なやりとりはそこまでだった。衛よりもタイミングを一歩半ほど遅らせて——遅れたと認めるのは本人には異様に不本意なことだが、なにしろ相棒がぬけがけの第一人者であっては仕方がない——ガディスが彼らのもとへ辿りつき、大事な預り物をエクサールの乙女へと放りやったからだ。

「巨大な怪物が出たって話だ。いっぱしのスペクタクルになってるぜ」

「アスヴァルの司杖のしわざだ、みんなですぐに行って止める、いいよね？」

あきらが逆手に受けとったのは、鞘におさめられた聖光石の短刀。

ざっと四人の守護者を一瞥した眼差しが、すでに厳然たる命を下している。

異を唱えるものはない。

人目のむかわぬ場所を捜し、建物の蔭であきらは掌中の司杖を勢いよく鞘からひきぬく。溢れでる波動をとらえる、その意識を眩ませるほどの黄金の輝き。

「ディレイ・ミンス！」

空気をふりはらうしぐさで貢が右手首に銀の腕輪をやどらせる。ざわりとゆらいで本来の色をとりもどす――青の髪と、碧の瞳。

つねに先陣を切りエクサールの司杖へと呼びかける。それが、水使ユーマの役割である。

「水使ユーマの名において、司杖に従え！　天壌の聖母ミンス、どんなにあきらに無茶苦茶いわれても堪え忍んでぼくと一緒に働くこと！　以上！」

なんだとおーっと呟いてあきらが睨んだが、散々ふりまわされているのは事実なのでユーマは気にしない。そしてさらに両者のどちらにも頓着することなく、風使イオの声がそこへ続いた。

「ディレイ・ザード」

感情の表出を抑えた、ひそやかな呼びかけに、左中指の指輪が銀の光をもって応じる。

「風使イオの名において、司杖に従え。寡黙なる賢者、全知にして無私の剣聖ザード、ねがわくば我を導かんことを――エクサールの心のままに」

「ディレイ・ローザ！」

前の順番の連中がエクサール・レアと名を呼ばないのは、それなりの配慮であろうと炎使がディスは感じるが、だからといってありがたく思うのも奇妙なことだ。ゆえに自分は好き勝手なスタンスを通すのがガディスの方針である。

「炎使ガディスと永遠の乙女の名において、司杖に従え。放浪の幻、麗しき軍神ローザ、例によって俺とおまえにゃ御苦労様なお仕事だ、せいぜい元を取ってきやがれ。以上」
「ディレイ・ルナク。まずは炎使ガディスに功を奪われぬよう心掛けていてもらおうか。こんな乱暴者でも、あきらとの間にうっかり愛がめばえたら大変だ」
「てめえなあああっ何がいつ芽生えるかっ!!」
「あーもー、この責任者サイテイだよね、私情のカタマリ!!」
「詠唱の妨げは厳禁なんだよ、二人とも」
ガディスとあきらのブーイングを、鼻持ちならぬ理屈で封じて、ライエノーツ首席の光使はその場に必要な言辞をつづける。
「光使ライアの名と忠誠とにおいて、司杖に従え。乙女を護り、われらの使命をあらわさんことを……」
透ける、琥珀の双眸と——
太陽の輝きをはなつ、金の髪とが。
解放される。
守護する者の、正しい本質。
「ガース!」
最後に、うつくしい月華の祈り託されし司杖へ呼びかけるのは、ただひとりの、エクサール

の乙女。

「あきらが命じる！　あそこまで……山の頂上までジャンプする！」

吹きすさぶ冷気が、どっとあきらの長い髪を激しく泳がせた。凄じい寒さだった。

爽やかな地上の景色は消えうせ、凍てつく霧と暴風のなかに彼らは『転移』していた。震動する溶岩大地の表面にではなく、中空の一点へ。

浮揚する力は、司杖をふるう乙女のうみだすものだ。

風が痛い。とげとげしく皮膚を刺す波動は、怒り。

属するべき女神の懐を追われ、愛される世界を失った、やむことのない悲嘆の念。

くるおしさに満ちた闇が、ここにはある。

「礼神官アスヴァル……!!」

あきらの瞳は下方の大地に佇む、その少年の姿を一瞬にして捉える。

彼らライエノーツの到来を待ちうけていたかのごとく静かな、翳りを漂わせる面持ちで、礼神官アスヴァルはあきらのことを仰ぎ見た。

「アスヴァル!!　なぜこの世界に混乱をもちこむっ!?」

あきらが叫ぶ。猛々しい雷光がその背後でひらめいた。

「それこそが我が望み」

闇紫の眼差しをエクサールの乙女へとむかわせて、アスヴァルは醒めた呟きを洩らす。
「さまよえる〈炯月の界〉に混迷をもたらす、それだけが我が力だ。――今は」
「なんのためにっ……!!」
ごおおう、と苦しげな地鳴りが響いた。
霧のなかの巨大な影をあきらはふりかえる。
「ディレイ・ミンス！　結晶の収斂、我が左手へつどえ生命の泉！」
すばやく水使ユーマが使鍵へ命を放ち、大気中の水分を、かかげた左の掌めざして凝縮させる。白く視界をとざした霧が瞬時に薄められ、ユーマの掌中には透明にして自在な水流の鞭がかたちづくられる。
そして、ひらかれた幕の向こうには……
愕然とあきらが両眼を見開いた。
「ひどいっ……!!　ひどいことをするっ!!」
広大な月面のクレーターに産みおとされた、宇宙の魔物のように。
お伽話に描かれる、狂暴な、悪い竜のように。
高層ビルよりも遥かに長くのびた三つの首を交互にゆるがし、その怪物は戸惑いのいななきを発していた。ざわざわと蠢くたてがみよりも下に胴体や脚はみあたらず、かわりに、やはり異常なラージサイズにまで増殖した、するどく尖る植物の細い葉が四方八方にあてどなくひろ

がっていた。
狂った司杖の誘発する、変質の力。
それがこの溶岩の地に生える植物の姿を異様なものへとねじまげ、さらに――
「そうだあきら、ここならクレーター見学の乗馬ツアーがある」
眉をしかめ、観光ガイドブック担当のユーマが告げる。
「その馬をとりこんだんだ」
「礼神官アスヴァル!!　無意味な残酷だっ!!」
はげしい糾弾があきらの内からは湧きおこり、張本人のアスヴァルへ叩きつけられる。
「それでいい」
動じずにアスヴァルは、頷く。
「意味などは、ない。だが君には見過ごせまい」
「混乱そのものが目的と?」
あきらの背後より光使ライアが一言、そう問いかけた。
「人心に訴える戦術か。きさまらしくはない悠長さだが、アスヴァル?」
「そういう契約だ。……手段の正否など私には関わりがない」
旧知の相手への皮肉な親しみをのぞかせつつ、アスヴァルは冷然と応じた。その言葉が終わりきらぬうちに既に、少年のままの彼の姿はするりと異空間のなかへ滑りこみ存在を消しさっ

ていた。

「ちっ……」

いらだたしく炎使ガディスが舌打ちする。

仇敵アスヴァルがその身の周囲にきっちりとはりめぐらせた防御結界に、ほころびひとつ作る間もなく逃げられてしまったのだ。一矢も放たずじまいでは不愉快にもなる。

「実際、無意味な話だ。ばけものを見せつけるのが目的だったわけだ！　どうする？」

「見せつけるって何!?　誰に!?」

くってかかる態度であきらが反問した。俺のせいじゃねえだろとガディスは渋い顔を作る。

「視聴者の皆さんにじゃないかな、あきら」

アスヴァルをのがした内心は相棒のものと同様だったはずだが、それをガディスほど正直にこぼさず、ライアが答えた。え？　と、すぐには合点がゆかずにあきらが目をまるくした。

「三本首のばけものだ！　ほんとに怪物だったんだ、嘘じゃない、ハンディビデオにも録ったんだ！」

命からがら——と本人たちは主張した——山頂展望台から逃げのびた観光客のコメントは、いちはやくハレアカラ・ハイウェイにかけつけた地方ケーブルテレビ局のスクープするものとなった。それはほどなく中央へも波及し、あらゆるリアルタイム・ニュース番組の宿命として

メリッサ・ギンズバーグは天才作家のインタヴューを早めに切りあげなければならなかった。

オフィスでのビデオ録画ではなく、わざわざ生出演でアイリス・ウォーロックがインタヴューに応じた理由がどこにあったかを、このときに至って正しく察知できた者は局内にただひとりもいなかった。

「ごめんなさいねアイリス、もっとあなたのお話をうかがいたいのですが、ひとまずはこれで」

「ついに、そのときが到来してしまったようですね」

アンカーがまだ、その奇怪なニュースの内容を知りもせず、当然ながら何がおきたかロに出すこともなかった、にもかかわらず。

知性あふれる美貌に憂いをよぎらせ、アイリス・ウォーロックは預言者の言葉を、とととのった唇より紡ぎだした。

「私たちの『危機』が……」

「だけどっ!!　どうしたらいい、どうにもならないの!?」

罪のない三頭の馬と銀剣草との巨大な『合成獣』を目前にして、風に乱される髪を押さえるのも忘れてあきらは叫んでいる。

「救えるかというなら無理だ。それとも、俺たちの手で始末をつけるべきか否かという話をし

ているのか?」

厳しいほどに現実的な科白を、守護者ライアは加減することなく彼女につきかえす。ぐっと唇をかみしめてあきらは返答に、寸時の間をおいた。

「以前と同じだ……司杖を暴走させた結果ならば、執着はあきらに向かうだけだ。危険だ」

ライアよりもさらに踏みこんだ警告を、イオが口にする。とうにわかりきった、あきらが充分に理解していることであっても、気遣う者のがわの言葉は伝えねばならないとする判断だろう。

「放置しておけばあきらの在気を求め、どこまでも追ってくる」

「軍が出動するよりは早いほうがいい」

ガディスがぼそりとつけたした。

「とっくに奴ら、すぐそこまで近づいちゃいるがな……。少しでも雷雲で目隠しがきいてるうちがチャンスだ」

「どっちみちこのままほっといても可哀想だよ、あきら」

あきらの胸中を斟酌しつつも、ユーマが最も率直な気分を告げた。

「うん……」

くやしさは捨てきれず、あきらはこくりと首を縦に振る。

アスヴァルのおこないを阻止しえなかった、不充分な自分の力への。

どんな他人にも負わせられぬ、くやしさ。

「……わかった……」

それから。

「なら守護者ライア！　今から言うことができるかどうか教えて」

逡巡をふりはらった勢いで、毅然とした声をあきらが発する。

「何なりと」

「四人のつくった結界であのまわりを囲んで、その内側をあきらが転移させる！　あの獣は殺さないで〈晶月界〉の泉に沈める、それじゃ駄目!?」

「……」

一瞬、琥珀色の双眸が呆れたようにあきらを見つめかえして、この意地っ張り娘はと呟いた。いつもと違う色合いの、光つかさどる者の瞳でも、そうした表情だけはあきらの見知った兄のものと変わらない。

「ではリクエストにお応えするとしようか」

大袈裟に観念した口ぶりで光使ライアはあきらの頭に掌を触れさせたと思うと、居並んだ三名の同胞にまなざしで展開をうながした。

「かまわねーがな。俺のやりかたはちょっと乱暴になるぜ」

炎使ガディスが真っ先に言って、あきらを護る空中の位置からクレーターを挟んで反対がわ

へと、いちはやく離脱していく。
「ってことはぼくがフォローしなくちゃならないってことかな」
不審げにユーマがそれを見送ってぼやいた。炎が余分に燃えれば水をかけるのが彼の役割である。
「ここがどこかを考えると、穏やかには済みそうにないな」
ライアが答え、げげっとユーマは顔をしかめる。
「ガディス!!　この山、噴火させるのだけはなしだぞ!!　二百年黙ってる休火山だぞ、かっとばしたらおおごとだぞっ!!」
「ちっ、だめか」
遥か遠くでガディスが吐きだしている。どうやらその気だったらしい。ユーマは真剣に頭を抱えた。
「そんなことしてみろ、地下水脈にたたきこんでやるっ!!」
怒鳴りながら自分も怪物の周辺をまわりこんでクレーターのへりにユーマは降り立ち、手元にあつめてあった水流の鞭を大きくうねらせると、それをひどく広い円のかたちに流して解きはなつ。結界の下敷きにするためだ。
「何、ちょっとだけさ」
悠然とかまえたガディスの科白とともに、ドォン、ドォン！　と連続して地表から灼熱の火

柱があがった。巨大に成長した銀剣草（シルバーソード）の葉先が、不意に発生した炎にあおられ不気味にばりばりとざわついた。

「うあーっ、おまえっ!!　マウイ島二百年の歴史を!!」

「洒落（しゃれ）の通じない野郎だな、こんなん噴火のうちに数えらりゃしねーんだよ！　俺様には節度があるからな！」

怒鳴りあいは活動的なふたりに任せるかまえで、風使イオは使鍵ザードに静かな命（めい）を下し、吹きあれる冷気の流れを規定する。

「俺が上空を抑える。ライアは地上を」

「了解だ」

黄金の髪のかげに潜められていた頭環（サークレット）をひきぬき——長剣の形態へと変化するディレイ・ルナクを片手に、光使ライアが信頼をもって応じた。

そして。

「あきら、俺をスイッチだと思えばいい。結界に鍵をかけるのが俺だ、それに〈転移〉のタイミングを合わせること」

「わかった」

ライアの与える指示に、あきらはしっかりと頷（うなず）く。うまくいかなくなるような、そんな怖さはなかった。

かつて〈琅月界〉で万全に操れていたであろう奇跡と同じものは、今、この世界での自分にはおこなえない。
記憶も知識もなく、ただ直感のみで繋いでいる力だから。
けれど、経験をそだててゆくことはできる。
磨いてゆくことはできる。
ゼロのままではない。

なによりも、今は。
信じる四人への力がある。

「アスヴァルとあきらたちのことに巻きこんで、そんな姿にして、ごめんね」
苦悶のいななきを天に向けて発する、その異形のものへあきらは呟く。
「あなたたちは何も悪くないのに、ひどいよね。ごめんね」

四つの使鍵がそれぞれに自らの働きをはたし、共鳴する。
守護師団の長、光使ライアが——
「界をわたり、守護の名を授かりしものが命じる——」

かがやくルナクの剣をかざし、黒の大地に振りおろす。
「封印の楔――ライエノーツの光刃により、締結す」
今だ。
「ガース!!　転移!!」

音も、衝撃も、揺動も、なにも生まれはしなかった。雷雲のとどろきだけが、なごりとばかりに天を横切っていった。
まさに魔法の呪文をつかったように、クレーターの囲みの内部は、いっさいの跡をのこさず元通りの静寂をとりもどしていた。

6

「報道規制もできずにいたとは、あんまりお粗末なミスだよ」
ハレアカラ山頂における『巨大怪物』とやらのビデオ映像が、テレビのニュース番組で一般視聴者にまで提供されてしまった事実に、東京都・港区在住の自称平凡な独身青年こと篠崎『デューン』一砂は各種パーソナル・コンピュータだらけの自室において、いかんともしがたい

溜め息をついたものだった。

「〈カンナギ〉に根ざす者のはしくれ中のはしくれとしても、恥ずかしすぎて身の縮むお話だ。さぞかし君の胸は激しく痛んでいることだろう」

「何がはしくれ中のはしくれだ、特権階級のボヘミアンが……」

彫りの深い顔だちをきつくしかめ、実直そうな黒髪に灰がかった瞳の――ネイティヴアメリカンの血をかすかに受け継ぐ諏訪『ウォーリー』一巳は苦い科白を吐きだす。

その苦さは、客人が自分でコーヒーをいれねばならないこの部屋で、うっかりネスカフェ・プレジデントの粉をカップの底が一センチ埋まるほど大量に注いでしまったため、だけではないだろう。

「ぼくの境遇が羨ましかったとは初耳だ。なんなら、たまにお互いの役職をいれかえてみようか？」

椅子のうえに両足をもちあげてあぐらをかき、自分専用のコーヒーカップを優雅にかたむけて――中身はインスタントコーヒーに粉末クリームだが――篠崎一砂はちらりと笑う。めったに彼の居城を訪れる機会がない、この〈覡の属〉アジア第二支部『特務官』ウォーレン・一巳が目前にいることを、実はたいへん嬉しく思っているのだが、それにしては心の寒い話題しか現在はなかなか見つからないのだった。

「ウォーリーにはぜひ紅白のボーダーシャツを着て、ボヘミアンな生活を謳歌してもらいたい

ものだよ。ああもちろん、丸眼鏡とステッキも忘れずに」
「王子と乞食か。顔がちがいすぎるな」
はなから冗談の相手にはのらず、ウォーレン・一巳はきまじめなコメントを返す。
「俺にはこうして小回りのきく、物騒な立場のほうが似合う。ところで――」
そこでふと、この冷徹にして無慈悲なカンナギの〈将校〉と呼ばれる人物は、なにかひどく釈然としないようすで不意に口をつぐんだ。
「デューン、ここには女がいるのか？」
「何だって？　ぼくが？　まさか」
もとから痩せている肩をそらして、一砂は両腕をひろげる。
「部屋の掃除に、ヘルパーの女の子がくるけどね。気配があるとしたらそれくらいだな」
「そうか」
デューン・一砂の女嫌いが克服されたわけではないと悟り、ウォーレン・一巳は古くからの関係者として複雑な沈黙を漂わせたが、それを長続きさせはしなかった。
「――目下の問題は、アイリス・ウォーロックだ。あれが何者かということだ。心当たりはあるか？」
「アイリス・ウォーロックが？　いんちき美形作家のかい？」
やれやれという気分をそのまま表情に出して、一砂が褪せた茶色の髪を指の先でおさえつけ

た。

「そんなところでひっかかってるのか！　なるほど、報道規制どころじゃないわけだ。もう駄目だ、〈覗の属〉活動終結宣言を用意したほうがよさそうだ」

「デューン、我々は真面目にやっている」

「あんな悪趣味なペンネームを考えつく人間なんて、そもそも信用するにあたらないじゃないか！」

「昨年以前の、いっさいのデータがない。謎の人物だ」

「ぼくの見解なんてただで教える筋合いはないな」

あっさりとデューン・一砂は冷たい言葉で彼をあしらう。

「どうして君がその足で会いにくるとなると、ぼくは毎回こんな低レベルの相談しか聞かされないのだろうと思うよ」

「すまない」

そこでまたきまじめに謝る男だから、一砂は面白がって苛めるのである。反応がかわいいのだ。

しかたないというふうに、椅子からは降りずにデューン・一砂は空にした自分のコーヒーカップを相手へと掲げてよこし、

「コーヒーとミルクが小さじで一杯ずつだ」

顎でこきつかう態度で依頼したあとに、求められた助言を、あくまでも渋々と――口にした。

「あの坊やはまずキャンペーンをはるところから始めただけさ。古今東西、支配者が君臨する条件のひとつにはたいてい、外敵の脅威というものがあるじゃないか」

アイリスとは、花の名であるとともに、虹の女神イーリスのことでもある。ウォーロックの姓は「魔術師」の綴りを違えたものだ。いずれにせよロマンティシズムに溢れる、耽美的ともいえる呼び名だろう。

「ああ疲れた」

端正な、ルネサンス彫刻の美青年を生身にひきうつしたような造作の頬に指をあてて、やっと遠慮なくあくびをしながら、作家アイリス・ウォーロックはマサチューセッツ州ボストン郊外の屋敷に帰還する。

「おかえりなさいませ！」

扉のそばで年若いメイドのルウ・シルヴィアンが、やはり年若い主人の、オーダーメイドの上着をうけとった。

「わたくしもテレビを拝見させていただきました！　たいへんお美しく、実物どおりに映ってらっしゃいました。わたくしビデオデッキを三台もまわしてしまいました！」

「ふうん、おもしろかった？」

「それはもちろんです」

ルウ・シルヴィアンは、かわいらしい姿にあわぬ豪胆な感想をのべる。いまだにこの屋敷で変わらず働きつづけていられるという事実に、彼女の、ただものでない素養は既に発揮されている。

この、ボストンにあって、ボストンにない屋敷に。

「メリッサがしつこくディナーに勧誘してくれさえしなければ、ぼくももっと楽しかったんだけど……。香水の匂いが妻いんだ、着替えてこなくちゃ」

プラチナブロンドの髪を憂鬱げにゆらして、青年の姿は足早に彼の私室へと向かった。たしかに女物の香水が薫りすぎだとルウ・シルヴィアンも受けとったジャケットをながめて眉をしかめ、そのことはあえて黒髪の上司に報告せずさっさとクリーニング業者の袋に突っ込むことにした。

三十分後。

自室のシャワールームから現れたクリストファー・ローディン・ジュニアは——そう、十三歳のクリストファー・ローディン・ジュニアである——、その美しい白金の髪も充分に乾かないまま、ガウン姿で書斎へ足を運んだ。生クリーム入りの熱いココアがのみたいなと、先刻の

うちにリクエストしておいたのだ。
「おつかれさまでした」
果たして、見事なタイミングでもって、湯気をあげるマグカップをトレイに載せたエドウィン・アーサー・カンナギ・クレイトンが彼の到着を出迎えていた。
「素晴らしいビデオが録れましたよ。はずかしながら、みとれてしまいました」
「なんだかねえ、ぼくは何をやってるのかと思っちゃうよエドウィン」
マグカップをうけとって窓際の椅子にすわりこみ、クリストファーは肩をすくめる。
「案外、カメラの前で笑いださないようにするの大変なんだよ。よっぽどつまらないこと考えてないと役者なんてできないよ。円周率をぜんぶ数えるとか……」
「もしかして、アイリス・ウォーロックにはもう飽きられましたか?」
「べつに。アイリスはまだ使えるよ。でもテレビは疲れるなと思ったんだ。今度のインタヴュアーはエドウィンがやってよ、そしたら少しはマシなんだけど」
「ますますカメラの前で、『にらめっこしましょ』な状況になりかねませんね」
エドウィン・アーサーは深刻に、その場合の弊害を考えて首をひねっている。それはそれで、楽しい体験にもなりそうだったが。
「だいたい、人の気分ってドミノみたいにいっぺんにバタバタ倒れてくから、簡単すぎて手ごたえがないよ。ほんのちょっとした操作でがらっと一つの風向きに流れるじゃない? あれで

本人たち、自分でおかしいと気がつかないのが不思議だよね」

クリストファーがぼんやりと言う。

その言葉は、少年のなかに野心といえるものが存在しないからだと……エドウィン・アーサーはひそかに考える。

過去、あらゆる権力者、あらゆる王は、万民の心が自らの采配のもとにゆれうごくさまにこそ恍惚を覚えていたであろうに。

独裁者アドルフ・ヒットラーが良い見本だ。

「私は俗物ですから、彼らの不安もわからないではありませんよ」

「ふうん？　そうなの？」

「だからこそ私は、彼らをクリス様に出会わせてやりたいのですけれどね」

「でもぼく、エドウィンは一人で充分だよ」

お気に入りのハーシーズのココアをすすってクリストファーは、いまひとつ解釈の難しい科白を吐いた。エドウィン・アーサーは一瞬まばたきをしたが、正しい意味にとれた自信はなかった。

「まあね……それでもさすがに、世界中の人間がまじめに『宇宙人』の侵攻なんて信じるようになったら、けっこうギャグで面白いかも」

ひとりごとの流れにのせ、さっきよりは興味のふくらんできた様子でクリストファーが口元

に指先を触れさせた。
「では、いよいよ次の本を出版させましょうか？」
「うん。それでちょっとライエノーツの人たちには、侵略者の濡れ衣かぶってもらおうかな。こっちもしばらく忙しいし」
一石二鳥、だ。
こうして忙しくしていられることに、クリストファー・ローディン・ジュニアの場合、地球全土をまきこむだけの重要な価値があるのだった。エドウィン・アーサーは自らがそこへ立ち会っている、この現実がたしかなものであると知っている。
それでいい。
他に求めるものなど、ありはしないのだ。
「お食事になさいますか？」
「どうしようかな……これ飲みおわったら、少し寝ようかな。奏太とね、あとで南極までオゾンホールを見にいく約束をしてるんだ」
「なるほど。良いお友達をお持ちになって、なによりです」
表面ではにっこりと頷いたエドウィン・アーサーを、クリストファーは上目遣いに眺めて、わかっていたこととはいえ感心せざるをえないといった口調で呟いた。
「エドウィンって心、狭いなあ」

「とんでもありません！　心頭滅却すれば火もまた涼し、どんなことにも寛容である心構えはできておりますからね」

「それって嘘もずっとついてれば本当って意味だっけ？　まあいいけど」

こだわらずにクリストファーはマグカップを窓べりにおろし、ガウンの襟をあわせると、じゃあエドウィンまたね、おやすみなさい、といつもどおりの挨拶を告げた。

「おやすみなさいませ、どうぞ良い夢を」

整った英国英語の発音でエドウィン・アーサーも彼に応じる。毎日の、その言葉を交わせる瞬間こそが、現在のエドウィン・アーサーにとって最も幸福な時であるのかもしれなかった。

7

そして今日もまた太陽は、蒼穹をあざやかに彩っている。

ちっぽけな人間たちの心の在り方など、はじめから眼中にないように。

「あんまりきれいな青空を見ると悲しくなるってのは、どこの詩人の言葉だったかな？」

コカコーラの炭酸を舌先で舐めつつ、来生貢はそんな問いをバーカウンターの内側に投げかける。

連日、ホテルのプールに通ってはカウンターにはりついているだけの客というのも、いやな客である。来生閃はじろりと親しみのない眼差しで弟を一瞥すると、プールサイドに視線の方向を移した。

「あきらだったら今日はいないよ、お兄様にとられた」

調子がのらない口ぶりで貢が補足説明をした。道理で、ますます貢がカウンターから離れなくなるわけである。閃は小さく溜め息をつくと、返せる言葉を心の、ひどく不格好な容器のなかから捜しだそうとする。

「青い空が嫌いだという歌なら、知っている」

「……詩情のない奴だな、おまえ」

「生きている以上、空が青いこともあれば、暗いこともある。俺にはそうとしかわからない」

「本心だとしたら嬉しいセリフだよ。ぼくは基本的にあんまし、おまえの生きのびる姿勢ってやつを信用しちゃいないからね」

今まで散々うらぎられてきている恨みは、水使ユーマの経験上、たやすく消せるものではない。貢はわざと疑わしげに横を向き、せいぜい拗ねてやる。

「ガディスにも似たようなことを言われた」

「そりゃそうだよ。おまえの人生観は誰が見てもどう見ても困ったちゃんなの！」

「どうにかなるものだと答えておいた」

「……。やな甘え方、憶えたな」

とたんに重い頭痛がふりかかってきた表情で、貢はカウンターにこめかみを打ちつけている。

「いいよ、わかってるよ、どーせぼくが毎度毎度、ひとりでみんなの分、心臓を痛めてりゃいいんだ。そーゆー運命なんだ初めっから」

「おまえがいなかったら、本当に、俺たち全員がどうしようもなくなる。つまり……アキレス腱だ」

「プレッシャーまでかけてもらえて有難いかぎりだ。あああ」

褒めたんだが、という閃のつけたしは、いつものことながら、あまりにも控え目であったかもしれない。当人の耳に届いたかどうかは定かでなかった。

「そういえばライアが、次の引っ越し先、どこか希望の土地があるかって訊いてたよ。おまえはどうしたい？」

カウンターから立ち直って貢が、新たな話題を口にした。

「別に……」

淡々と、閃は首を横にふる。自らの容姿のことだけをとれば、ちょうど日に灼かれたような金褐色の髪も、浅黒い肌も、この南の島ではたいへん過ごしやすいものだったが……。

どんな場所へ流離しようとも、苦痛にはならない。

独りではないのなら。

「ただ、できれば……あきらが、学校に通える環境ならば、いいと思う。それが無理でも、せめて……友達をつくれるような……」

「……いいこと言うな。たしかにそのとおりだ」

閃の出した条件に、貢もああそうかと深く納得した。

ひとつところに長くは留まらず、なるべく自分たちの所在を摑まれずに、そして敵に攻めこまれる弱点を少なくしておくべきとするのが……礼神官アスヴァルのたくらみを阻止するにあたり、ライエノーツの総意として選んだ結論である。

友達をつくるという行為が、その前提と、うまく溶けあうか否かはユーマにも知れない。しかし大切なことだ。この世界で生きてゆくための、根幹の部分だと思えた。

かかわっていくこと……。

「今日中にガディスがパスポート一式を仕入れてくる。そしたらきっと早めに引っ越しだ。山での騒ぎが大きかったからね、ライアは用心したいと思ってるみたいだ」

「わかった」

こくりと閃は首肯し、改めて、詩人流にいうならば泣きたいほどに澄んだ青空へ、瞳を向けた。そのときになってやはり、どれだけ執着を薄めても——ひとたび身を置いた楽園との別れには寂しさを感じる自分の心を、不思議な感慨とともに知らされていた。

海辺沿いの景色が、勢いよく背後にとんでいく。一陣の、西からの風がどっと身体を通過してゆき、あきらは清涼なその大気に拭い浄められる思いになる。

「うあーっ、いい匂いだっ」

「どうしたんだ、ポップコーンの屋台でも嗅ぎつけたのか?」

あきらの目前でペダルをこぐ兄の背中が、実に色気のない科白を返してくる。もちろん、わざとだ。

「ちがうっ!! 海の匂いっ!!」

「はいはい」

「ポップコーンも買うけど!!」

「はいはい」

姫君に忠実な運転手は、おとなしく頷いて自転車を先へ進める。うしろの荷台で、その態度にまたなんとなくバカにされたような気分であきらはくっそーと唸った。

安全性を考えるなら自転車の二人のりには賛成できないと、衛は当初あきらの注文に難色をしめしたのだが、でもえーちゃんはあきらがどこで転がり落ちてもぜったい助けるよねという姫君の断定には、たしかに異を唱えなかった。策士プライドに溺れる、と的確すぎる皮肉を彼に進呈したのはソニー・ウォークマン・エクセルである。

「あきら、どこにいきたい？」
衛がふと、ふりむきはせずに問いかけた。
自転車のハンドルを向かわせる目的地を尋ねたと考えるのが、自然なのだろうが……。
「うん……いろんなとこにいきたいな」
にぎやかなビーチの活気に負けず、あきらは声を大きめにはりあげる。
「いまはね、うんと世界を知りたいっていうふうに、思う。変かな？」
「頼もしいな」
先行きを悲観するのは、あきらには似合わない。
流転しつづけ、安息を保証されない、そのさだめを嘆くなら簡単だろう。
「せんちゃんがね、ここの風が歌ってることを教えてくれた。すごいカッコイイんだ、あきらの秘密の呪文にする」
衛の両肩に手をかけてぐいと後ろから身をのりだしながら、あきらが言った。こら、と衛が左腕をもちあげてその頭を小突く。
「アクロバット厳禁だぞ、あきら」
「大丈夫！」
ひろびろとした舗装路が、ぬける青空と深緑のヤシの木と、海風とに包まれて、ダイヤモンド・ヘッドの山影がそびえる南の方角へと伸びてゆく。

「そうか。あきらの秘密の呪文ということは、俺には教えてくれないのか」
「う。……だって、ええと……せんちゃんに訊いたら、ただで教えてくれるよ……ってんじゃ駄目？」
「なるほど。そういう姫君には……」
眼鏡を落とさぬよう、しっかりとかけなおしたと思うと、変速ギアを倒して衛は一気に車輪の回転スピードを倍増させる。うぎゃぎゃぎゃっと後ろの荷台では悲鳴が——いや、歓声があがった。
「すごいすごい、えーちゃん最高だっ！」
「あきらと一緒にジェットコースターに乗るのは考えものだな」
やれやれといわんばかりに衛はひとりごちるが、溜め息と見せかけて、静かな笑みをこぼしていた事実は否めない。めぐる車輪の軌跡は、とどこおることなく、遥かに、どこまでも走りつづけてゆけるようだった。

【用語解説】

琅月界……球形の閉鎖世界。月斎の地と呼ばれる。多元世界のなかで、もっとも高位に存在し、非常に恵み栄えた。

炯月界……物質と精神の世界。現代の地球社会そのもの。

晶月界……永遠と無限の世界。さまざまな世界の狭間に存在し、高位の神官か、エクサールでなければ立ち入れない。界境とも呼ばれる。

エクサール（界使）……異次元世界への扉をひらき、その二つの世界のあいだに流れるエネルギーを制御する乙女。他の界から因果力をとりこむことで、「奇跡」をおこすことができる。突然変異的に生まれ、不老にして長寿。

エール（因果力）……世界・存在を成立させるためのエネルギー。

エイダ（在気）……存在・人物が発する固有の波動。

ライエノーツ（守護師団）……エクサールを悪用せんとする者から彼女を護衛し、教育し、最も身近な相談相手としても仕える、特殊能力をもった戦闘集団。

ライエス（守護者）……ライエノーツの一員。優れた頭脳、強靱な身体、高潔なる精神、精老から伝授されたディレイ（使鍵）、これらのうちいずれが欠けてもライエスとは呼ばれない。ライエスとなるのは、多くの候補者のうち、厳しい選抜をのりこえて条件を満たした者だけである。直属するエクサールがその座にあるかぎり、彼らも不老である。彼女が世を去り、次代のエクサールが生まれ、ディレイが他の者に譲り渡された時点で、死が訪れる。

ディレイ（使鍵）……自然界と交信する資格のひとつ。ライエスが特殊能力を発揮するための必須条件。象徴として、銀の聖光石に宿っている。

〈付〉ディレイ・ルナク……光を司る使鍵。頭鎖、あるいは長剣と化す。
ディレイ・ザード……風を司る使鍵。指輪、あるいは指鞘と化す。
ディレイ・ミンス……水を司る使鍵。飾腕輪、あるいは装剣と化す。
ディレイ・ローザ……炎を司る使鍵。鎖、あるいは弓と化す。

精老……生命も肉体ももたぬ、不死の存在。自然のうちに宿る。

神官……精老およびエクサールと交渉をもち、その恵みを人間社会に活用する存在。特に、大神官、主神官、礼神官の地位を高位三官とする。

央界神殿……琅月界の天の中央にある大神殿。ライエノーツの拠点でもある。

ガース（司杖）……黄金色の聖光石でつくられた短刀。エクサールの能力に指向性を与え、増幅する。エクサール以外の者が持っても強力な力を与える。

あとがき

さてさてこんにちは、あとがきです！

エクサール三巻で始まった一九九五年の、最後に出る新刊が、またエクサールになるとは思わなかった。とてもとても出したくて待ち遠しかった本が、こうしてかたちになって、今は凄く幸せです！

今回の本は外伝集ともいえるし、シリーズの四巻と呼ぶこともできると思ってます。物語の区切りがきちんとわかるようにしたくて、今度から『エクサール騎士団（ラィテ）』というタイトルの使い方を変えて、巻数表記もしないことにしました。これまで三冊分おつきあいくださってる読者の皆さんも、ここで初めて本を手に取ってくださった方にも、この一冊、充分にお愉（たの）しみいただけたら嬉しいなと心から祈っております。

如何（いか）だったでしょうか？

面白く過ごしていただけたでしょうか？（え？　これから読む？）

ご意見ご要望、その他各種の疑問・批評・雑談、などなど、どんなことでも感想のお手紙をいただけましたら、なおいっそう幸せです。

イラストの羽音こうきさんには今回もまたまたまた（もう……毎回……）苦しいスケジュールを強要してしまって、本当に申し訳ないのですが、美しいプラチナの王子様と忠義者のお兄さんで表紙を飾っていただけて、またまたまた幸福に浸る私なのでした。ふふふふふ、ありがとうございます。

この本は、大昔に書いた話と、ちょっと昔に書いた話と、今の自分に書ける話とを順番に並べたようなつくりになってしまって……。まとめて自分で読んだら「うげげえっ、恥ずかしいーっ!!」とゆー感じでした。成長記録といえばかっこいいが、なんか昔の写真を眺めて「こ、こんなカオしてたのか俺」とがっくりするような……。文章、輪をかけて下手くそなのは勿論のこと、時間があいてるから「しまったーこれじゃ話に矛盾点が!!」なところが後から見つかったり（今回あわてて直したけど雑誌で読んでる人にはバレまくりなのだ）して、ああもうみっともないったらありゃしない。

でも、昔の自分の写真をふりかえって「あっ写真うつり悪いわ!!　最悪!!」なんてことばっかり言ってるのは、やはり悲しいというか、人生後ろ向きやねというか、そんな話聞かされるがわの人も淋しいよねと思うので、なるべくなら「まあ、このころの私も幸せそうな顔をしてるわ（だがしかし今の私の幸せにはかなわないわね！　ほほほ！）」と言える人でいたいなと思います。いやー、なかなか、そういう生き方をするのは難しいものだが……。

『あらかじめ失われた恋人』

林田健司さんの２ｎｄアルバム「Unbalance」を聴きながら書いてました。

このＣＤの五曲めに「あらかじめ失われた恋人」という曲があって……ガディス兄ちゃんといえば、これが私のなかではテーマソングなのです。っておまえタイトルそのまんまやんけ……うう、すいません。

実はエクサールの二巻を書いてるときかな、羽音さんに「エクサールのイメージに合うＣＤだと思うのよ」と教えてもらったのだよね。へへへ懐かしいね（照れるぜ）。当時住んでた街の喫茶店で、ディスクマンで一曲めのイントロ聴いて「ぎゃーっかっこいいぜ!!　こんなかっこいいエクサール書けるようになりたいぜ!!」と思った瞬間を今でも憶えている。私は基本的に物忘れのはげしい人間なのですが、このとき喫茶店の中のどの席に座ってたかなんてところまで、こういうものは心に残っているのです。

林田さんは今もずっと好き。ライブにも行く。新作が発表されるのを、いつも楽しみに待っているのでした。彼の音を聴くと頭がエクサールモードに入るのだ。なので、エクサール以外のものを書いてるときは聴けない。

んでもってこの話は雑誌のコバルトで「若木未生特集」を組んでいただいたときに、「小説三本立てをやりたい」と私が言いだして、ＸＡＺＳＡとグラスハートと一緒に書いたものでし

た。三本もつめこんだので枚数制限が厳しくて、本当はさつきにガディス兄ちゃんのニューヨーク版の名前をつけてもらいたかったけど諦めた。今回、あれこれ書き足しや修正はしたのだけど、やはり名前は決めてもらえなかったね……。

『翠玉の王』

矢野顕子さんの「すばらしい日々」を聴きながら書いてました。

ユニコーン（という私の好きなバンド）の最後の曲でもあるんだけどね……矢野顕子さんのピアノと歌にかかると、また完全に別の曲で、私はどちらのバージョンも大好きです。

矢野さんのバージョンを聴くと必ず涙腺がだーっとゆるんできてしまう。

その「くーっ泣ける」という、涙が出る寸前のような感情を大切にして、正直に書きました。

自分に書けるかどうかわからない、未知のものを書こうと挑戦して、それまで書いたことのないものを書いたので、感慨深い話です。もっとうまくできたら……ってのは、いつも思うことですが。でも尻込みして書くのをやめなくてよかった。

エドウィン・アーサーが見ていたセザンヌの絵は、テイトギャラリーのものです。三年前かな、私がひとりでロンドンにいたときテイトギャラリーに行って、その絵を凄く好きになったけれど、絵葉書で見ても「これじゃない」と思う。そのときの気持ちや、ギャラリーに行くま

でのみちのりで見たものだとか、そんなものがぜんぶ絡まって「好き」だったんだろうな。
（しかしエドウィン・アーサーの卒業した大学……じ、実は私はケンブリッジという心づもりで書いてたんですが……二巻を見ろーっ!!　ケンブリッジの頭文字はCだろう若木!!　まさに消せない過去の恥とゆーやつだ!!　だーもーほんとに恥ずかしい。いや本当はケンブリッジのキングズ・カレッジなんですよ……ガクッ。通用するわけないよなやっぱりな）

『ハレアカラ異聞』
貴水博之さんの「目を覚ませ」を聴きながら書いてました。
このごろ最高に惚れてる曲。
もったいないから多くは語らないが。
歌い手としてのその力に、書き手としての私も負けずにいたいなと思って書いた。
かきおろしのページ分、最初は、前の二本とのつながりを考えて、もうひとつエドウィンとクリストファーとガディスの三人が絡む過去編を書こうかなとも企んでいたのでした。また例によって、すんごい暗い陰謀物みたいなやつをですね……。だがしかし。
今いちばん書きたいものを書こう！　と思ったらこうなってました。……何故だ。何故キングギドラなのよう。（笑）
夜中にいきなり仕事部屋から出てきて「きき、キングギドラってどんな奴だっけ？」と訊く

私に、万能マネージャーNはすかさず戴き物のぬいぐるみを指差して「これよっ」。んなわけで私の机の上には現在、ぎどらちゃんが座ってます。かわいいんだこいつ。

（そしてまた次の日には「ウォーリーを探せのウォーリーはどこー!?」と訊きにゆく私）

たしかもともとは最後のシーンの、自転車に乗る二人が書きたくて、それだけが目当てで書き始めた話だったんだけど……。だから何故アロハな閃ちゃんなのよう。

おとなしく番外編を書いてられなくて、結局、これからの物語の展開を準備するような内容になりました。せっかちな性分ですね。あきらちゃんはまんま成長途上としても、ライエノーツの皆さんは精神的に大人な連中（の、はず……）なんですが、やはりなにかと未熟者な人達なので、日々変化して今までとは違う位置に向かってる。そういう部分をさがすのが楽しいのかもしれません。

そういえば一応、キャラクター総登場をめざしていた。全員はさすがにムリだったな。ルウ・シルヴィアンちゃんが出てくれて私は嬉しかったです。

存分に、書きたいものを書くことができたと今は思ってます。本当に楽しかった。

あとはここから先、いっそう楽しく物語を進めていくだけですね。頑張ります。

この本から新たに担当していただいてる、コバルト編集部・菊池さまには、ぎりぎりまで原

稿をお待たせしてのっけから大迷惑をおかけしてしまいました。深く深く、お詫びと、御礼を申し上げます。

それから、毎度しょーこりもなく困ったちゃんな私を支えてくださっている、すべての人と音楽と猫に（笑）、心の底から感謝を捧げます。

そして、読んでくださる方に、もうどうしていいかわからないくらい、いつも感謝しています。どうもありがとうございました。

受験生の人。学校や仕事で苦労してる人。他にも、つらいこと、めざすこと、わからないこと、いろいろある人。私、特別なことはなんにもできないけれど、この場所でがんばることはできる。一緒にがんばろうぜ。

また近々、お会いすることができれば幸いです。

若木未生

（付記）「翠玉の王」本文中の、聖書の引用は、日本聖書協会の訳に拠るものです。

〈初出誌一覧〉

「あらかじめ失われた恋人」……COBALT　'94年2月号
「翠玉の王(前編)」……同　'94年10月号
「翠玉の王(後編)」……同　'94年12月号
「ハレアカラ異聞」……書き下ろし

この作品のご感想をお寄せください。

若木未生先生へのお手紙のあて先

〒101—50　東京都千代田区一ツ橋2—5—10
集英社コバルト編集部　気付
若木未生先生

わかぎ・みお

1968年12月２日、埼玉県生まれ、都内在住。射手座、A型。1989年４月『AGE』で、第13回コバルト・ノベル大賞佳作入選。好きなものはマンガと音楽と猫。最近はネスカフェ・マイルドタイムとNEC98マルチが孤独な仕事場の友である。趣味は引越し。(早く引越したいぞ！)コバルトシリーズに『天使はうまく踊れない』『セイレーンの聖母』『十字架の少女』『迷える羊に愛の手を』『炎獄のディアーナ(前編)(後編)』『天冥の剣1～4』『エクサール騎士団1～3』『XAZSA Ver. 1～2』『グラスハート』『薔薇とダイナマイト』『星を堕すもの(前編)(後編)』などが、また単行本に『天使／来撃』がある。



翠玉(すいぎょく)の王

COBALT-SERIES

1996年１月10日　第１刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　若木未生

発行者　若菜正

発行所　株式会社集英社

〒101－50
東京都千代田区一ツ橋２－５－10
(3230) 6268 (編集)
電話　東京 (3230) 6393 (販売)
(3230) 6080 (制作)

印刷所　株式会社美松堂
中央精版印刷株式会社

© MIO WAKAGI 1996　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本はご面倒でも小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-614149-3 C0193

コバルト文庫

〈好評発売中〉

命にかえても、巫女（エクサール）を守る！

エクサール騎士団（ライエノーツ）1〜3

若木未生

イラスト／羽音こうき

多元界の因果力（エール）を制御する者、その名はレア…。不思議ファンタジー！

十歳のとき事故で両親を失った少女・あきらは来生芳秋（きすぎよしあき）の養子になった。そこにはあきらと同じ境遇の衛（えい）・閃（せん）・貢（みつぐ）がおり、4人は兄妹として育った。一見、ごく普通の家庭…に見えるが、実は3人の兄たちは、あきらを守るための異界からの使者で…。



〈好評発売中〉 コバルト文庫

熱いハード・ビート小説！

若木未生 〈グラスハート〉シリーズ

イラスト／橋本みつる

グラスハート

深夜、朱音のもとに奇妙な電話が。「大至急、あんたのドラムが欲しい」それは天才音楽家・藤谷からの誘いの電話で…！



ステージを終えた直後、尚と藤谷先生が絶交宣言!?理由が分からず、朱音と一至はボーゼン。そんな時、ようやくCDデビューの話が…。

薔薇とダイナマイト

〈好評発売中〉 コバルト文庫

機械人間（マシノイド）ザザと少年たちの人気
シティサイバー・ファンタジー。

XAZSA（ザザ）
Ver.1 Ver.2

若木未生
イラスト／田村純子



夜の銀座の街角で、休業中のギタリスト・京平が偶然出会った少年ザザ。彼は、天才少女の優亜につくられた国家機密級（トップシークレット）の機械人間（マシノイド）だったのだ…！

コバルト文庫

〈好評発売中〉



術者ＶＳ妖者の凄絶な戦いが、今…！
大人気のアクション・ファンタジー。

若木未生の本

〈ハイスクール・オーラバスター〉シリーズ

イラスト／杜　真琴

天使はうまく踊れない

セイレーンの聖母

十字架の少女

迷える羊に愛の手を

炎獄のディアーナ(前編)(後編)

天冥の剣1~4

星を堕(お)とすもの(前編)(後編)



好評発売中 **単行本** 〈A5判・ハードカバー〉

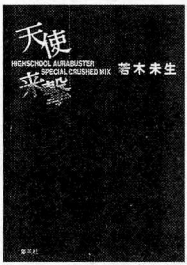
あのオーラバスターの魅力が
ぎっしり詰まった一冊！



若木未生

天使／来撃

HIGHSCHOOL AURABUSTER
SPECIAL CRUSHED MIX



第一部完結から一年を記念してついに作られたオーラバスターの単行本。デビュー作や対談、エッセイなど、スペシャル企画満載の特別短編集！杜　真琴の描きおろしイラストつき。